

預め彼等を訓練し置く必要上、多數よりも寧ろ少數の弟子、しかも己れと寢食を共にする少數の弟子を、彼等の中より選抜するの急務なるを感じて、十二人の弟子を立たのである。その十二人は單に彼の傳道旅行の同伴者たるに止らず、其事業を繼承する大任に當るべき準備をなす所の學生であつた。されば耶蘇在世中の事業の重なるものは、民衆を教ふるよりも、寧ろ將來の使徒たるべきものを教育する事であつた。

耶蘇に選抜された十二人の弟子等が、どんな身分の人々であつたかは、少數のものゝ外は知られて居ない。ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人の、漁者であつた事だけは明である。またマタイの税史であつた事も、その自白に依て知られて居るが、他の弟子等の事は全く不明である。けれども彼等がいづれも當時の社會に名を知られたものでなかつた事だけは明白である。彼等の中には一人の學者もなく。偶學者に議論を仕向けられても、容易に答辯の出來ぬ程の無學者であつた。彼等の團體の重なるものの、漁者であつたのを見ても、彼等の社會に於ける位地を察する事が出来るであらう、素より漁者なりとて必ずしも身分の賤しいものとも限らないが、それでも終日

海上にて働く人々なれば、よし其生活は多少裕福であつたにしても、社會に知られた有力者でなかつた事が明白である。

耶蘇が是等の漁者等を其弟子とするに當り、甚だ興味深き事を云はれた。それは『我に従へ我爾曹を人を漁るものとせん』と云はれた事である。是れ爾曹今まで魚を漁ることをその職業として來たが、今後は魚を漁る代はりに、人を漁ることを其業とせよとの意である。此に用ひられた漁るといふ語は、二様の意味に解せらる。一つは是れまで魚を漁つたが爲めに、今後人の靈魂を救ふ事をば、單に漁ることに比したまでの意と解するのである。一つは魚を漁ることが、人の靈魂を救ふ事に甚だ似たるのみならず、それが傳道事業に當る爲めの一種の準備となつたと解するのである。余は第二の意味に解したいのは、斯く解すれば従前の家業は、偶然にせよ、故意にせよ、傳道事業に當る善き準備と思はるゝからである。勿論彼らが傳道者たらんが爲に、漁者となつたのではないが、もし耶蘇が故意に他の職業の人よりも、漁者を選んだとすれば其従前の仕事に要した技術までも、傳道事業に利用せんとの意志のあつた事となるの

で、必ずしも是れは牽強附會の説とも云へないのである。漁業と傳道事業とは全然性質の違つたものではあるが、尙ほそれでも二者の間に類似の點も亦ないとは云へない。何となれば耶蘇は其後彼らに向つて、『天國は海に投て各様の魚を取る網の如し』（太一三〇四七）と云ふたからである。彼等は多年の實驗に依りて、海のどの邊にはどの魚が居り、どの季節にはどの魚が取れるといふ事を知つたのみならず、どの魚を取るには、どの方法に由らねばならぬかをも知つて居た。そのみならず、海上の仕事は陸上の仕事に比すれば、幾多の危険の伴ふ事も亦明かである。随つて單に勸勉忍耐を要するのみならず、時には決死の覺悟までも要する種類の仕事である。傳道事業も亦單に熱心なるばかりではなく、相當の技術と精神上の勇氣とが入る。そして一方に於ては危険を伴ふも、他の一方に於ては特別の興味を伴ふ點も亦善く似て居る。

十二使徒の選抜された時期については、路加が左の如くに記して居る、『當時イエス祈禱の爲に山に往て終夜神に祈れり夜明けてイエス弟子を呼その中より十二人を選て之を使徒となづく』（六〇一二、一三）と。また馬可が『イエス山に登りてその意に適

ふ所のものを召しかば來りて彼につけり是に於い十二人を立て己と偕におきまた教を宣傳る爲に遣しかつ病を醫し鬼を逐出すの權威を授く』（三〇一三一―一五）と記した。路加も馬可も二人共山に登つた事を記したのを見て、耶蘇が山上の説教をなすに先ちて彼等を選抜したと云ふ人もあるが、是れとても必ずしも判然した事とは云へない。約翰傳に依れば、耶蘇のカペナウムで説教をした時には、既に十二弟子の團體が組織されて居た。何となれば其説教の終つた時に、『我なんぢら十二人を簡しに非ずやされど其中の一人は惡魔なり』（六〇七十）と云ふたからである。また其説教のありし前に、ガリラヤ湖の東岸で、五千人にパンを與へた時にも、ピリポやアンデレの居つたのを見れば、十二弟子の選まれた後のやうに思はるゝ。そして其時はユダヤ人の踰越節の近づいた時分であつた。もし其時の踰越節は耶蘇の公生涯に入つてからの第二回目であつたとすれば、少なくともその十二人を選抜したのは、其死ぬる一年前であつたと見ねばならぬ。されば凡そ一年の間に、天國の奧義を教ふるのは容易な事ではなかつたであらう。特にメシヤを理解せしむるには、餘程骨の折れた事と思はるゝ。恐らく

は其存命中には十分教へ切れなかつたであらう。

十二使徒の名は福音書記者に依りて、多少相違して居るが。馬太に依れば、ペテロ、アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、トマス、税吏マタイ、アルバイの子ヤコブ、ダツタイと名くるレツバイ、カナンのシモン、イスカリオテのユダである。是等の人々の名を路加の記したものに比すれば、馬太にあるダツタイと名くるレツバイの名がなくして、その代りにヤコブの兄弟ユダの名がある。是れは其名が違つても同一の人であらう。更に或る人の名の上に加へられた語にも亦注意すべき點がある。馬可にヤコブとヨハネをボアネルケ即ち雷の子と云ふて居る。また馬可にカナンのシモンとあるのを、路加にはゼロテといふシモンとある。そしてマタイ自身が自分の名の上に、税吏といふ語を添へた。ヤコブとヨハネを雷の子と名けたのは、彼等の幼少よりではなくして、多分耶蘇の弟子となつてからの事であらう。路加の記せる處に依れば、この二人は主に對するサマリヤ人の冷淡を憤り、『主よ我等エリヤのなし、如く天より火を召降よくだしかれらを滅ほろさんとすよきか』(九〇五四)と問ふた。

彼等はユダヤ人なれば、サマリヤ人に對しては素より好意を有する筈もないが、其冷淡なる態度に接して、日頃の不快が怒となり、更に復讐の念と燃へて、斯る激烈な言となつたのである。他の弟子等の左までに憤らざるに、この二人の斯くも烈しく憤つたのは、其性質の荒々しきが爲めであらう。愛の人として知れたるヨハネの荒々しい人であつたとは容易に考へられ難いやうだが、耶蘇の感化を受けた後の彼は愛の人であつても、其元來の性質は感情的で、粗暴な人であつたであらう。憎む事や怒る事の深い人は、愛する事も亦深い。されば雷の子と云はれた是等の二人の、耶蘇の感化を受けた事の如何に深き乎も亦知れる。

更に興味深きは「ゼロテ」といふシモンとある言である。「ゼロテ」とは政黨の名で愛國黨ともいふべきものである。此黨派はロマ政府の壓制を憤り、耶蘇の傳道前二十年頃に、ガリラヤのユダを首領に戴いて、反逆を企てた事があつた。然れども當時其志を得ずして、再び屈服を餘儀なくされたが、常に愛國の精神が燃へて居た。此愛國黨の一人が耶蘇の弟子に加つたのは、何故であらう。或は彼を首領としてイスラエル

國を興さんとの野心のあつた爲めではあるまいか。他の弟子等にも多少なりとも、斯る野心のあつたからには、彼にあつたとて少しも怪むには足らぬ。ロマ政府が危険視した愛國黨の一人の、耶蘇の弟子に加つたのは、彼に取つては頗る不利益のやうではあつたが、尙ほそれにも拘はらず、之を其弟子に加へたのみならず、特に其選抜した十二使徒の一人としたのは何故であらう。是れ彼も大に用ふるに足るべき人物であつたが爲めであらう。この愛國心に燃へたシモンも、更に靈のバプテスマを受けなば、其愛國心も亦靈化されて、神國を愛する熱情と化するを耶蘇が先見したのであらう。然らばシモンの選抜されたのも亦其愛國心の深きが爲めかも知れぬ。我等は耶蘇の弟子の中に甚だ面白い對照の存するを發見せずには居れない。それは愛國黨のシモンと税吏マタイのある事である。一人はロマ政府に税を納むるを欲せざるもの、一人は其政府に雇はれて税を取立てるものである。一人は愛國者で、一人は非愛國者である。この水火の相容れざる兩極端の人物も、耶蘇の感化に觸るゝ時には、協同一致の活動の出来るのも敢て怪むには足らぬ。耶蘇の弟子の中には種々雜多の人々がある。漁者もあれ

ば、商人もあり、政黨員もあれば税吏もある。そして當時の學者と呼ばれた人や、宗教家として尊敬された人の一人もなかつた事も亦深い理由のあつた事と思はるゝ。『神は智者を愧しめんとて世の愚なるものを選び強者を愧しめんとて世の弱者を選ぶ。また神は有者を滅さんとて世の賤若藐視らるゝもの即ち無が如き者を選び給へり』と(哥前一〇二七、二七)パウロの云ふたのは、實に耶蘇の精神を語つたものである。

#### 第十四章 神の國

神の國は耶蘇の教訓の中心思想でもあれば、また其事業の目的でもあつた。彼の教訓と行爲とが、神の國といふ思想を除いては、十分了解され難きは是れが爲めである。然らば神の國とは何んであらう。

神國といふ思想は耶蘇より始つたものではなくして、舊約時代にユダヤ人の間に廣く傳つた舊思想であつた。勿論其解釋には異説あれども、此思想は決して新しいものではない。福音書には『神の國』、又は『天國』と云はれて居るが、別に其間に意義の相異がない。或學者は『神の國』と『天國』との語は、異なつた聯想を惹起し、前者は内部の國、精神上の國を思はせ、後者は未來の國を思はせると云ふて居る。斯る聯想の相異も亦習慣に依るので、必ずしも意義の相異せるものと解するの必要がない。

『國』と云ふ語は、統治即ち神の政治を指す事もあれば、其政事の及ぶ範圍を指す事もある。聖書にも此二つの意義に用ひられた實例がある。

神の國といふ思想が耶蘇以前に既に存在した事は、バプテスマのヨハネの天國は近  
けりと宣傳した事で知れて居る。『天國は近けり』とあるからには、それが久しく期待  
された事も明かである。ユダヤ人は數世紀間、神の國の到來の時機を待った。舊約の  
預言者はエホバの日、即ち其敵の亡ぼさるべき日の近きにあるを語つた。そして彼等  
の之を預言した場合は、イスラエル人の宗教及び道德の腐敗を極めた時か、若くは外  
國の暴力に壓せられた時であつた。斯る場合に人民を奮起せしめんとて、神の其選民  
に立て給へる契約を思ひ起し、地上に其主權を確立する時機の近きにあるを告ぐるの  
必要があつた。國民も亦其黄金時代をば、ダビデの王國の恢復と思ひ、之を思ひ起す  
のがその不斷の喜悅であつた。そして預言者の間にも、其王國の描き方の互に異つて  
居たにも拘はらず、其王國の來たるに先ちて審判のあるを預言した點に於ては、皆一  
致した。審判の日は即ち『エホバの日』と呼ばれて、イスラエル人を審判するものと  
視做した預言者もあれば、それが唯異邦人の上のみ加へらるるものと視做した預言  
者もあつた。また或る預言者は其國に入るべきものは、イスラエル人に限りとな

し、他の預言者は改宗した異邦人或はイスラエル人を壓制せざる異邦人も加へて居  
る。斯の如く預言者等の意見の互に相違せるにも拘はらず、神の國といふ思想に至つ  
ては、國民の間より未だ嘗て消滅した事がない。神の國の喜悅について、ゼバニヤが  
云ふた、曰『その日にはエルサレムに向ひていふあらん懼るゝなかれシオンよ汝の手  
をしなへたるゝ勿れとなんちの神エホバなんちの中にいます彼は救拯を施す勇士なり  
かれなんちの爲に喜び樂しみ愛の餘りに黙しなんちのために喜びて呼はりたまふ』(三  
〇一六、一七)と。更にイザヤは神の國を新天地として左の如くに描いた。『視よわれ  
新しき天とあたらしき地とを創造す人さきものを記念することなく之をその心にお  
もひ出ることなしされどなんちらわが創造するものによりて永遠にたのしみよろこべ  
視よエルサレムを造りてよろこびとし其民を快樂とす』(六五〇一七、一八)。

紀元前二世紀間に著はされた黙示文學も亦メシヤ的希望を描きて、舊約と新約との  
間に橋を架するの役目を務めた。されば是等文學も亦耶蘇の事業の準備をなしたものと  
なり、また福音書を解釋するに必要なものとなつた。バプテスマのヨハネ及び耶蘇

の共に『天國は近けり』と叫んだ所以も、『イスラエルの民の慰められんことを俟て  
る』シメオンや、『エルサレムに贖を望る凡ての人に』耶蘇の事を語つたアンナや、『神  
の國を慕る』アリマタヤのヨセフの如き人々のあつた所以も亦明かになつて来る。神  
の國を俟つたのは、舊約時代から間斷なく續いたものである。

マラキの預言に依れば、主の日の來たるに先ちて、エリヤがメシヤの先驅者として  
世に來たるとある。是れ人々の心を義しき道に歸らしめんが爲めで、路加に依れば、  
メシヤの先驅者たるエリヤとして生るべきヨハネについて、天使の云はれた言に『彼  
エリヤの心と才能を以て主の先に行ん是父の心に子をおもはせ逆れるものを義人の智  
に歸せ主の爲に新なる民を備んとなり』(一〇一七)とある。是れは天の使の言として  
記されたが、耶蘇以前の學者も亦人心改善の爲めに、メシヤに先ちてエリヤの來たる  
を教へ、其教によりて、國民の心がメシヤ降臨前に改善されねばならぬとの思想が生  
れ、不義なる者は、天の使又はメシヤ其者に亡さるべきものと思はれた。パプテスマ  
のヨハネが悔改の説教をなして、それに適する善行を促がし、またメシヤが其手に箕

を以て、麥と糖とを分ち、麥を倉に入れ、糖をば火にて燬くべきを語つた所以も、亦  
之に依りて明かになる。民衆のヨハネに集り、熱心に其教に耳を傾け、或るものは眞  
に悔改めてパプテスマを受けたのも、亦エダヤ文學に依て教へられたからである。

耶蘇の神國觀を知るの参考となるものは、神國を時には天國といふた事である。天  
國とは其國の所在を指したのではなく、其性質を指したのである。主の祈禱の中に  
爾國を臨らせ給へ爾旨の天になるごとく地にもなさせ給へ』とあるからには、天は  
神國の所在のやうにも思はるゝが、さて天とは何ぞと云はば、天意を奉ずる集團を指  
したのであらう。その天と云はるゝ所以は、高きが爲めではなくして、天意の行はる  
ゝ清き集團なるが爲めである。勿論其集團はこの地上になくして、靈界にあるが、天  
と云はるゝのは、その清きが爲めである。もし斯る清き集團がこの地上にもあるとせ  
ば、それは矢張天國と云はるべきものである。されば天意の十分に行はるゝ所は即ち  
其所在の如何を問はず、それが即ち天國である。『爾國を臨らせ給へ』とは、天國を地  
上に來らせ給へとの意なれば、天國は地上にも亦建設さるべきを示して居る。

ユダヤ人の神國思想は、耶蘇のそれとは大に違ふて居た。彼等は外國の壓制を免れて、獨立を謀り、平和と自由を樂む政事上の理想國を神國と解し、隨つて其神國建設者たるメシヤをも亦政事上の救主と思ふたのは、政事的逆境に陥つた彼等に取つては無理もなかつたが、耶蘇の神國思想は之に反して精神的のものであつた。神の國はいづれの時に來たる乎との「パリサイ」人の問に對して、彼は左の如くに答へた。「神の國は顯れて來るものにあらず此に視よ彼に視よと人のいふべきものにもあらずそれ神の國は爾曹のうちにある。」路一七〇二一と。此言に依れば、神の國は何處から何處までと一定の境を限つた地上の國ではない。「爾曹のうちにある」との言は、その意義不明だが、或人は神の國は爾曹の心の中にあるとの意に解し、或人は爾曹の間にありとの意に解して居る。もし前説を取らば、心の中にある靈の國となり、もし後説を取らば、目には見へざるも、既に爾曹の間に建設が始まつたとの意である。いづれにしても精神上の國たるの意が明かである。また耶蘇のピラトの法庭に於て、「我國は此世の國にあらず」と云ふたのを見ても、政事上の國ならぬ事が明かだが、此言は彼の神

國は現世と没交渉であるとの意でもなく、また來世に限られたものとの意でもない。それが地上に生存する人々の間に、其建設を始めたとすれば、現世と關係のある事は云ふまでもない。精神上的の國は現世來世の別なく、人間の精神生活の存する所に建設さるべきものである。

使徒パウロが神の國を説明して『それは神の國は飲食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂こがにあり』(羅一四〇一七)と云ふたが、是れは耶蘇の神國觀を最も適當に語つた言と思はるゝ。耶蘇自身はパウロの如くに、神國を直接に説明しなかつたが、之に入るものゝ資格を示した言に依て、間接に之を示した。彼がニコデモに對しては『人もし新うまれに生ずば神の國を見ること能はじ』(約三〇三)と云ふた。ニコデモ自身は多分己れの如き名聲あり、學識あるものが、其儘耶蘇の神國に受入れらるゝに足るものと思ふたであらうが、矢張彼ですらも新に生れねばならぬと云はれた。また耶蘇は其弟子等にも『もし改まりて嬰兒のごとくならずば天國に入ること能じ』(太一八〇三)といふた。弟子等は其儘神國に入り得るのみならず、高位を占むるを得べしと自信したが、嬰兒



のごとくに改らねばならぬと教へられて、意外に感じたであらう。また品行方正の青年教師も其財産に執着した爲め、耶蘇は彼について『富るもの、神の國に入るは如何に難哉富るもの、神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し』(路一八〇二四)と歎かれた。之に依つても亦彼の神國觀の如何なるものかを知る事が出来る。

耶蘇の神國に入る條件を教へた事を見るに、ニコデモには新に生るべきを語り、弟子には改まりて嬰兒の如くになれと云ひ、弟子及び一般の人々には『爾曹まづ神の國と其義を求よ』と云ふた。是れ義を慕ふの心を以て、神の國を求めよとの意である。また『義ことたゞしきの爲に責らるゝものは福なり天國は即ち其人の有なればなり』と云ふて天國は義を慕ひ、義の爲めに責めらるゝを懼れぬものに與へらるゝの意を示した。更に『心の貧きものは福なり天國は其人のものなればなり』と云ふて、心の貧しきもの即ち己れを虚うするの心を以て、之を求むるものに與へらるゝの意をも示した。主の祈禱の言は天意を奉ずるの心を以て、天國の來たるを祈れと教へて居る。之に反して天國に入るを得ざる所以は如何と云ふに、彼は此事についても亦教へて居る。ユダヤ

人に語つた言に『神の國をなんぢらより奪ひその果を結ぶ民に與らるべし』(太二一〇四三)とある。果を結ぶ民に與へらるとせば、其奪はるゝは果を結ばざるが爲めなる事も明かである。彼が「パリサイ」人に向つて、『そはなんぢら天國を人の前に閉て自ら入らず且入らんとするものゝ入るをも許さざるなり』(太二三〇一三)といふた。彼等が何によりて天國を閉ぢ、また自らも入らざる乎といふに、それは高慢にして偽善なるに因る。天國に入るの條件と、之を失ふ條件の何たるを見ても、天國の精神的また道徳的なるを知るに足る。

神國。又は天國といひて、既に國といふ以上は、統御者あり、統御さるゝものあり、また由て以て統御する法律即ち憲法もあるべき筈である。神の國は神政治であるから、統御者即ち主權者の神なるは當然だが、主權者の代理は耶蘇である。彼の持てる一切の權は、父より賜つたものであるから、『天のうち地の上の凡ての權を我に賜れり』(太二八〇一八)と彼が云ふた。そして彼の統御の下に如何なる社會状態が現出さるゝかと云へば、それは平和であるから、彼は平和の君と云はれて居る。此平和は人

と人との平和、また人と神との平和であるが、神との平和は人との平和の本となる。神の國は平和の國、即ち狼と小羊と偕にやどり、豹は小山羊と偕に伏する如き平和の國である。神の國の平和は地上に見るが如き皮相的また一時的の平和ではなくして、精神状態より生ずる永久的平和、即ち神の憲法を守る結果に外ならぬ。

神國の憲法は神意に外ならざれども、其神意は神國の安寧を保ち、神國民の福祉を目的とするものなれば、暴君の我意の如き利己的のものではない。神は愛なれば、神意も亦愛に依て動くものに外らぬ。愛が神の要求であるのも、神自身の愛なるが爲めである。神國の憲法は神を愛し、また人を愛する事なれば、憲法は即ち愛である。耶蘇の第一の誠、第二の誠と云ふたのは、憲法を二條に分けたのであるが、是れも彼の始めて定めたものではなくして、舊約聖書に既に教へられたものである。即ち『イスラエルよ聽け我らの神エホバは惟一のエホバなり汝心を盡くし精神を盡し力を盡して汝の神エホバを愛すべし』(申六〇五)とあるのは、第一の誠に當り、『己の如く汝の隣を愛すべし』(利一九〇一八)とあるのは、第二の誠に當る。されば神の國の憲法は新

しきものではなくして、舊約の教に外ならぬも、其精神に至つては、全然新なるものと云はねばならぬ。愛の誠は昔よりあつたが、完全に神と人とを愛した者のなかつた爲めに、愛の活ける標準もなかつたが、耶蘇は愛を教へたのみならず、自ら身を以て其愛を實行したから、愛の誠は彼に由て愛の生活となつた。神國の憲法は耶蘇に由て實現された愛に外ならぬ。

耶蘇の神國は以上述べた通り、精神的で、また道德的であるから、此世の國の如くに、權利については語つて居ない。利己主義の人は權利を主張すれども、利他主義の人は愛を高調する。耶蘇の神國は愛を憲法とするが、其愛は世界的の愛なるが故に、其國も亦世界的王國である。此王國は領土を要せぬが、其代りに人の心を其領土とする。世の國々の盛衰消長極りなきに似ず、彼の神國は永遠不朽であるから、此國民も亦永遠に生くるものである。神より賜はる永生は即ち神國民の生活を指したものに外ならぬ。

## 第十五章 死の先見

バプテスマのヨハネの耶蘇の己れに來たるを見るや、之を指して『世の罪を負ふ神の羔を觀よ』といふたが、彼はどうして之を知つたであらう。是れは耶蘇の受洗前であつたか、又は其後であつたかは判然しないが、もし受洗後であつたとすれば、その神の子たるを知つたが、罪を贖ふ犠牲であることは未だ知らぬ筈である。もしそれを知つたとすれば、耶蘇自身より聞いたのか、然らざれば神の默示に由つたと見るの外はない。けれども耶蘇は其際之をヨハネに語つたとも思はれない。何となれば彼れ自身ですらも、未だ其時己が運命についての知識がなかつたからである。野に於ける試以前には、未だ其建設すべき神國の理想や性質も定まらず、また其方法の撰擇までも未定であつた。この世の國を建設して、榮耀榮華を求むべき乎、將た身命を擲つて靈的の國を建設すべき乎は、試の内容であつたのを見ても、未だ此時には決死の覺悟がなかつたと見ねばならぬ。

然らば耶蘇のその死を先見し始めたのは、いつ頃であつたかと云ふに、其宣敎の初期に、既に其死の運命を先見し、たとへ直接に其死を公言せざるも、之が暗示を與へた場合がしばしばあつた。約翰傳によれば、傳道開始後の最初の逾越節に、彼がエルサレムに上つて、神殿を潔めたが、ユダヤ人を見て『爾これらの事をなすからには我等に何の休徴を示るや』と問ひしに、『爾曹この殿を毀て我三日にて之を建ん』と答へた。ユダヤ人が此答の意を了解し兼ねたが、福音書記者はこの言に解釋を下して『イエスの如此いへるは其身の殿を指るなり』(二〇二一)といふた。此解釋に依れば、彼が殺されて三日目に甦るの意を示したので、是れが果して耶蘇の意であつたとすれば、彼は此時既にその死を覺悟した事が知れる。

更に其後間もなく、耶蘇エルサレムの或る人の家で、議員なる「パリサイ」のニコデモと會見した事があつた。此時彼は神國に入るものゝ資格として、新生を語つたが、續いて語つた言の中に『モーセ野に蛇を舉し如く人の子も舉らるべし』(約三〇一四)との言もあつた。もし此言は蛇の杆の上に舉げられた如くに、人の子も亦十字架の上

に舉げらるゝとの意であつたとすれば、彼はその死を預言したと解せねばならぬ。是れは其傳道の初期であつたからには、此時既に彼は十字架上の死を以て人を救ふの覺悟があつたのであらう。

ユダヤ人は其習慣に従ひ、一週二回つゝ斷食をなし、バプテスマのヨハネの弟子や「パリサイ」の人々も亦之を嚴重に守つたが、耶蘇の弟子のみ之を守らざるより、ユダヤ人を見て怪み、其律法に對する冷淡の態度を非難せんとて、耶蘇に來り『爾の弟子は何故斷食せざる乎』と云ふた。之に對する彼の答は左の如くに記されて居る。曰『新郎の朋友その新郎と共に居る間に斷食することを得べき乎かれら新郎と共に居る間は斷食することを得じ將來かれら新郎を取らるゝ日きたらん其日には斷食すべきなり』(可二〇一九、廿)と。斷食は悲む場合には適すれども、喜ぶ場合には不適當である。我が弟子の今斷食せざるは、喜ぶ時であるからだが、其喜びも決して其儘いつまでも繼續するものではなく、やがて悲まねばならぬ時が來るであらう。其悲むべきの日は即ち新郎の取らるゝ日、換言せば弟子等が我と別るゝ日であるとは、耶蘇の答の

意義である。此言の中に新郎の取らるゝ日とあるのは、彼の死ぬる日をいふたのである。然らば彼は其死ぬる日の來たるを先見して、之を弟子以外の人々にまで語つて居る。是れ素より死を宣言するの目的ではなく、斷食問題について語つたのではあるが、偶其死ぬる日の來たるを洩らしたのである。

カペナウムの會堂に於ける説教中に、耶蘇は其死のことを語つたのみならず、其死の必要をも亦語つた。そして唯暗示を與へたのみではなく、直接に公言したのである。其説教中の言に『我は天より降し生るパンなりもし人このパンを食はゞ窮なく生べし我あたふるパンは我肉なり。世の生命の爲に我これを與へん』(約六〇五一)とある。此言に依れば、彼は世の人に生命を與へんが爲めに、死ぬるの意が明に示されて居る。そして其死は救と分離の出來ざる程に必要な事も亦示されて居る。この説教を終へたる後、耶蘇その弟子に向つて『我なんぢら十二人をえらびしにあらすやされど其中の一人は惡魔なり』(約六〇六十)といふた。何故にこの事を今此場合に云ひ出したのであらう。福音書記者がこの言に解釋を下して、『此はシモンの子イスカリオテのユダを

指ていへるなり彼は十二の一人にしてイエスを賣さんとするものなり』といふた。ユダが主を敵に賣つて死に至らしめたからには、肉を與ふる云々の説教とは密切な關係のある人物である。もし肉を與ふるとの事が、全く其死と關係のなき事であつたとすれば、此にユダの事を語り出べき筈もなかつたであらう。福音書記者が此に最も参考となる言を附記して居る、曰『それイエスの如此云へるは信せざるものは誰おのれを賣すものは誰といふことを元始より知ればなり』(六〇六四)と。おのれを賣るもの、誰なるを知つたとすれば、賣られて殺さるゝことをも亦知つた筈である。此に『元始より』とあるのは、傳道開始の時よりとの事で、それ以前の事ではない。もし然りとすれば、傳道開始の當時より耶蘇は己が死を前知したと云はねばならぬ。

以上挙げた實例は、いづれも事の序でに彼が其死について語つたので、最初より此事について語らんとして語つたのではなかつた。然るに其後死の宣言の幾回となく繰返されたのは、其弟子等にメシヤの死を知らせる必要のあつたが爲めである。是れまで幾回となく間接にその死について語つたが、彼等は少しも其問題に注意を拂はかつ

たが爲めに、何等の印象も與へられて居らぬ。死するメシヤといふ思想が全然彼等の心になかつた爲めに、主の言の意義を悟り兼ねたのであらう。その知識の斯く淺薄なる儘では、到底主の事業を繼承するに足らざれば、其世を去るに先ちて、眞のメシヤ的思想を懐かせんとて、耶蘇はこの問題について語つたのである。

耶蘇或る日其弟子等を伴ひ、カイザリヤピリビの地方に往つたのは、一つは暫時休息せんが爲めでもあつたが、重なる目的は弟子等に己れを示さんが爲めであつた。先づ彼は其弟子等の一つの質問を發して、メシヤについての注意を促がした、曰「人々は人の子を誰といふや」と。弟子の或る者之に對して「或る人はバプテスマのヨハネ或人はエリヤ或人はエレミヤまた預言者の一人なりと云へり」と答へた。是れは彼についての世間の人々の意見を擧げたのであるが、彼の知らんと欲したのは、世間の人々の意見ではなくして、其弟子等の意見であつた。そこで更に言を換へて、「爾曹は我をいひて誰とする乎」と問ふた。ペテロ之に答へて、「爾はキリスト活神の子なり」(太一六〇一三)といふたのは彼の信仰告白で、必ずしも弟子全體を代表したものであ

るまい。この答は主の意に合ふたと見へて、「ヨナの子シモン爾は福なりそは血肉なんに示せるにあらず天にいます吾父なり」といふたのは、斯る告白を期待したからであつた。勿論此告白は眞理であつたが、メシヤ的思想を完成するには、更に之に加らねばならぬ思想がある。然るに殘念ながら彼等之を知らざるが爲めに、主は之を教へ給ふた。馬太傳にこの事について左の如くに記して居る。曰「此時よりイエスその弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長學者等より多の苦みを受け且つ殺され第三日に甦るなどなすべき事を示し始む」(太一六〇二一)と。是まで彼は其死について唯漠然と語つて居たが、今は直接に之を語らねばならぬ時機に迫つた。そして其殺さるべき場處はエルサレムで、其殺すものはユダヤの權威あるもの、しかも殺さるゝに先ちて、一方ならぬ苦難を受くる事や、其復活の事までも一點の疑ひを容るゝ餘地なき程に、明瞭に語つた。エルサレムはユダヤの首府で、ユダヤ教の中心地であるからには、この地に起つた事は、何事も全國に知られぬものなく、此地で殺さるゝのは、全國民の面前で殺さるゝと同様である。多くの預言者等の神の道の爲めに殺されたのもこの

地であつた。神の羔たるメシヤも亦世々羔の屠られたこの地で殺さるゝのも亦當然である。そしてメシヤを殺すものは、國民に尊敬さるゝ長老や祭司長や學者ともであるのも、意外のやうではあるが、彼等は當時の宗教家を代表すると共に、偽善者の代表者、また不敬虔者の代表者であつた。恐らくは國民中の最も腐敗したものは、國民を指導する位地に立つた彼等であらう。彼等は最も高慢なもの、最も嫉妬深きもの、最も殘忍なものであつた。彼等は單に耶蘇を死に處するを以て満足せず、出來得る限り彼を苦めた上で殺さんとした。耶蘇も彼等の己れに對する怨恨嫉妬の深きを知つたから之を預言したのである。如何に悟りの鈍きペテロでも、主の言の意義を解したから是は容易ならぬことゝ思ひ、深く前後をも考へず、例の如くに輕卒にも、主の決心を穢せんとて、『主よ宜らず此事なんちに来るまじ』と諫言した。是れ素より惡意からではなく、主に對する忠義心からの諫言ではあつたが、耶蘇に取つてはこのペテロの思想は、全然己が思想を破壊するサタンの思想であつたが爲めに、『サタンよ我後に退け爾は我に礙く者なりそれなんちは神の事を思はず人の事を思へり』(太一六〇二二、

二三) と叱責した。ペテロの主の身の上を案じたのは勿論であつたが、主の云ひ給ふ通りに事が運ばるゝとせば、自分共の運命にまでも影響し來ると考へたであらう。彼はメシヤの死が其使命と關係あるを悟り兼ねたが爲めに、もし避け得らるゝならば之を避くるを有利と思ふたのであつた。彼が主を諫めたのも、主のためのみではなく、自分の安全をも謀らんが爲めであつた。彼は主も己れも十字架を負ふの必要なるを未だ悟らなかつた。そこで耶蘇は己れに従ふものゝ覺悟をも示さんとて、『もしわれに従はんと欲ふものは己をすて其十字架を負て我に従へ』(太一六〇二四)と云ふた。彼が其弟子に十字架を負ふの覺悟を求めたのは、是れ自らが既に十字架を負ふの決心をなしたからである。けれども彼が十字架を負ふからとて、彼に従ふものまでも負はねばならぬ理由があるであらう。彼は凡ての人に代つて十字架を負ふべきではあるまいか、然らば弟子が更に各自之を負ふの必要なきやうだが、十字架を負ふの決心なきものは、耶蘇の十字架の眞理、即ち救の眞理を十分に了解することが出來ぬからである。耶蘇の自ら負はんとする十字架については既に語つたが、其弟子の負ふべき十字

架はどんなものであらう。是れ必らずしも肉體の死を指したものと見るの必要がない。勿論弟子の中にはペテロのやうに實際十字架を負ふたものもあつたが、十字架はこの種類に限られたものではない。耶蘇の如くに世に生きんが爲めには、一切の苦難を甘受するの覺悟が入る。弟子の中に獨りヨハネを除くの外は、いづれも道の爲めに殉死したのは、即ち十字架を負ふたのである。ヨハネはたとへ十字架の死を遂げなかつたにせよ、尙ほ道の爲めにバトモスの孤島に流されたからには、矢張十字架を負ふたのである。主は彼等の十字架を負はねばならぬ理由をも示さんとして、『そは生命を保全せんとするものは之を失ひ我ために其生命を失ものは之を得べければなり』(太一六〇二五)と云ふた。此言は一見逆理を語つたやうだが、我が爲めに肉體の生命を棄るものは永生を得、之を惜むものは永生を失ふとの意である。此言に依れば、低きものを棄つれば高きものを得、低きものを得んとすれば高きものを失ふことゝなる。そして耶蘇は其求むべきもの、最大價值を示さんとして、『もし人全世界を得るとも其生命を失は、何の益あらんやまた人何を以て其生命に易んや』(太一六〇二六)と云ふた。

生命の價値に比すれば、全世界の價値も無きに均しきものである。更に十字架を負ふものに大なる報酬あるを示さんとて、『それ人の子は父の榮光を以てその使等と偕に來らん其時各の行に由て報ゆべし』(太一六〇二七)と云ふた。

死についての第二の宣言は、此後間もなくガリラヤ巡回中になされた。曰『人の子は人の手にわたされ且つ殺されて第三日に甦るべし』(太一七〇二二)と。此宣言をなしたのは、第一の宣言の弟子の心に徹底しなかつた爲めであらう。此宣言は第一の宣言に比すれば、言は簡單で、多少意義にも異なつた點がある。此宣言中にはエルサレムやユダヤの有司等の事がなくして、唯人の手にわたさるといふ事がある。言の簡單な丈け意味も不明である。是れ神の子が人間の手にわたされて殺さるゝの意か、若くは人の手とはユダヤ人を指したのか、若くは耶蘇を死に定めた異邦人ピラトを指したのか、學者によりて説が違ふて居るが、多分ロマ人即ちピラトを指したのであらう。今回の宣言も亦弟子には十分了解されなかつた、何となれば『其時弟子この言を曉らず』と馬可が記したからである(九〇三二)。



第三の宣言は左の如くに記されて居る。曰『さて彼等エルサレムに上る途間イエス弟子に先ち行ければ彼らおどろき且おそれて従へりイエス十二を伴ひて將に己オのれに及んとする事を彼等に告給ひけるは我らエルサレムに上り人の子は祭司の長と學者等に付わたされん彼らこれを死罪に定め異邦人に付わたし又これを嘲弄し鞭ち唾し且これを殺さん斯て第三日に甦るべし』(可十〇三二—三四)と。此宣言に依れば耶蘇のエルサレムに上るを見て、弟子等はおどろき懼れたとあるが、多分危険多きエルサレムを避けずに自ら進んで其地向ふのは、自ら禍を招くのみならず、弟子等全體の上にも亦それが影響するならんと思ふたからである。耶蘇も亦其運命の將に近づくかんとするを知り、今回は最も詳細に己れの受くる苦難について語つた。此には明かに異邦人の手にわたさるゝことをも語つた。

以上三回の宣言は、メシヤの死を預告して、弟子等の覺悟をも促したのであるが、其外にも亦幾度となく是等の宣言のやうに、その死を語つた場合がある。路加傳に『當日あるパリサイの人々來りてイエスにいひけるはへロデ爾を殺さんとする故に此を去

りゆけ』(一三〇三一)といふ珍らしき記事がある。この言に依れば、ガリラヤの君へロデ アンテバスが、前にバプテスマのヨハネを殺した如く、今また耶蘇をも殺さんとするの隱謀あれば、危険なるガリラヤを去つて、ユダヤに避難せよとの忠告であるが、是れは日頃耶蘇の味方といふよりは、寧ろ敵である「パリサイ」人の注意であるから、甚だ不思議である。是れ果してへロデの手より彼を救出さんとの好意に出たのであらうか、將たガリラヤよりも一層危険なユダヤに彼を招いて、殺さんとの隱謀ではあるまいか、いづれとも容易に斷言し難いが、耶蘇は決してガリラヤを危険の地と思はなかつた事が左の言でも知れる。曰く『爾曹ゆきて其狐に告よ我今日明日惡鬼を遂出し病をいやし第三日に此事終らんされど今日明日また次日は我かならず行べしそは預言者はエルサレムの外に殺るゝことあらねばなり』(路一三〇三二、三三)と。此言に依れば、へロデたとひどんな隱謀を企て、我を殺さんとするも、我が死ぬべき地はガリラヤではないから、少しも彼を懼るゝには及ばぬ。ガリラヤに於ける我が事業の終つた時、我が死地なるエルサレムに上るであらう。それまでは我は毫も危険を感せ

ずに、しばらくガリラヤの傳道を繼續して、避難を敢へてするの必要なしとの意を示したのである。彼の決心は斯の如きであるが、ヘロデが彼を殺さんとする隠謀を企てたといふ一事は容易に信じ兼ねる。是れ多分他の人々の推量であつたらう。何となれば前にも斯の如き事があつたからである。ヘロデのヨハネを殺した時には其弟子等が師の屍を葬り、『往てイエスにつぐ』と(太一四〇一二)あるのは、或はヘロデがヨハネに行へるが如くに、更に耶蘇にも行ふならんとの掛念から、斯く報告して其注意を促がしたものと見ゆる。其時耶蘇も其好意に従ふた、何となれば『イエスこれを見て人をさけ舟に乗て其處を去さびしき處に往給ひしが衆人きゝて歩行にて彼に従へり』(太一六〇一三)とあるからである。けれどもヘロデが耶蘇を殺さんとしたのは事實とは思はれない。彼がヨハネを殺したのは、前にも述べた通り理由もあつたが、耶蘇とは絶対に没交渉で、未だ嘗て一度なりとも會見した事がない。そのみならずヘロデは耶蘇をばヨハネ程の人物とも思ふて居なかつたらしい。唯彼が奇跡を行ふの能ありと聞き、一度は面會して奇跡を見んと好奇心があつたのみである。されば「バリ

サイ」人の親切らしき忠告が、却つて彼を危きに陥入れんとした隠謀であつたかも知れぬ。

耶蘇はおのが死を以て、如何なる意義あるものと見たかは、ゼベダイの子等に與へた答で知れて居る。彼等が主の左右に坐せんことを願ひたれば、之に答へて『爾曹は我が飲んとする杯をのみ又わが受けんとするバプテスマを受得るや』(太廿〇二二)といふた。ヤコブとヨハネ等の二人が如何なる動機を以て、斯る事を請願したのであらう。是れ彼等が主の國に於て高位高官に登つて、權力を振はんとする野心からであらう。他の弟子等にも同様の野心があつたが、唯この二人のみ大胆にも之を口に發して請願したのは何故であらう。彼等は主と親戚關係のあつたが爲めに、寵愛を専らにせんとしたのであらう。殊に彼等自身が直接に請願せずして、其母を以て願意を洩したのは、彼等の意を用ひた處であらう。主は血縁をも重んじ、また婦人をも尊んだが、之が爲めに公私の別を無視し、又は野心を満たすが如き事をしない。神の國は野心を以て求むべきものでもなければ、野心を満足さするものでもない。神の國に於て最も貴

ばるゝものは、献身犠牲の精神であるから、己れと其運命を共にするの覺悟ある乎を問ふたのである。更に進んで彼はその死について語られた。曰「人の子の來るも人を役ふ爲にはあらず反て人に役はれ又多くの人に代て生命を與へその贖とならん爲なり」(太廿〇二八)と。人に奉仕し、また其贖とならんが爲めに、其生命を棄つるのは耶蘇の覺悟であつた。彼の死は偶然の事件ではなくして、一定の目的を有する預定の死、しかも律法と預言に基いた死であつた。

耶蘇はその死を以て、贖となしたのみならず、人心を感化するメシヤの一大勢力と見た。彼に取つては其死は勝利でありまた榮光である。ギリシヤ人の己れを訪問するや、彼等に向つて『人の子榮を受くべき時いたれり』といふたのは、其證據である。また『一粒の麥もし地に落ちて死すば唯一にてあらんもし死なば多の實を結ぶべし』といふたのは、其死の人心に及ぼす結果をいひ。また『我もし地より擧げられなば萬民を引て我に就せん』といふたのは、其死の勝利なるをいふたのである。その死は如何にして萬民を引き寄せる程の力となるであらう。彼が肉體上の生活を續くる間は、

純然たる人間の生活で、時間や空間にも制限さるゝが、其死によりて肉體上の生活を脱せば、最早や何等の制限もなく、靈の救主として何人にも接近し、人の心中に入り、其機微に觸れて之を一新する事が出来る。

耶蘇は最後の逾越の節の六日前にベタニヤに至つたが、或る人彼の爲めに筵會を催うし、マルタ、ラザロおよびマリヤが出席して、彼を欸待した。特にマリヤが日頃主の恩義に感激し、及ばずながらも感謝の意を表せんとして、其機會を待つて居たから、この時を千歳の一遇と思ひ、銀三百を値する高價な香膏一斤を携來り、主の首と其足とに灌いた。是れ兼てより彼の準備した所で、その最善を盡くしたものである。然るに此善行もユダや他の弟子等には、費用の多き無駄な企として非難された。ユダはそれだけの金を貧民救助に投じたならば、有効であつたのに、惜しい事だと歎息した。之に反して主はマリヤの行爲を賞賛し、『彼に與る勿れ我が葬の日の爲に之を貯へたり貧者は常に爾曹と偕にあれども我は常に爾曹と偕にあらず』(約一二〇八)と云ふた。此に注意すべきは『我が葬の日の爲に之を貯へたり』との言であるが、是れは如何な

る意義であらう。マリヤが主の近々死ぬるを知つて、香膏を買ひとゝのへたのであらうか。勿論耶蘇は是れまで幾回となく、己が死について弟子等に語つたからには、マリヤも亦之を聞いたであらうが、弟子等が其意を了解し兼ねたるに、マリヤ獨りは之を了解したのであらうか。恐らくはマリヤも亦主の死の近きにあるを預知して、香膏を塗つたのではあるまい。將に死なんとする耶蘇より見れば、マリヤの行爲は恰も己が葬の爲めになしたるものゝ如くに思はれたので、マリヤ自身が決してそんな考のあつたものではなかつたのである。耶蘇のこの言はマリヤの企の目的を表はしたものではなかつたとしても、尙ほ己が死を暗示したものと云ひ得るのである。

約翰傳に依れば、耶蘇は己れを善牧者に喩へて語られた物語がある。他の福音書にも迷へる羊を尋ぬる牧者の喩が記されたが、牧者の死について語つたのは、獨り約翰傳の記事のみである。そしてこの記事は死を暗示したのではなく、直接に其死を語つて、しかも幾度か之を繰返したのは、我等の注意すべき點である。『我は善牧者なり善牧者は羊の爲に命を損つ』と云ひ、『父われを識ごとく我も父を識るわれ羊の爲に命を

損ん』と云ひ、また『わが父われを愛すそはわれ再び命を得んが爲に命を損るが故なり』と云ひ、更に『我より之を奪ふ者なし我みづから之を損るなり我これを損るの權能ありまたよく之を得るの權能あり我父より我れこの命令を受たり』と云ふて、其命を損つる所以と之を損つる權能とを語つた。これらの言に依れば、彼の死は羊を愛するが爲めで、彼の父に愛せらるゝも亦この決死の覺悟ある爲めである。そして彼が其生命を損るも亦他より強ひられたのではなく、自らの權能を以て、之を損つるのである。然らば彼の死は其愛と權能とに由れる犠牲にして、救の唯一の方法であつた。

耶蘇の設けたる晚餐式は、其死の覺悟のみならず、それが救に欠くべからざる事をも亦示して居る。馬可の記せる所に依れば、『彼等食する時イエスパンを取て祝し之を擘きかれらに與ていひけるは取て食へこれは我身なりまた杯を取り彼等に與ければ皆これより飲めりイエスイひけるは此は新約の我血にして衆の人の爲に流す所のものなり我まことに爾曹に告ん今よりのち新しきものを神の國にて飲ん日までは葡萄にてつくれるものを飲じ』(一四〇二二—二五)とある。此には唯其血について衆の人の爲

に流す所のもの』とのみあるが、馬太には『罪を赦さんとて』といふ目的を示した言  
が加へられて居る（二六〇二八）。路加には『我を記おぼん爲なにこれをなせ』（二二〇一九）  
といふ言がある。是等の言に依て見ても、耶蘇が多くの人々の罪を贖はんとて、其身  
を犠牲に供するの覺悟であつた事は、甚だ明瞭である。彼は此覺悟を以て始終一貫し  
た。否彼は其死に向つて直進したのである。

## 第十六章 山上の耶蘇

耶蘇は其死についての宣言をなす毎に、其復活の事をも合はせて宣言した（可八〇  
三一同九〇三一同十〇三四）死は彼を卑くする事とせば、復活は彼を高くする事であ  
る。死は彼の耻辱であるとせば、復活は彼の榮光である。人類の罪の爲めに、耻づべ  
き十字架の死を遂ぐる耶蘇は、同時に榮光の主である。彼のよく其低きに下つたのは、  
その高きに上ほるべき希望の力に依つたので、希伯來書の記者は『彼は其前に置くと  
ころの喜よろこ樂びによりてその耻をも厭はず十字架を忍びて神の寶座よみの右に坐しぬ』（一二〇  
二）といふた。耶蘇の受くる榮光は、其死に由りて受くる所のもので、此榮光の希望  
を彼に與へたのは、詩篇の左の言であらう。曰『このゆるゑにわが心はたのしみわが榮  
はよろこぶわが身もまた平安にをらんそは汝わがたましひを陰府よみにすておきたまはず  
なんぢの聖者を墓のなかに朽くしめ給はざるべければなりなんぢ生命の道を我に示し給  
はんなんぢの前に充足みちたれるよろこびありなんぢの右にはもろくの快樂たのしみとこしへにあ

り(一六〇九—一一)と。受難のメシヤは榮光の主である。耶蘇は前には受難のメシヤについて語つたが、今は榮光の主を弟子に見せんとて、高き山に彼等を伴ひ給ふた。

主の變貌を親しく實見したペテロより材料を得た馬可が、變貌の狀況を左の如くに記した。『さて六日の後イエス ペテロ ヤコブ ヨハネを伴ひ人を避て高山に登り給ひしが彼等の前にて其容貌かはり其衣か々やき白きこと甚しくして雪のごとく世上の布のさらし漂もかく白くは爲能はざるべし』(九〇二、三)と。然るに路加の記せる所によれば『祈禱せんとて山に登れり』(九〇二八)とある。登山の目的は祇禱せんが爲めか、將た主の榮光を三人の弟子に見せんが爲めか、路加に依れば祈禱は其目的で、變貌は偶然の事件のやうに見ゆるが、他の福音書に依れば、變貌は其目的のやうに見ゆる。けれども耶蘇の目的は、死ぬるメシヤが榮光の主なるを弟子に悟らせんが爲めであつた。山上で祈られた耶蘇の言は、いづれの福音書にも記されてないのは、不思議のやうだが、弟子の耳には達しなかつた爲めか、或は達しても尙ほ其意を解し兼ねた爲めかも

知らぬ。此際耶蘇が如何なる事を祈られた乎は、前後の關係より察すれば之を知るのは必ずしも不可能な事ではない。弟子等は是れまで幾度となく、メシヤの死について聞かせられたが、いつもながらその意を解し兼ねた。彼らは耶蘇を以て神の子キリストなりと信じたが、其死に由りてメシヤの使命を完成するとの信仰をば懐く事の出来なかつたのはメシヤの思想と死の思想とは、全然兩立の出来ぬものと思ふたからである。舊約に約束されたメシヤは、決して死の運命に遭遇すべきものとは、毛頭も思はなかつた。嘗て主がユダヤ人に己が死について語つた時に、其言を怪み、『我等律法にてキリストは窮かぎりなく存者あるものなりと聞しに爾人の子かならず擧あはれんといふは何ぞ』(約一二〇三四)と問ふた。此の間は彼等のメシヤ思想を現はして居る。即ち『キリストは窮かぎりなく存者あるもの』換言せば死せざるものなりとは。弟子の懐いたメシヤ思想に外ならぬ。そこで耶蘇が弟子等の心の開かれん事を神に祈つたので、山上の變貌は即ち祈禱の應驗と見るべきものである。

光り輝いた主の姿は、即ち榮光の主の姿であるが、是れは弟子の肉眼に映じたとし

ても、又は其心に示された幻影としても、其意義に於ては異なる所がない。勿論弟子は其肉眼で見たやうに感じたであらうが、主の榮光は外界の何物にも照らされたのではなく、彼自身の内より發した光に外ならぬ。他人の爲めに苦難を甘んずる犠牲者はいづれも光を發するが、耶蘇は最大の受難者、最高の犠牲なれば、其光も亦宛ながら太陽の如きものであつた。榮光の冠は唯十字架に由てのみ得らるべきもので、是れ希伯來書記者の『唯われら天の使等より少く遜おとろされし者即ち死の苦を受しに因て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり』(二〇九)と云ふた以所である。

また山上で『エリヤとモーセと共に彼等に現れてイエスと語れり』と馬可が云ふたが、其物語の内容については、路加が左の如くに記した、曰『イエスのエルサレムにてもはや世を逝さんとする事を語る』(九〇三一)と。モーセは律法を代表し、エリヤは預言者を代表し、二人は舊約を代表する人なれば、この二人の耶蘇のエルサレムで世を逝らんとする事を語つたのは、舊約がメシヤの死を預想し、彼の死は即ち律法と預言の完成なりとの意を表はしたものである。山上にモーセの現はれたのは、餘程深

い意味のあるやうに思はるゝ。此場合に弟子等にモーセを見せて、耶蘇とどんな關係のあるかを彼等に知らしむるのは、是れ耶蘇を彼等に知らしむるの道であつた。弟子等は主を以てメシヤなりとは信じて居たが、尙ほ半信半疑の状態にあつたのは、モーセといふ偉大な人物が故障となつたのであらう。彼は舊約の救主だが、耶蘇は新約の救主である。されば舊約の救主なるモーセが新約の救主なる耶蘇の預表で、彼は人を眞のメシヤに導くものではあつたが、考へやうに依つては、却つて故障となり得る理由もあつた。多分弟子等にはこんな考へがあつたであらう。舊約の救主なるモーセは直接に神と面を合せて語つた人である。彼が神の面を見た爲め、神の光が彼の面にも映じて、我等の祖先か直接にモーセの面を見ることの出來ざる程に輝いたが、モーセよりも優れるといふ我等の主の面には何等の光もない。彼は常に天の父と交つて居るといひながらも、其面に光のなきはモーセに劣る爲めではあるまいか、是れ我等の了解に苦む所であると。弟子等の疑念については、聖書に一言半句も記して居ないが、モーセの出現と耶蘇の變貌とを合はせて考ふれば、斯る疑念のあつた事を想像せざる

を得ぬ。山上に現はれたモーセの面にも光があつたであらうが、耶蘇の面の光に打ち消されて、毫も光のなきものと見へたであらう。幾分かモーセの面に光があつたにせよ、それは律法の威嚴を示したもので、耶蘇の面の光は福音の威嚴を示したものである。この事についてはパウロが左の如くに記した。曰『終に廢るべきモーセの面の榮によりてすらイスラエルの人々かれの面を注目こと能ざりき斯く石に鑿し儀文の死法なほ榮あるときは況て靈の法は榮あざらんや罪を定むる法もし榮あらば況て義とする法は其榮さらに愈らざらんや昔榮ありとせしものも後の榮に比れば榮なきものとなれりその後の榮の更に愈れるによりてなりもし廢らんものに榮ありしならば況て長存るものに榮あざらんや』(哥後三〇七一一)と。

山上の不思議な光景を目撃した三人の弟子等は、果して其見たる異象の意義を解したであらうか、否彼等は反つて耶蘇の意に反した希望を起して拒絶された。彼等は主の榮光とモーセ エリヤの出現とを見、また是等三人の間に言の交はされたのを聞いた。是れも彼等は耳で聞いたのではなく、心で聞いたのであらう。其話終つてモーセ

とエリヤの二人主と別れんとするの状あるを見るや、ペテロは黙し兼ねてその請願を陳述した。曰『師よ此に居るはよしわれらに三の廬をつくらせ給へ一は爾のため一はモーセのため一はエリヤのためにせん』と。是れ三人を山上に留めて、其處に清き生活を樂まんとしたのであらう。彼は山上の生活を理想的生活と思ひ、山下の生活、即ち多忙の生活、繁雜の生活、危険の生活を厭ふて、今後長く山上の生活を樂まんと欲したが、耶蘇は山上の生活よりも山下の生活を欲した。たとへ危険を伴ふ繁雜な生活にせよ、救世の使命を以て世に來つた以上は、山下の生活を撰んだ。自ら樂む生活よりも、自らの樂を棄ても尚ほ人を樂ましむる生活を撰んだ。榮光に至る唯一の道は、苦難であると確信したから、ペテロの請願を拒んだ。時に雲俄かにモーセとエリヤを蔽ひ匿くし、山上の光景一變したのを見て、弟子等大に懼れ地に伏したるに、聲雲より出でて、『此は我愛子なり之に聽べし』と云ふた。是れもはやモーセとエリヤに聽くには及ばねば、唯我愛子に聽けとの意である。是れまでユダヤ人は何事もモーセに聽いたが、彼は其位地を神の愛子に譲つた。彼れ自身も既にこの事については、人民に



預め語つた所で、『汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一個の預言者を汝の爲めに興したまはん汝ら之に聴くべし』(申一八〇一五)といふた。然らばモーセに聴くの時代は既に過ぎ去つて、神の愛子に聴くべき時代となつたのである。然るにペテロがその事を知らずに、モーセとエリヤを山上に留め、彼等より直接に律法を學ばんとしたから、雲之を蔽ふたのである。眼前に神の愛子即ち律法と預言を成就するメシヤを見ながら、尙ほモーセとエリヤに聴かんとするのは、物の實體を忘れて、其陰影を捕へんするに異ならぬ。モーセもエリヤも一時必要な時代もあつたが、今や其時代は過ぎ去つて、メシヤの時代となつた。彼等は神の僕等であつたがメシヤは神の子である。そしてメシヤの時代は永遠無窮である。

三人の弟子の山上の光景を見たのは、非常な特權ではあつたが、その見た事を何人にも語ることを禁せられた。下山の途中耶蘇彼らに『人の子の死より甦るまでは爾曹の見し事を人に告べからず』(太一七〇九)と命じた。見ることを許しながら、語ることを禁じたのは何故であらう。好奇心の満足より、之を他の弟子等に語つて、其嫉妬

心を挑發するの虞があつたかも知れない。或は自分共に與へられた特權を誇つて、他の弟子等を輕蔑する心を起す虞があつたかも知れない。よし斯る虞がなかつたとしても、其未だ十分理解せざる山上の光景を語つて、人を礙かす虞があつたであらう。現に彼等三人が其山上で見た事の意義を解し兼ねた證據がある。彼等は其命せられた通り、何人にも語らなかつたが、『弟子等この言を守りかつ論じいひけるは死より甦るといふは何の事か』(可九〇十)と記されあるを見れば、彼等は尙ほ未だメシヤの甦りの意を解し得なかつた事が明である。そのみならず山上の光景を見てすらも、彼等は耶蘇の果してメシヤなるやを十分確信し兼ねたやうに見ゆるのは、下山の途中主に向つて問ふた事で知れる、曰『エリヤは前に來るべしと學者の云へるは何ぞや』と。此質問の意は左の通りである。學者の教ゆる所に依れば、メシヤ降臨前に預言者エリヤ來つて其準備をなすとの事なるが、エリヤの出現を我等は山上で見たが、メシヤの準備をなさずに、其儘再び去つたのは何故であらうと。この質問も尤であるが、彼等はエリヤとは即ちエリヤの精神を以て世に來るバプテスマのヨハネを指すと教へられ

たが、最早や其事をば失念したと見ゆる。耶蘇ヨハネの人物を評した時にも、『來べきエリヤは是なり』(太一一〇一四)と語つたが、この事を忘れて、今エリヤの姿を見たから、預言の通り出現したと思ふ間に忽ち去つたがために、惑ふたのである。彼等の質問に對して主は左の如くに答へた。『實にエリヤは前に來りて萬事を復振また入の子については其各様の苦難を受かつ輕慢らるゝ事を書しるされたりされど我なんぢらに告んエリヤは既に來しに彼について録されたりし如く人々意のまゝに之を待へり』(可九〇一二、一三)と。此答の意は左の通りである、エリヤがメシヤの出現に先ち、來つて人心の改革を叫び、其事業の準備をなすとの事は眞である。そして彼は既に其使命の爲めに、世人に虐待され、最後に其一命を捧げた。彼を先驅者として世に來つたメシヤも亦預言の如くに、各様の苦難を受けて、彼と其運命を共にする。爾曹山上でエリヤを見たが、彼は其以前既に來つて、人心の悔改を叫んで、メシヤの準備を終へた。我に先たち來つて野に叫んだバプテスマのヨハネは即ちエリヤであつたとの事である。馬太傳に『是に於て弟子バプテマのヨハネを指していひ給へるを悟れり』(一七

〇一三)とある。山上の光景を見、また再び疑惑の雲霧に蔽はれたペテロも、後に及んで當時の光景を回想して、其書柬の中に記した、曰『我等親しく其大なる威光を見しものなり至大なる榮光の中より聲ありて彼をよびこは我心に適ふ我が愛子なりといへる此時彼は神なる父より尊と榮を受けたりわれら彼と偕に聖山にありし時この天より出し聲を聞けり』(彼後一〇一六一一八)と。此言は耶蘇についてのペテロの信仰を示したのみならず、彼に従つて山に登り、其不思議な現象を實見した事の歴史的事實なるを證明した。當時弟子等の了解は甚だ明瞭を欠いたが、此に記された如く耶蘇の尊貴と榮光とをペテロに悟らしめたのは、山上の光景であつた。其登つた山はいづれの山であつたにせよ、それはペテロに取つては、榮光の主を見る事を得た聖山であつた。

## 第十七章 耶蘇と貧者

『貧しき者は福音を聞せらる』(太一一〇五)との耶蘇の言に依れば、恰もメシヤの使命は、貧者を救ふにあるかのやうに思はるゝ。また富については『蠹くひ銹くさり盗人うがちて竊む所の地に財を蓄ふることなかれ』(太六〇一九)と云ふた。彼が如何なる意義にて、貧者に對し斯る態度を取つたであらう。また如何なる考より富を蓄ふることを戒めたのであらう。世の所謂共產主義を主張する人々は、土地又は物品を私有するのは、耶蘇の精神に違反すると論じて居るが、是れ果して彼の精神を理解したものであらうか。

右に擧げたる耶蘇の言は、富其物を輕蔑したものでなければ。富の所有を否定したものでなく。勿論共產主義を教へたものではない。此に續いて云はれた言を見れば、彼の意は何れにある乎を容易に知り得るであらう。曰『蠹くひ銹くさり盜穿てぬすまざる所の天に財を蓄ふべし』(太六〇廿)と。是等前後の言を比較して考ふれば、

地上の財よりも、天上の財を尊重せねばならぬ、何となれば地上の財は亡び易く、天上の財は永遠不朽なるが爲めである。言を換へて云はゞ、有形の財産よりも、無形の財産即ち善徳を尊重せよとは、彼の精神であつた。さらばもし天上の物を最高の財とする人あらば、たとへ地上に於て如何程富を有するとも、彼に取りては何の故障ともならぬ譯である、何となれば地上の富を以て、最高の富とせぬからである。耶蘇には決して財産の所有を否定するの意がなかつたのである。

嘗て富める青年教師彼に來つて、『永生をつぐために我何をなすべき乎』と問ひしに、『爾なほ一をかくその所有を悉く售て貧者に施せさらば天に於て財あらん』と答へた（路一八〇二二）。此青年は品行方正の人だが、其欠點とも云ふべきは、財産に對する執着心であつた。耶蘇は其青年の富を不正のものとも云はなければ、富其物を非難もしない。彼に其所有を售て貧者に施せと命じた事を見れば、所有權を認めた事が明かである。何となれば自分の所有の外は售る事の出来ぬからである。耶蘇は屢施濟の徳について語られたが（太五〇四二路六〇卅）、人は自分の物の外は、之を施すの權利

なきを見れば、施濟は間接に所有權のあるを證明するのである。彼の弟子の中にも、多少財産を所有したのもあつたが、耶蘇の弟子とならんとて、其家業を棄てたが、其財産をば棄てなかつた。勿論ザアカイの如く、其信仰の道に入るに及んで、不正の方法に由て得た財産をば棄てた實例もあるが（路一九〇八）、財産其物は必ずしも信仰と兩立し難いものではない。ガリラヤ湖上で漁業に従事したシモンや、ゼベダイの子ヤコブやヨハネの、耶蘇に召されて其弟子となつた時、『彼等舟を岸に寄せおき一切を捨てイエスに従へり』（路五〇一一）と記されてあるが、彼等の舟や網を捨てたのは、其所有權を捨てたのではない、何となれば主の死後彼等再び其舟や網を用ひて、ガリラヤ湖で漁りを始めたからである。耶蘇が其傳道の費用の幾分を、信者中の財産家に仰いだことを見ても、所有權を否認せざる事が明かである。

馬太傳に記された比喩の中には、『天國は或人の旅行せんとして其僕をよび所有を彼等に預るが如し』（二五〇一四）とあるが、此比喩に依れば、主人は或る僕には銀五千或る者には二千、或る者には一千を預け、そして五千を預つたものは更に五千を得、

二千を預つたものは更に二千を得て、各其勤勉忠實に報ひられたが、一千を預つたものはそれを地に藏くして、少しの利をも得ざるが爲めに、無益の僕として遂に退けられた。もし耶蘇が一切の所有權を否認したとすれば、斯る比喻は意義をなさぬものとなる。

共産主義の人々は、初代の教會にこの主義の實行された實例として、使徒行傳の記事を擧げて居る。それは『信者は皆一處あつまりに會あつまりて諸物を共にし産業と其所有を賣りて各人の用に從ひ之を分與へぬ』(二〇四四、四五)との記事である。是れは共産主義の實例とも見らるべき事實であるが、同時に是れは一時的の便法であつたといふ事も亦事實である。是れは主義の實行と見るよりも、或る事情に迫られて、當時斯る共同生活を營まねばならぬ必要から生じた事であつた。此に『信者はみな一處あつまりにあつまりて』とあるが「ペンテコステ」の日に受洗したものはかりでも、三千人の多きに達して居たからには、斯る多數の人々の一處に生活するのは到底不可能な事であつた。また彼等が天下の國々より集つたユダヤ人なれば、長くエルサレムに逗留するものではなく、

節筵の終はるを待つて、各歸國したと見ねばならぬ。然らば共同生活を營んだのは、エルサレム教會に屬する少數の信者に限られたであらう。信仰の未だ薄弱な時に、しかも外界の状態が基督教會に不利なる時に、信者の散在は信仰の維持上危険であつたが爲めに、一時共同の精神を強めんとて、一處に生活を營み、之が爲めに比較的に貧しい信者が大に助けられたが、それさへ永く繼續されなかつたのを見ても、共産主義の實行と見るべきものでない事が明かである。

耶蘇は決して共産主義を主唱せず、また所有權を否認しなかつたが、富者の危険を指摘したのは、明かな事實である。前に擧げた青年教師の富めるが爲めに、耶蘇に従ふの決心つきかね、遂に憂ひて去り往くを見るや、耶蘇其弟子に『財を有るもの、神の國に入るは如何に難かな』(路十〇二三)と歎かれた。是れ何人に拘はらず凡て富める者の天國に入るの難きを歎かれたのではなく、此青年の如き富者即ち富を最高の財として崇拜するものを歎かれたのであつたが、弟子は主の言を誤解し、富めるものは何人なりとも、其富めるが故を以て、天國に入ることの不可能なものと解したか

ら、其誤解を解かんとて耶蘇は『財を有るもの』といふ言の代りに、『財を恃むもの』神の國に入るは如何に難かな』と云ひ換へた。そして單に難かなと云ふたばかりではなく、『富者の神の國に入るよりも駱駝の針の孔を穿るは却て易し』と云ひてその如何程難い乎を示された。彼は斯くまで平易に其理を説明されたが、弟子等は尙ほ其意を了解し兼ねたと見えて、其言に驚き、『さらば誰か救を得べき乎』と怪んだ。富其物は如何に多ければとて、それが神の國に入るの故障とはならぬが、財を恃むの心、之を何物よりも貴ぶの心、即ち之を崇拜するの心は即ち天國に入るの大障害物となる。富を恃むの心は、富以外の何物をも恃まざるの心、即ち神をすら恃まざるの心である。

此の心は宗教と兩立の出來ざるものなれば、山上の説教中に『人は二人の主に事ると能はずそはこれを惡みかれを愛しみ此を親み彼を疎べければなりなんぢら神と財に兼事ること能はず』(太六〇二四)と云ふて居る。神の國に入る能はざるものは、富に事へて神に事へざるもの、富に親んで神を疎んずるもの、富を愛みて神を憎むものである。耶蘇の目に不幸なものと映じたのは、斯る富者であつた。更に彼は斯る富者の

愚なるを示さんとて、左の比喩を語られた。

『或富人その田畑よく豊ければ自ら付いひけるは我が作物を藏る所なきを如何せん又曰けるはわれ斯くなさん我倉を毀ち更に大なるを建てすべてわが作物と貨を其所に藏べし斯て靈魂にむかひ靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物を有たれば安心して食飲樂めよといはんとす然るに神これにいひけるは無知なるものよ今夜なんぢが靈魂とらるゝことあるべしさらば爾の備し物は誰がものになるや凡そ己の爲に財を積へ神に就て富ざるものは此の如きなり』(路一二〇一六以下)と。此比喩は富者の神を恃まず、唯己が財産を恃んで、世を安樂に送らんとするの誤りを教へたのである。此富者は其富の増加するに従つて、益それのみ依頼し、物質に心を奪はれ、飲食物さへあらば永久に幸福の生活を繼續し得るものと思ひ、之が爲めに神を忘れ、その身の死ぬる事すらも忘れ、靈に生きずに専ら物質のみ生きんとする甚だ愚なものであつた。彼は其欲する如くに、物質については甚だ富めるものとなつたが、神については甚だ貧しきものとなつた。斯る富者の天國に入り難きも亦當然の事といはねばならぬ。

自分が貧しかつたからとて、耶蘇はそれが爲めに富者に反感を懐くやうな事が、決してなかつたが、彼の目に映じた富者はその精神上極めて危険なものであつた。然るに世の人々は富者の外的境遇を見て羨むが、其内的生命の危険なるを感知せぬから、耶蘇は富めるものとラザロの物語を語つて、警戒を加へた。其物語によれば、紫袍と細布を衣て、日々奢り楽しんで居る富者があつた。其富者の門前にはラザロといふ極めて貧しきものが、腫物をやみたるまゝで置かれたのは、富者の食卓より落つるパンの餘屑で、其空腹を満さんが爲めであつた。何人もその腫物を癒して呉るゝものなく、富者も亦之を憐んだ様子がない。折々犬來つて其腫物を舐めたとあるからには、彼には犬の外には一人の同情者もなかつたやうに見ゆる。其苦しき生活に疲れた爲めか、彼は富者よりも先きに死んだが、彼が物質に於てこそ貧しかつたが、其心の富るが爲めに、死後アブラハムの懷(天堂)に移された。然るに豪奢を極めた富者も亦其生命のみは自由にならねば、貧しきものと同様に世を去つたが、物質に富んでも、神について富まざるが爲めに、隱府に落された。彼れ己が門前に置かれた乞食のラザロの、

天堂にあるを見て、己れと位地の顛倒せるに驚いたであらう。世にありし時には一瞥だも興へなかつた貧者ラザロに、今や其憐れを乞はねばならぬ身となつたのは、堪へ難い苦痛であつたらうが、彼は苦痛のあまり、ラザロの指の尖を水にひたして、我が舌を冷さんことをアブラハムに哀願したが、それは無効であつた。耶蘇の此物語は富者の耳には皮肉に聞こへたであらうが、富者の隱府に落ちたのは、富めるが爲めではなくして、其豪奢を極めた爲めであつた。またラザロの天上に上つたのも、其貧しきが爲めではなくして、其貧しきが中にも尙ほ神に事へた爲めであつた。此物語は即ち富めるものゝ、天國に入るの如何に難き乎を、其實例を擧げて示したのである。『戒心して貪心を慎めよそれ人の生命は所蓄の饒なるにはよらざる也』(路一二〇一五)とは、人生の價値は富の有無の爲めに増減するものにあらざるを教へたのである。人生の眞の幸福は富あつても得らるゝものではなく、富なくとも亦得られぬものでもなく、唯神を最高の富として求むる心の有無に依つて定まるのみである。

富者の必ずしも不幸ならざる事は、耶蘇に従ふたものゝ中に、富者のあつた事を見

ても知れる。もし彼が富者に反感を懐いて、之を誣ふ心があつたとすれば、之を己が弟子の仲間に加ふる筈もなかつたが、十二使徒の中にも、また信者の中にも富者があつた。使徒中の富者は税吏マタイで、聖書に彼を富者と稱して居る。當時の税吏は一般に富めるものであつたが、マタイが主の爲めに盛なる筵を催うした(路五〇二九)とあるを見ても、その富者なるを知るに足る。ザアカイも亦税吏で、富者と云はれて居る(路一九〇二)が、彼は耶蘇を己が家に歓迎し、親しく其教を聞いて、前非を悔ひ、是れまで富に事へた心を以て、神に事ふるの決心をなし、新生涯に入るについて其財産の半を貧者に施し、不法に人より取りたるものは、之を四倍にして辨償した。財産について富んだザアカイは、今や神について富む人となつた。彼はたとへ其財産の半を貧者に施し、また其上不法に取つた金を四倍にして辨償したとするも、尙ほ彼は富めるものであつたらうが、信仰の生活に入つたのを見れば、富者必ずしも天國に入り難いと極まつたものでもない。また耶蘇に従ふたもの、中に、議員なるアリマタヤのヨセフといふ人がある。彼は『神の國をのぞめるもの』(可一五〇四三)と云はれ、

また『富人』(太二七〇五八)とも云はれて居る。其故郷がアリマタヤの邑なるに、尙ほエルサレムに別邸を有つたのを見れば、富める人であつた事が明かだが、彼は耶蘇の弟子となつた。彼の所有した富はその信仰の故障物とならぬのみならず、信仰の働を助くるものとなつた。更に同じ議員なるニコデモも亦信仰生活に入つた。彼は嘗て夜陰かに耶蘇を訪問して、新生についてのを聞いたが、當時別段信仰を起したやうにも見えなかつた。其後餘程其教に感ずる所があつたと見え、「パリサイ」人ではありながらも、耶蘇に反抗を試むる仲間に加はらずに、暗に彼を辯護するの位地に立つた。彼もヨセフと力を協はせ、耶蘇を葬らんとて、『没薬と蘆薈を和せ凡そ百斤ばかり携來る』(約一九〇三九)とあるからには、富める人であつたに相違がない。されば富める者の天國に入るは必ずしも難事ではなかつたのである。

是れまで述べ來つた通り、耶蘇は富者を誣ふたものでもなければ、之に反感を懐いたものでもないが、富者よりも貧者に同情を寄せたのは明かな事實で、之には色々の理由もあつたらうが、彼れ自身の貧者であつた事も其理由の重なるものであらう。人は其



境遇の相類する程、同情の深いのは自然の道理で、同病相憐むのも同じ心理である。富者は富者を理解する程には、貧者を理解すること難く、貧者も亦貧者を理解する程に富者を理解するのは難い。耶蘇は貧者の家庭に生れて、自身も亦貧者としての生活をなした。彼は大工の職を取つたとはいへども、尙ほ貧しい大工であつた。また三十年間片田舎に貧乏生活を送つたのみならず、其公生涯に入つた後といへども、尙ほ其貧困の生活をつゞけた。『狐は穴ある天空の鳥は巢ありされども人の子は枕する所なし』(路九〇五八)と云ふたのは、他にも意義があつたらうが、その貧困を示した事も亦明かである。彼がカペナウムにあつた時、納金を集るもの來つたが、己れ之を納むるの義務なきも、彼等を礙かせざらんが爲に、ペテロに命じて『爾海に往て釣を垂よ初に釣る魚を取てその口をひらかば金一を得べしそれを取て我と爾の爲に彼等に納めよ』(太一八〇二七)と云ふた。或る學者は此記事の歴史的事實たるを否認するが、よし是れは事實でなかつたにせよ、尙ほ彼の貧困を間接に證明するに足る、何となれば彼もし貧者でなかつたとすれば、斯る傳説が彼に適はしからぬからである。彼がその

死に臨んで、母をヨハネに托したのも、其遺産のなきが爲めであらう。

たとへ耶蘇は貧しき人であつたにせよ、今日の所謂貧民、即ち人の救助を仰がずに生活の出來ぬ程の極貧の人でなつた事も、亦我等の記憶せねばならぬ事である。彼が三十年間大工の職業に依つて、其一家を支へた。健康で勤勉なものが極貧の生活を送らねばならぬ筈なく、たとへ富まぬにせよ、衣食住の資に窮するが如き事は全然あるまじき事である。彼が人に施した事があつたが、人より施を受けた事がない。彼には資産がなかつたが、其弟子の中には相應な資産家もあり、殊に婦人の弟子の中には富める者のあつたが爲めに、彼に必要なものは喜んで提供した。彼れ自身が貧者であつたが、彼を支給したものは富者であつた。けれども彼は富者の友を以て自ら任せず、貧者の友を以て自ら任じたのは、貧者に同情すべき理由のあつたからである。彼がパプテスマのヨハネの質問に對した答の中にも『貧者は福音を聞せらる』(太一一〇五)と云ひ、又ナザレの會堂に於ても、おのれのメシヤたるを證明せんとして、『貧者に福音を宣傳ん事を我に膏を沃て任じ』(路四〇一八)と云へるイザヤの預言を朗讀し

た。また「天國は或王その子の爲に婚筵を設るが如し」と云へる比喩の物語の中には、其王の言として「速に邑の衢巷に往て貧者癡疾跛者瞽者などを此に引來れ」(路一四〇二一)とある。そして貧者がその招かるべき客の第一位を占めたのは、是れ貧者の天國に歓迎さるゝの意を示したのであらう。耶蘇は貧しい身分ながらも、貧者に施す習慣があつた。聖書に其施について直接に記して居らぬ。もし彼に施す習慣がなかつたとすれば、甚だ其意を解するに苦む記事がある。最後の逾越節の筵會で、そのユダに向つて云はれた言に「爾が爲さんとする事は速かになせ」(約一三〇二七)とあるが、此言の意義がユダには直ちに知れたが、他の弟子等には全然知れなかつたが爲めに、彼等は勝手に想像した。「ユダは金囊をあづかれる故にイエス彼をして節筵について用べき物を市しむるならんかまたは貧者に施さしむるならんとおもへり」(約一三〇二九)と記されあるを見れば、耶蘇の一團はあまり財力に富んでは居なかつたにせよ、尙ほそれにも拘はらず、折々貧者に施した事があつたと見ゆる。然らずば斯る想像もその意義をなさぬ事となる。

貧しきものを輕蔑して富めるものを尊敬するのは、人情の通弊だが、是れ形を見て心を見ざるより生ずる結果である。然るに耶蘇は人の形よりも心を見て、其人格の價值を定めたから、富めるものも貴ぶに足らず、貧しきものも輕んずべきにあらざるを知つた。彼は富める人の多額の金を神殿に献げたるを見、また貧しき婆婦の「レプタ」二を献げたるを見て、「此貧しき婆はすべての者よりも多く投たりそはかれらは皆そのあまりある所より損輸を神にさげ此婦は不足ところより其所有をことごとく献たればなり」とて、賞賛したのは、其形を見ずして其心を見たからである。献金の多少より云は、富者は多く納め、貧者は少く納めたが、富者は虚榮心より其餘れるものを納め、貧しき婆は眞心より「レプタ」二つ、即ちその所有全體を献げたから、耶蘇は其精神の貴きを賞賛したのである。

富めるものは其富を恃んで、神を敬はざるのみならず、人までも輕んずる高慢心のあつたが爲めに、耶蘇をも亦輕蔑した。是れ彼が富めるものゝ友とならざる所以である。「有司またパリサイの人の中に彼を信するものあらんや」(約七〇四八)との言の中

には、耶蘇が當時の上流社會の人々に輕蔑された事が見へて居る。學者は彼を以て無學の人として輕んじ、富めるものは彼を以て貧者として侮つた。有徳の青年敎法師すらも、『その所有を悉く售て貧者に施せ』と云はれて、其言に従ひ兼ね、財産を棄つるよりも、寧ろ耶蘇を棄つるを有利と考へた。彼は財産の爲めならば、何物を棄つるも厭はなかつた。彼の貧者を棄てたのは、彼等を價値なきものと見たからである。彼は當時の上流社會を代表したものである。

耶蘇には富者は高慢に見へたが、貧者は一般に謙遜に見へた。彼の建設せんとする神國の理想より云へば、高慢程惡徳なるはなく、謙遜程善徳はない。『凡そ自ら高ぶるものは卑され自ら卑たるものは高くせらるべし』(路一四〇一一)とある如く、神國は謙遜なるものゝ入るべき國である。耶蘇嬰兒を呼び、弟子等の前に立せ、『もし改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ことを得じされば凡そこの嬰兒のごとく自ら謙るものは天國に於て大なるものなり』(太一八〇三四)といふた。彼の富者に不快を感じたのは、其富めるが爲めではなくして、其高慢なるが爲めであつた。また貧者を愛し

たのは、其貧しきが爲めではなくして、その謙遜なるが爲めであつた。謙遜は神國民の重大な資格である。

富者は富者のみを以て人らしき人と視て、貧者の人格を無視するのは、古今東西同一轍である。然るに耶蘇は人の人たるは、其人の有てるものに依らずして、其精神即ち人格にありと見たから、高慢な富者は謙遜な貧者よりも、遙かに劣等なものに見へた。そして自らその劣等なるを知らざるが爲めに到底濟度し難きものと見へた。富者は天の祝福を専有するものゝ如くに妄想して、自ら安ずれども、耶蘇より見れば自づから己れを卑くする貧者こそ、天の祝福を受くるに足る幸福な人であつた。彼は人々に向つて決して富めるものとなる勿れとも云はず、また貧しきものとなれとも云はぬ。神の祝福を受くるに適するものは、心の貧しきものである。『心の貧しきものは福なり天國は即ち其人の有なればなり』(太五〇三)。彼は心の貧しきものを富者に見るよりも、多く貧者に見た。是れ彼が貧者を愛し、喜んで之に福音を宣傳した所以である。

## 第十八章 罪人の友

貧者の友なる耶蘇はまた罪人の友であつた。彼の周圍には常に様々の階級の人々が様々の動機から群り來つた。或る人は其教を聽かんとて、或る人は其失言を見出して非難せんとて、或る人は疾をいやされんとて、或る人は單に好奇心に驅られて、奇跡を見んとて集つた。其動機は斯の如くに區々であつたが、其人々を大別すれば、好意を有つたものと、敵意を有つたものとの二つとなる。其好意を有つた人々は民衆で、敵意を有つたものゝ重なるものは、當時の宗教家どもであつた。民衆の中でも深く彼の恩愛に感激し、彼も亦特に之を愛して其友を以て自ら任じたのは、税吏と罪ある人々の階級であつた。

ロマ帝國がパレスチナを其領土に入れて以來、課税の方法はロマ法を其儘適用したので、税金取立を個人又は團體に請負はせる事とした。其請負人は税金取立をなさんが爲めに、更に人々を雇入れ、其雇はれた人の中には、『税吏』又は『税吏の長』なる

ものがある。税吏として雇はれたものは、一般に土着の人、即ち地方の事情に通じたものであつた。彼等は敵國の政府に雇はるゝ程の人なれば、多くは唯利を事とする鐵面皮のものとも、同胞よりどんな悪評を受くとも、毫も之を耻とせずして、唯其懷を肥やすを以て満足とする非愛國的の輩である。彼等はロマ政府の權力を以て税金を徴収するから、自然に其權力を亂用して、同胞を壓制し、時には法外の税金を課し、時には賄賂を取つて私腹を肥やし、唯眼中利あるのみであるから、人民も亦深く之を憎めども、ロマ政府の權力を以て己等に接するが爲めに、不本意ながらも怨を吞んで其横暴に任かして居た。けれども税吏と云へば、不正不義の徒、鐵面皮の守錢奴非愛國者、人面獸心の輩を意味する代名詞で、ユダヤ人は彼等を社會外に放逐し、宗教上の特權を剝奪し、アブラハムの子孫たる光榮を失へるもの、また半異邦人として取扱ひ（太一八〇一七、同五〇四六、四七）、また醜業婦同様に甚だ卑しき階級に屬するものと視做した（太二一〇三二）、その不徳義なるの故により、民事上の訴訟についての證人となる資格なく、會堂に出席する事すらも許されず、その手より出でたる金

は不潔として會堂の施濟金箱に入れず、また神殿への献金ともせず、其人物も所有物も皆汚れたものと視做されたのも亦止むを得ない。彼等も亦斯る取扱を受くるを承知の上で、其職についたものなれば、餘程の破廉耻なものともであつたと見ゆる。特にガリラヤ地方は異邦人の雜居地なれば、おのづから律法に對する態度も、ユダヤの地に比すれば緩慢に流れ、その上異邦人の惡風も亦流行したから、正統派のユダヤ人の目より見れば、汚れた人間と視做さるべき不正の輩が多くあつた。是等の人々に『罪ある人』と云ふ忌はしき名稱を與へて、ユダヤ人は之を輕蔑し、税吏と同階級に屬するものと視做して、一般に之等を遠ざけて居つた。

ユダヤ人は是等の税吏や罪ある人を極端まで輕蔑したのは、自分共のみ清潔で、彼等の不潔なるが爲めではなく、却つて自分共の精神の彼等にも尙ほ劣る所あるにも拘はらず、之を輕蔑したのは一般の習慣であつた。耶蘇の神殿を潔めた時には『我家は祈禱の家と稱らるべしと録さる然るに爾曹これを盜賊の巢となせり』（太二一〇一三）と云ふたのを見て、姦商と結托して神聖の神殿を盜賊の巢と化した祭司長等が、税

吏以上に汚れたもの、即ち盜賊の類であつた。然るに尙ほ自分共は義人を以て任じた爲めに、税吏や罪あるものどもを不潔の人間として遠ざけた。之を遠ざけた階級と遠ざけられた階級との對照を示した面白き實例が聖書に記されて居る。此實例は二者の外内と内面との相違を遺憾なく發揮した。路加の記せる處に依れば、「パリサイ」の人と税吏とは同時に神殿に上り、各其處で自分等の精神状態の特徴を赤裸々に發表した。「パリサイ」の人は神の前に得意然として立ち、其傍に罪深き税吏の立てるを見て之を輕蔑し、「神よ我は他の人の如く強索不義姦淫せずまたこの税吏の如くにもあらざるを謝すわれ七日間に二次斷食し又すべて獲るもの、十分の一を献たり」と祈つた。彼は祈りながら自分の善行を列擧し、他の人を非議し、現に己が傍に立てる税吏を輕蔑し、神前に其律法を完全に實行した事を誇つた。是は當時の上流に位した宗教家の心狀を代表したものである。然るにその傍に立てる税吏は、彼とは全然其態度を異にし、何等口にするべき善行のなきのみならず、唯あるもの、罪なるを知り、目を上ぐるの勢さへもなく、慚愧に堪へざるもの、如くに己が胸をうちながら、唯一言「神よ罪

人なる我を憐み給へ」と祈つたのみで、更に加ふべき何等の言もなかつたのは、深く己が罪を哀んだためである。彼は其傍にある「パリサイ」の人に見下げられたが、毫も之を不快に感ぜざるのみならず、その當然なるを知つて自らを卑くしたのは、神前に其罪人たるを自覺したからである。自ら義とする「パリサイ」人と、自ら罪する税吏とは、人の前に於ては兎も角も、神前に於ては雲泥の差がある。耶蘇この二人を見て、後弟子に語つて云はれた、「われなんぢらに告ん此人は彼の人よりも義とせられて家に歸たりそれすべて自己を高ぶるものは卑られ自己を卑するものは高らるべし」(路一八〇一四)と。斯の如く當時の宗教家は一般に税吏を輕蔑したが、耶蘇は税吏に對してどんな態度を取つたであらう。

税吏に對する耶蘇の態度は、當時の宗教家に一驚を喫せしめた程に、一般の習慣と異つて居た。エダヤ人は彼等を以て人間外の人間として、一般の人々より嚴密に區別したが、彼は何等の區別をもなさず、何人をも悉く神前に罪人と見たから、同様に悔改めねばならぬものとした。彼の目には税吏は自ら其罪を知れる罪人として、また「パ

「サイ」人や其他の宗教家等は、其罪を自覺せざる罪人として映じた。同じ罪人ながらも、前者は救はれ易き罪人だが、後者は救はれ難き罪人である。彼はこの救はれ難き罪人を棄つるの心は毫もなかつたが、彼等に救ひを求むる心のなかつたが爲めに、招いても彼に従はなかつたのは、棄てられたのではなく、自ら己れを棄てたのである。『犬に聖物を與ふる勿れまた豕の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ恐くは足にて之を踐ふりかへりて爾曹を噬やぶらん』(七〇六)と云ふた。耶蘇は彼等の好まざるに、之に強ひて福音を聞せんとはせず、喜んで聞くものに之を聞かせんとて、税吏や罪ある人に往きて彼等と交はり、之と食を共にする程に親密になつた。彼の心を知らざる宗教家等が之を見て大に怪み、汚れた税吏、救はるべき價值なき罪人と交はる耶蘇の行爲を非難したのは、如何にも彼等にはふさはしき事であつた。之に對する耶蘇の辯解も亦その使命の特徴を發揮した、『康強なるものは醫者の助を需す唯病あるものこれをもとむ……それわが來るは義人を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり』(太九〇一二、一二三)と。是れ當時の宗教家と耶蘇の相違せる著しき點である。

耶蘇はガリラヤ湖畔の説教を終へて、カペナウムの邑を通過せしに、アルバイの子レビといふ税吏の役所に坐するを見て、我に従へといふた(可二〇一四)。馬太傳には其名をレビと云はずに、マタイと云ふて居る(九〇九)。聖書の文面より云へば、耶蘇は初對面のマタイを突然召して、其弟子としたやうに見ゆるが、それでは彼を召した理由も、またマタイが其召に應じて弟子となつた理由も知れぬことゝなから、矢張双方共に前以て識つたと見ねばならぬ。マタイの勤務した税關はカペナウムにあつた。この地はガリラヤ傳道の根據地なれば、傳道の中心點でもあり、またこの附近で屢奇跡も行はれたからには、この地の人にして耶蘇を知らぬ筈がない。この地の人々が最初から彼の教を聞いたが爲めに、彼がガリラヤの邑々の不信を歎かれた時、この邑について亦左の如くに云はれた、『既に天にまで擧られしカペナウムよ又隱府に落さるべしそはなんぢに行し異能をもしソドムに行しならば今日までも尙保存しならん我なんぢらに告ん審判の日にソドムの地は爾よりも却て易かるべし』(太一一〇二三、二四)と。此言はこの地の人々の幾度となく耶蘇の教を聞いた事を示して居る。然らばマタ

イも亦隠かに聴衆の中に混じて其教を聞き、啻に其教に感激したのみならず、其人物の偉大なるを知り、其博愛の精神に動かされて、信仰を告白したものと見ゆる。けれども未だ師弟の縁を結ばざれば、引續いて彼は税吏として役所に務めて居つたが、既に其職を棄つるの決心があつたであらう。そこで今主に召された爲め、斷然其職を投げうつて其召に應じたのである。ユダヤの宗教家に棄てられた税吏は、今耶蘇に拾ひ取られたのみならず、其弟子の一人となり、後十二弟子の一人に選まれ、更に主の傳記を萬世に傳ふる著者となつたのは、實に意外な事といはねばならぬ。

税吏マタイの耶蘇の弟子となつた後、一日主の爲めに盛大な歓迎會を催うし、己が階級の人々を多く其席に招いて、之を彼に紹介した。そこで多くの税吏が彼と親しく交はるの機會を得たが、耶蘇も亦彼等に福音を宣傳ふる機會を得た。マタイの主を招いて宴會を開いて事も、また主が其招待に應じて食を共にした事も、其外觀より見れば左までの事件でもなかつたが、其精神より見れば是れ實に重大事件であつた。税吏の身分として、宗教上の教師を招待する事も、また教師の身分として税吏の招待に應

ずる事も、兩ながら破天荒の行爲であつた。招いた人も必ずしも響應するのは其目的ではなく、招かれた人も亦響應を受くるのは其目的ではなく、双方共に更に高尚な靈的目的があつた。マタイは當時の教師に見棄てられた税吏の仲間に、天國の福音を聞かせんとしたが、耶蘇も亦見棄てられた可憐の階級の人々を拾ひ上げんとした。彼は人に棄てられたもの、友となつて之を救はんとしたから、マタイの開いた宴會は天國の宴會の象徴とも見るべきものであらう。此宴會の席上で彼はどんな教を語られた乎は、いづれの福音書にも記されなかつたが、我等は容易に之を推測する事が出来る。即ち如何なる罪人なりとも、悔改めて彼を信せば、天國の民たるを得べしと教へたであらう。異邦人同様に取扱はれた税吏も、天國に入るの資格ありとの耶蘇の教を聞いて、如何に満足したであらう。よし彼が此宴會に出席して、何をも語らぬとするも、尙ほ彼等と飲食を共にした行爲其物は既に大説教であつた。即ち如何なる人をも救ひ給ふメシヤたるを語つた大説教であつた。『我にきたるものは我必ず之を棄てず』との精神は、其行爲自づからが雄辯に語つたのである。この偉大な行爲も、當時の宗教家



には、甚だ不謹慎な所爲として非難されたが、『わが来るは義人を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり』との言を以て之に答へた。

「パリサイ」人は一般に耶蘇に對して反抗の態度を取つたが、珍らしくも彼等の中に好意を表したのもあつた。そして彼が耶蘇を招いて宴會を開いた物語の中に、罪ある人に對する彼の同情が美しく描かれた。「パリサイ」人の彼を招いた目的については、何事も記されては居ないが、彼もマタイの如くに悔改めて信仰の道に入らる喜と感謝の意を表せんとして、宴會を開いたやうに思はるゝ。其記事に『其邑の中に悪行をなせる婦ありけるがイエスがパリサイの人の家に坐せるを知て蠟石の盒に香膏を携來りイエスの後にたち足下に哭き涙にて其足を濡し首の髪をもて之を拭かつ其足に口をつけまた香膏を之に抹り』路七〇三七、三八とある。此婦人は多分七つの惡鬼を逐出されたマグダラのマリヤであらう。世間の評判に依れば、彼は不品行の婦で、自分でもそれを悔悟し、罪人として耶蘇の背後に立つた。その涙を流したのは、罪を悔ゆるの心を表はし、香膏を彼の足に抹つたのは、感謝の意を表はしたのである。彼は耶

蘇の教を聽いて、己が罪の深きを知り、悔改と感謝の心を表はさんとして、その最善を盡くしたのであつたが、耶蘇を招いた「パリサイ」の人が、この婦人の精神を理解せず、また此婦人に對する耶蘇の態度をも悟らざれば、心ひそかに怪みて、『此人もし預言者ならば押し者の誰なるかまた如何なる婦なる乎を知らん此婦は悪行をなせるものなり』と云ふた。一般の教師等は斯る婦人のその身邊に近寄るを許さざる習慣なるに、耶蘇は毫も之を其意に介せず、己が身に觸るゝことさへ許したのは、主人なる「パリサイ」人の意外に感じた所であつたが、罪人の友を以て自ら任じた以上は、斯る婦人を悔改に導くのは、メシヤとしての彼の任務であつた。更に主人の疑惑を解かんとて、耶蘇は『或債主に二人の負債人ありて一人は金五百一人は五十を負しに償方なかりければ債主この二人を免たり然ば二人の者その債主を愛することいづれか多き我に聞せよ』といふた。是れは常識あるものゝ容易に答へ得る問なれば、主人は『我思ふに免るゝ事の多きものならん』と答へた。耶蘇その答を正當と認めしたが、主人の未だ其事に深い意義のあるに氣の付かざるが爲めに、彼はそれを説明せんとして婦人を指しながら、主人に左の

如くに語つた。『此婦を見る乎我なんぢの家に入るに爾は我足に水をあたへず此婦は涙にて我足を濡し首の髪をもて拭り爾は我に口を接す此婦は我此處に入りし時より我足に口をつけてやまず爾は我首に膏を抹す此婦は我足に香膏を抹り是故に我なんぢに云はん此婦の多の罪は赦れたり之に因て其愛も亦多なり赦さるゝこと少きものは其愛も亦少し』(路七〇三六以下)と。耶蘇は罪人の友なれば、罪の多きもの程之を憐み、また人も其赦された罪の多き程恩愛を感じるの念も深い筈である。税吏や罪ある人々の彼に愛された理由も、また彼等の耶蘇を深く愛した理由も、此物語に依りて明かに示された。放蕩子や迷へる羊を尋ぬる牧者の比喻は、いづれも耶蘇の罪人を愛する事の深さを示して居る。彼は義人を招かずして、罪ある人を招いた。『凡て勞たるものまた重を負るものは我に來れ我なんぢらを息せん』(太一一〇二八)との招きの言は、義人を招いた言ではない。素より義人は世に一人もあるべき筈ないが、自稱義人はいくらもある。彼等は呼べども來らぬ故に、耶蘇は重きを負ふて惱めるものと呼び、之を救ひ、之を慰め、以て彼等の友たる眞實を發揮した。

## 第十九章 耶蘇と婦人

男尊女卑の習慣は古代東洋諸國一般に行はれたもので、ユダヤも亦例外たるを得なかつた。他國に於ける男尊女卑の思想の由來はいろ／＼であらうが、ユダヤに於ける其思想の由來は、使徒パウロの言に依て察せらるゝ。彼は『男は神の像と榮』(哥前一〇七)なりと云ひ、『そは男は女より出しにあらす女は男より出たればなりまた男は女の爲に造られしにあらす女は男の爲に造られしなり』(同一一〇八、九)と云ひ、『女の首は男なり』(同一一、〇三)と云ひ、『そはアダムは前に造られエバは後に造られたればなりアダムは惑されざりしなり婦は惑れて罪に陥れり』(提前二〇一三、一四)と云ふたのは、耶蘇自身の思想ではなくして、ユダヤ固有の思想を述べたのであらう。是等の言に依れば、男尊女卑の思想の由來は知れ、パウロもこの思想を全然脱し兼ねたと見へて、『われ婦女教を施すこと、男の上に權を執ることを許さず婦女は只安靜にすべし』(提前二〇一二)と云ふたが、是れパウロのユダヤ人らしい

處である。けれども彼は耶蘇の使徒となつたからには、普通のユダヤ人とは違ひ、男女平等の思想をも發表した。是れ彼が耶蘇の思想の感化を受けたが爲めで、左の言はたとひパウロの口より出たとはいへ、耶蘇の思想を代表したと見るべきものである。曰『爾曹は皆キリストイエスを信するに由て神の子となれりそは凡そバプテスマを受けてキリストに入る爾曹はキリストを衣たるものなればなり斯る者の中にはユダヤ人またギリシヤ人或は奴隸或は自主或は男或は女の分なしそはなんぢら皆キリストイエスに在て一なればなり』(加三〇二六—二八)と。

耶蘇は實際婦人に對して如何なる態度を取つたかといふに、男子に對する態度と異なる所がなかつた。當時の學者は直接に婦人と言を交はさぬ習慣であつたが、彼は斯る習慣を知らながらも、毫も之を顧慮する所なく、自由に婦人と語つた。彼がサマリヤ通過の際、ヤコブの井の傍で、サマリヤの婦人と語つた。婦より男に話し掛けるのも禮でなければ、男より女に話し掛けるのも亦禮ではなかつた。然るに耶蘇も婦と語り、婦も彼と語つたのは、いづれより始めに云ひ出した乎と云へば、それは耶蘇より

であつた。彼は婦に向つて『我に飲せよ』といふた。此婦は勿論淑女でなかつたのみならず、人格の卑しきものではあつたが、自分から進んで男に言を掛ける程の無遠慮なものでもなかつた。されば耶蘇より進んで言を掛けなかつたならば、彼も水を汲んだまゝ邑へ歸つたのであらうが、耶蘇は習慣を破つて、『我に飲せよ』と云ひ出した。約翰傳に『時に弟子きたりて彼の婦と語れるを奇みけれと其何を求るや又何故に是と語れるか問へるものなかりき』(四〇二七)とあるを見れば、その弟子すらも主の婦人と語つたのを意外に感じたのである。勿論彼等もユダヤ人なれば、婦人とは語らなかつたであらうが、耶蘇をも同様に考へたのは、淺見であつた。彼は男女の別を問はず、その人間たる以上は、之を救ふを己が使命と感じたから、機會ある毎に之を捉へて、其場合に適する救の眞理を語り聞かせた。彼は婦人に教を語つたのみならず、更に進んで之を己が友として、親密に交際した(路十〇三八約一一〇五)。また婦人の質問に應じ、その不幸に同情し、己れに同情して哀んだ婦人等を見るや、『エルサレムの子よ我か爲に哭くなかれ惟おのれと己が子の爲になけ』(路二三〇二八)と云

ふて之を慰めた。また七の悪鬼に憑れたマгдаラのマリヤを憫んで之を癒し（路八〇二）、カナンの婦人の懇願を入れて、其娘を癒したのみならず、其婦人の信仰を賞賛して、『婦よ爾の信仰は大なり願の如く爾に成べし』（太一五〇二八）というた。また「パン」の奇跡を行ふた時には、婦人および子供等にまでも一様に食物を供給した（太一五〇三八）。

婦人に對する耶蘇の態度は極めて親切であつた。己れに助を求むるものをば決して拒んだことのなかつたのみならず、時としては未だ助を來めざるに先ちて、自ら進んで之を助けた事すらもあつた。路加傳に左の記事がある。『イエス安息日に或會堂にて教へしに十八年鬼に患わづらはされたる婦ありかてまり偃かてまりて少も伸ること能ざりきイエス之を見てよび婦よ爾は其病より釋さるゝといひて手を婦に按ければ直に伸て神を讚美ほめたたり』（一三〇十一一三）と。此婦人は多分耶蘇に癒されんとて、其會堂に携へられたものではあらうが、未だ其願を述べぬ先きに、疾くも彼は其憐むべき状態を一見して、之に同情を表し、自ら進んで之を癒したのである。また同じ福音書に左の如き記事もある。『翌

日イエスナインと云る邑に往けるに許多の弟子および許多の人々も共に往り邑の門に近づきしとき昇出さるゝ死人あり其母は嫠あはれにて此は獨の子なり邑の人々多くこれに伴ふ主嫠を見て憫み哭なかれといひて近より其觀に手をつければ昇る者ども止めりイエスいひけるは少者よ我なんぢに命いのちおきよ死たるもの起て且言ひ始むイエス之を其母にわたせり』（路七〇一一一五）と。此場合も亦彼が自ら進んで婦人を救ふたのである。素より救はれたものは男子であつたが、彼の同情したのは、其男子の母なる嫠であつた。右の記事に依れば、彼の心を動かしたのは、母であつた事が明かである。即ち『其母は嫠にて此は獨の子なり』との説明のあるのは、是れその心を動かした要點であつたからである。杖とも柱とも頼む所の獨り子を失ふた母、しかも良人を失ふた嫠の心中を察して、彼はその心を動かさすには居れなかつた。『主嫠を見て憫み哭なかれといひて』とあるを見ても、如何に深く其心中を察したかは知れる。其憐れなる母が助を彼に求めたのではなかつたが、彼は之を助けずには居れなかつた。『イエス之を其母にわたせり』とあるを見ても、彼の如何程其母を慰めんとする心の深かつたかは知

れる。

耶蘇は貴き眞理を説明せんが爲めに、其材料を婦人より取つた事も、我等の特に注意すべき點である。祈つて倦ざる精神を鼓吹せんとて、彼の擧げた實例は、神を畏れずまた人をも敬はざる冷酷極つた裁判人を動かした熱烈な嫠婦であつた（路一八〇以下）。彼は専心一意に其目的に向つて猛進する不撓不屈の精神を婦人の中に發見した。熱烈な婦人の精神には、冷酷な裁判人も動かされずには居れぬ事を見て、彼は婦人の偉力に感服した。また財産全部を捧げて、神に事ふる熱信を示した實例として、貧しき嫠婦を擧げた。（二一〇—一四）彼は四厘程の献金をなした貧しき嫠婦の行爲に表はれた偉大な美德を感歎した。金額其物は極めて微小であつたが、之を献げた精神は極めて偉大であつた。ワクネルの言に『地位高き人々のみより組織せらるゝ慈善事業を見ると、一種の驕慢心が現はれて居る。此團體には貴族的慈善ともいふべき風が行はれて、あまり些細な寄附金は却つて其名を汚がすものとされて居る。それでもし地位の低い人が、偶然其中に入ると冷遇に堪へられぬやうな感じを起させる』とあるが、

献金も不純な精神を以てするから、色々の弊害が伴ふて来る。耶蘇は形よりも心を重んじたから、貧しき嫠婦の四厘程の献金の中にも、千萬金にも優つた貴い精神の籠つた事を發見した。佛典にも之に似たる事が記されて居る。『昔貧窮孤獨にして乞食をして自活せる婦人あり。人々皆佛に供養するを見て、己れの爲し能はざるを嘆じ、終日乞食して僅かに一錢を得たり。之を以て油を買はんとて油屋に往きしに、一錢の油を買ふも何の用にも立ぬ、汝は何をなさんとするやと問はれしが、其理由を語りしに、油屋の主人之を憐み、油を倍して與へたり。彼大に喜び、之を持ちながら祇園精舎に至り、佛前の衆燈の中において祈願し歸へる。夜明けて後諸燈悉く滅したるも、唯この小燈のみ獨り燃へ、油も炷もそのまゝにて損する所なかりき』と。『貧者の一燈は富者の萬燈に勝る』との格言はこの故事より起つたのであらう。耶蘇も亦この貴き教訓を教ゆるに嫠婦を以てした。更に己が福音と共に、天下に宣傳さるべき價値ある善行として賞賛したのも矢張婦人の行爲であつた（可一四〇九）。赦罪の恩恵に感激して、最深の感謝を表した實例として擧げたのも亦婦人の行爲であつた（路七〇三七以下）。

彼は婦人に對して甚だ親切ではあつたが、其婦人たるの理由で、愛に偏した事が毛頭もなかつた。人の罪を見れば、男なるが爲めに重しともせず、女なるが爲めに輕しともせず、男女を同一の道徳法の下に置いて、同様に其悔改を促した。約翰傳には姦淫を犯せる婦人の耶蘇に訴へられた記事がある（約八〇一以下）。斯る婦人の石にて打ち殺さるべきは律法の命する所であつたが、彼は之を赦して去らしめた。然るに何等制裁を加へずして、之を放免したのは、餘りに寛大すぎるゝとて、非難する人すらもあるが、斯る非難の不合理なるは、少しく考ふれば容易に悟り得るであらう。たとへ此婦人の罪はモーセの律法に照らさば、石にて打ち殺さるべき大罪とは云へ、耶蘇の來つたのは、罪を定めんが爲めではなく、之を悔改めせんが爲めであつた。彼には罪を罰するの權威あると共に、また之を赦すの權威もある。當時斯る罪を犯せるものを石にて打ち殺すの律法は、實際廢止されて居つた。もしこの律法を嚴重に勵行せば、ユダヤ人中其刑を免るゝものは幾人もなかつたであらう。此婦人を訴へた人々すらも、尙ほ其刑を免れ難きものであつた。何となれば『爾曹のうち罪なき者先づ彼を

石にて打つべし』と彼の云へるを聞くや、其良心に責められ、老人を始として青年に至るまで遁げ去つたからである。耶蘇は其眼前に唯獨り殘された可憐な婦人を見て、『我も爾の罪を定ず』といふたが、決して其罪を不問に附すとはいはなかつた。罪をば飽までも罪と見て、犯人の婦人なるが爲めに、之を輕視せず、『往て再び罪を犯す勿れ』といふたのは、彼に悔改を求めたのである。神の恩恵に與かる上に於て、男女の別なきが如く、罪の悔改を要求さるゝ上に於ても亦男女の別がない。

當時の學者等は婦人を輕蔑し、もし之に律法を語るものあらば、是れ律法の神聖を汚がすものなりと思ひ、絶へて婦人を教へなかつた。随つて婦人に對しては冷酷を極めて居つたが、耶蘇の全然之に反した爲めに、其反動の起つたのは當然の事である。ベタニヤのマルタ、マリヤの彼を其家庭に歡迎した如き、或る賤しき婦人の香膏を彼の首と足とに灌いだ如き、いづれも彼に對する感恩の情の發露に外ならぬ。特に我等の注意すべきは、耶蘇及び弟子の團體に物質の供給をつゞけて、何等の不便もなからしめたものは婦人等であつた事である。當時にあつては今日程に、旅行に費用も要せ

なかつたであらうが、それでも耶蘇と十二人の弟子等の團體なれば、それ相應の費用を要したであらう。男の弟子等の中には多少財産あるものもあつたが、彼等はそれを全部提供したとも思はれない。然るに凡そ二年間も弟子等が全く其家業を棄て、専ら傳道に従事したからには、この間の生活費も多大の額に達し、また誰か之を供給しなくてはならなかつた。聖書に依れば、それは婦人どもであつた。マグダラのマリヤ、ヘロデの家令クレーザの妻ヨハンナ、スザンナ、其他の婦人どもが「皆その所有を以てイエスに供事たり」(路八〇三)と記されて居る。男の弟子等の中には危険の場合に臨めば、ペテロのやうに主を知らずと云ひて、裏切るものもあつたが、婦人の中には一人も斯る人のなかつたのみならず、主を慕ふ心の深きより、十字架の下までも彼に従つた。主の葬られた時にも、彼等は墓まで送つた(太二七〇六一可一五〇四七路二三〇五五)。また一週の初日夜未だ明けざるに、主の墓を訪ふた最初の人々も亦婦人であつた(路二三〇五五同二三〇一)。其好意が報ひられて、復活の主を見た最初の人も亦婦人で(約廿〇一一一七)、復活の音信を男の弟子等に傳へた最初のものも

同じ婦人であつた(約廿〇一八路二四〇十)。斯の如く婦人の耶蘇を愛する心の濃厚であつたのは、其女性の特徴にも由つたのであらうが、また主の彼等に對する親切の反動とも見るべきものであらう。福音書の物語に現はれた婦人中で、彼の感化に觸れなかつたものは唯二人のみで、それが毒婦の典型として見るべきヘロデアと其娘のサロメである。婦人の正にその占むべき位地に置かれずに、長く男子の壓制の下に惱んだのが、耶蘇に由りて其正當の位地を恢復し、其人格の價值と、其神との關係に於て、男子と同等のものとして尊敬さるるに至つた。十九世紀は婦人の發見された世紀と云はれたが、耶蘇は二千年の昔に、早くも婦人を發見した。アリストーテルが妻を以て自由人と奴隸との中間人だと云たふのは、未だ婦人の眞價を發見せざる結果であつた。羅馬人の其妻に對する生殺與奪の權を良人に與へたのも未だ婦人の眞價を知らざるに因る。婦人の眞價の認められざる處に、眞の文明の生るゝ筈がない。文明は一本足で立ち得べきものではない。耶蘇に依て婦人の眞價の認められたのは、眞文明の基礎の据へられたのである。

## 第二十章 耶蘇と子供

憎むべくまた耻づべき棄子の弊風は、古代ロマにもギリシヤにも行はれた。プラト  
ーやアリストートルの意見に依れば、父母が其子を養育するの力なきか、又は其子が  
國家に奉仕する體力のなきものと視る時は、之を棄つるも可なりとの事である。幸に  
この惡習を免れたのはユダヤ國であつた。ユダヤ人は他のいづれの國民よりも優つて  
子供を尊重したのは、神の賜物と見たからである。

子の與へられんことを天に祈るの習慣も亦古來東洋に行はれ、支那にも日本にも其  
實例の枚擧にたへぬ程多くあるが、それでも到底ユダヤに於ける實例の多きには及ば  
ない。舊約史上の實例は別とするも、新約に我等はその實例を發見する事が出来る。パ  
ブテスマのヨハネの父母は、其年老ゆるまで子のなかつた人であつた『エリサベツはらみ姪  
なきが故に彼等に子なし二人とも年も老ぬ』(路一〇七)とあるが、彼等は其子のなき  
を止むを得ざる不幸として諦らめて居つたかといふに、そうではなくして、矢張之を



神に祈りつゝあつた事が左の言に由て知れて居る。『ザカリヤは懼るゝ勿れ爾の祈禱す  
でに聞たまへり爾の妻エリサベツ男子を生ん其名をヨハネと名くべし爾に喜と樂あら  
ん』(同一〇一三、一四)と。されば彼等の子を與へられたのは、其祈禱の應答であつ  
たと見ねばならぬ。ユダヤ人は子のなきを單に一家の不幸と視做したのみならず、一  
大耻辱と感じたのである。何となればその不幸を神に誼はれた結果と見たからであ  
る。されば他國民が其子なきを不幸と思ふとは、全然其意義が違ふて居る。隨て、  
子の與へられた喜びも亦大なるものであつた。エリサベツいよく妊娠の身となるや、  
『主わが耻を人の中にすゝがせん爲に眷顧たまふ時は此の如く我になせり』(同一〇二  
五)と云ひて、其喜びを云ひ表はした。子を神より賜はることは、恩惠中の恩惠なれ  
ば、耶蘇の母マリヤに現はれた天の使も亦『慶たし惠るゝものよ主なんちと偕に在す爾  
は女の中にて福なる者なり』と云ふた。然るにマリヤは其何の意なる乎を怪みれば、  
更に『マリヤは懼るゝ勿れ爾は神より惠を得たり爾孕て男子を生ん其名をイエスと名  
べし』と云ふた(路一〇二八、卅、卅一)。其後マリヤの神を讚美した言に『我心主を

崇め我靈はわが救主なる神を喜ぶはその使女の卑微をも眷顧たまふが故なり今よりの  
ち萬世までも我を福なる者と稱べし云々』(同一〇四六——四八)とあるを見ても、如  
何程子の與へられた喜びの大なるものであつたか、知れる。

耶蘇はユダヤ人中のユダヤ人、即ち理想的のユダヤ人なれば、よし己れに子なしと  
はいへ、子たるものゝ眞の價値を認めて、之を尊重した點に於ては、何人も彼に及ぶ  
ものはない。一般のユダヤ人は己れの子を尊重したが、子のない耶蘇は凡ての子を己  
が子の如くに尊重した。それのみならず他の人の容易に發見し得ざる極めて貴重な或  
物を、子供の中に發見して、親も及ばぬ熱愛を之に注いだ。是故に子供に對する彼の  
態度は、基督教の兒童教育の基礎を造ることゝなつた。ユダヤ人でありながらも、  
未だ主の心を以て己が心となし得ざる弟子等が、子供に對して甚だ冷淡であつたが、  
主の非常の愛を以て之を歡迎したのは、彼れ自身も亦子供であつたからである。既に  
三十歳に達した成人を子供といふのは、不合理のやうだが、其肉體の上ではなく、其  
精神の上より云へば、彼は成人よりも子供に共鳴する所が多くあつた。彼の最も深く

子供を愛したのも、單に子供は最も深いといふ道理の上からではなく、其心から共鳴する所があつたからである。そして其共鳴する所の多くあつたのは、彼れ自身も亦幾分か子供であつたからである。畫家の云ふ所に依れば、何人も幾分か自ら樹木とならざれば、樹木を描くことが出来ぬ。まして子供を描くにも、唯子供の形の輪廓を研究するのみではなく、子供の運動と遊戯とを注視し、其性情にまでも立ち入り、然後始めてそのあらゆる状態を思ふまゝに描き得るとの事である。子供の性情に立ち入るとは、自分も幾分か子供に化するの意に外ならぬ。支那に竹を描く名家に與可といふ人があつたが、此人について『與可竹を描く竹と化すればなり』と云はれて居る。竹を描くのは竹を愛するからであり、竹を愛するのは竹と共鳴するからである。共鳴も亦同化に外ならぬ。

耶蘇は神より遣はされたメシヤではあるが、子供として人間界に生れ出た人である。始祖アダムは最初から成人であつたやうに聖書に記されて居るが、第二のアダムなる耶蘇は、子供から成長した人として記されて居る。路加福音書は子供としての耶蘇を

特筆した。其ベツレヘムの厩に於ける誕生は勿論のこと、牧者に拜まれた事や、割禮を受けた事や、律法に従て神に献げられた事や、イスラエルの民の慰められんことを待つたシメオンに抱かれた事や、八十四歳の婆アンナに遭へる事や、更に十二歳の時踰越節にエルサレムに上り、神殿で博士等と問答を試みた事や、其後ナザレに歸つて父母に事へた事などを一々記して居る。子供としての彼の傳記は、メシヤとしての彼の傳記に取つては、蛇足の感と與ふるやうにも思はるゝが、路加の之を特筆したのは、彼の宗教が成人の宗教であると共に、子供の宗教である事を示さんが爲めであらう。

子供に對する彼の態度を最も鮮かに示した事實は、馬可傳中の左の記事である。曰『イエスに撫れんが爲に人々孩提を携來ければ弟子等その携來れるものを責めたりイエス之を見て怒を含みかれらにいひけるは孩提を我に來せよ彼等を禁るなかれ神の國に居るものは斯の如きものなり誠に我なんぢらに告ん凡そ孩提の如くに神の國を承ざるものは之に入ことを得ざるなり即ちかれらを抱て手をその上にのせこれを祝せり』

(十〇一三——一六)。エダヤでは預言者又は有名な教師に己が子の上に祝福を祈らんことを求むるの習慣があつた。耶蘇の名聲の四方に傳はるや、多くの母等が其嬰兒を携へ來り、祝福を祈らんことを彼に求めんとしたが、主の精神を解せざる弟子等が、獨斷を以て彼等の懇願を拒んだ。多分彼等は是れ主の意に合へるならんと思ふたであらうが、豈圖らんやそれは主の激しき逆鱗に觸ることとなつた。『イエス之を見て怒を含み』とあるからには、如何程彼等の所爲が主の精神に反した乎を察するに足る。聖書に主が怒つたと記したのは、恐らくはこの場合のみであらう。彼は容易に怒らぬ人である。「パリサイ」人や學者等の偽善を責めた時には、其義憤を洩したが、其場合ですらも、聖書に怒といふ語を用ひては居ない。然るに嬰兒を退けた弟子等の行爲に對しては、主は怒を含んだと明記した。是れその怒が餘程弟子等の心に深く感せられたからであらう。常に怒らぬ人の偶怒つたのには、餘程重大な理由がなくてはならぬ。もし彼が嬰兒を念頭に掛けながつた人であつたとすれば、たとへ其弟子等が之を退けたからとて、怒を發する筈もなかつたのであらう。彼がエリコの邑を通つた時、盲人

バルテマイなるもの、道の傍にあつて、ナザレの耶蘇の過ぐると聞くや、俄かに大聲を發して、『ダビデの裔イエスよ我を恤み給へ』と叫んだ。弟子之に黙せよと命じて制したのは、恰も嬰兒を退けた行動に似て居たが、主が弟子の行爲を怒らなかつたのは何故であらう。彼には此盲人を助くるの意がなかつたのではない、再び叫ぶに及んで、自ら立止り、彼を召んで其目を開き給ふたが、弟子等の行爲を怒らなかつたのは、彼が嬰兒程に盲人を重く視なかつたからであらう。されば可憐の嬰兒が、弟子の目にこそ價値なきものと見へたであらうが、耶蘇の目には極めて貴きものと見へた事が知れる。之を輕んずるものをば怒らずに居れぬ程に、嬰兒を貴きものと見たのが明かである。

耶蘇のかくまで嬰兒を貴きものと見たのは、彼等の神國民の資格を具へたからである。弟子等が長く神國の教を聞かせられ、自分等も亦之を處々に宣傳したにも拘はらず、其心尙ほ高慢なるより、互に神國に於ける位地の高低を争ひ、『天國に於て大なるものは誰ぞや』と心竊かに案じて居つたが、主は疾くも其競争心あるを見て深く憂ひ、

其不心得を戒め、且つ神の國に入るもの、資格を示さんとて、彼等の面前に嬰兒を立て、「我まことに爾曹に告んもし改まりて嬰兒のごとくならずば天國に入ことを得じ然らば凡そこの嬰兒の如く自ら謙るものはこれ天國に於て大なるものなり」(太一八〇以下)といふた。此教に依れば、無我無心の嬰兒は、高位高官をねらふた弟子よりも、天國に於ては遙かに大なるものである。天國は嬰兒の國なれば、天國の建設者たる耶蘇自身も亦大なる嬰兒であつたのは當然である。彼の特に嬰兒を重んじた所以も亦此に存して居る。

耶蘇の子供を愛した實例は、聖書に多く記されて居る。馬可傳に『會堂の宰ヤイロといふ人きたりイエスを見て其足下に伏し、切に求ひけるは我いとけなき女死るばかりになりぬ之を救ん爲に來りて手を彼に按きたまへさらば女は生べしイエス彼と共にゆく』(五〇二以下)と記されて居る。彼はベテロとヤコブ及びヨハネの三人を伴ひ、ヤイロの家に至り、既に死んだ女の手を執り、之に起きよと命じて立たしめた。其女は十二歳の少女であつた。耶蘇之を其家族に渡して、かれに食物を與へよと命じたのは、其少女に對する親切を示して居る。

馬可が更に左の記事を載せて居る。曰「イエス此を去てツロとシドンの境にゆき家に入て人に知れざらんことを欲しが隠れ得ざりきそは惡鬼に憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り其足下に伏たるに因てなりこの婦はサイロビニケに生れしギリシヤのものなりしが惡鬼を其女より逐出し給はん事をイエスに求り……イエス婦にいひけるは此言に因て歸れ惡鬼は爾の女より出たり婦その家に歸りしに惡鬼既に出て牀に女の臥たるを見る』(七〇二四以下)と。此婦人は異邦人だが、主は最初拒絶の態度を装ふて、其信仰を導き、後其信仰を賞賛して、「婦よ爾の信仰は大なり願の如くに爾に成るべし」(太一五〇二八)といふた。耶蘇は勿論この婦人にも同情したが、其愛女にも亦同情して、之を救ひ給ふたのである。

馬太傳には左の記事がある。『彼等多くの人の居るところに來しに或人イエスの所にきたり跪きいひけるは主よ我子を憐みたまへ癩癩にてしばし火に倒れ水に倒れ甚だ苦めり之を爾の弟子に携往きたれといやすことを得ざりきイエス答ていひけるはあゝ

信なき曲れる世なる哉われ何時まで爾曹と偕に居んや我いつまで爾曹を忍んや彼を我もとに携來れ遂にイエス鬼を斤め給へば鬼いで、其子この時よりいえたり『一七〇—四以下』と。此時子を携へ來つたのは、多分其父であらうが、耶蘇は其父をも憐んだが、更に其子を憐んで、之を癒したまふた。彼に拒まれた子供は絶對になかつたのである。

耶蘇は常に子供の事を其念頭に掛られ、彼等の上に落ち來らんとする禍をば、殊に怖るべきものとなし、エルサレムの滅亡の預言中にも、其災難の子供に及ばんことを憂ひ給ふた。己れに同情の涙をそゝいだ婦人等を顧み、『エルサレムの女子よ我が爲に哭くなかれ惟おのれと己が子の爲に哭け産ざる者未だ孕ざるの胎また哺せざるの乳は福なりといはん日來らん』〔路二三〇二八、二九〕と云つた。また橄欖山よりエルサレムを見下して、『爾の敵なんぢの周邊に壘を築き四方より圍攻め爾と其中なる兒女を撃滅し石をも石の上に遺ざる日來らん』〔路一九〇四三、四四〕と歎かれたのも其禍の子供に及ばん事を憂ひたからである。耶蘇自身には子のなかつた爲め、親のその子女

に對するやうな本能的の愛がなかつたとするも、親の愛以上の廣いまた深い愛があつた。世の親たるものゝ子供を愛するは、子供たるが爲めではなく、己が子供たるが爲めであるが、耶蘇の之を愛したのは、何人の子供たるを問はず、單に其子供たるが爲めである。隨つて凡ての子供に對して一視同仁であつたのも、是れ父母の本能的愛と異なる所以である。

耶蘇の子供を愛する心の深きを間接に示した實例は聖書に少なからずある。彼は其愛する弟子を呼ぶに、子といふ語を以てしたのは其一例である。『我を信する此小子の一人を礙かすものは磨石をその頸に懸られて海の深に沈られん方なほ益あるべし』と云ひ〔太一八〇六〕爾曹この小子の一人をも慎みて輕視なかれわれ汝らに告ん彼らが天の使者は天にありて天に在す我父の面を常に視ばなり〔太一八〇十〕と云ひ、『是の如くこの小子の亡るは天に在す爾曹の父の尊旨に非ず』〔太一八〇一四〕と云ふが如きは、いづれも子を愛する如くに、其弟子を愛するの深きを示して居る。

約翰第一書には信者を指して『小子』と呼んで居る實例が甚だ多くある〔二〇一、

一二、二八、三〇七、一八、四〇四、五〇二一。ヨハネは勿論愛の精神に富んだ人と云はれて居るから、信者を指して『小子』と呼んだとて、敢へて怪むには足らぬやうだが、是れ耶蘇の口より出でたる語の反響と見るべきものであらう。

耶蘇は子供を愛して、其價值を示し、其位地を高めて、基督教主義の兒童教育の基礎を築いた。婦人の位地を高めた彼が、子供の位地をも高め、宗教界と教育界とに一大光明を放つた事は、彼の傳記を學ぶものゝ見落すべからざる重大事件である。

## 第二十一章 耶蘇の家庭觀

此世に神の國を建設するのが、耶蘇降世の目的であつた。罪より人を救ふは、神國民の資格を具へしめんが爲め、神と人とを愛するの道を説いたのは、愛は神國の憲法なるが爲めである。神の國とは神の家庭の別名に外ならぬ。『そはすべて我が天にいます父の旨を行ふものは是れ我が兄弟わが姉妹わが母なればなり』(太一二〇五十一)との言の中に、神の國が神の家庭であるとの意が含まれて居る。兄弟と云ひ、姉妹と云ひ、母といふも皆家庭に關する語で、國に關する語ではない。殊に聖書に信者を指して兄弟といふのを見ても、基督教を精神上の國といふよりも、精神上の家庭といふのが適當である。

地上に造らんとする神の家庭は勿論精神上の家庭であるが、是れ肉身上の家庭を不用としたからでもなければ、不完全なものとしたからでもない。耶蘇が他の教師の如くに、一種の家庭訓ともいふべきものを與へなかつたが爲めに、肉身上の家庭を重要

視しなかつたと視るのが正當ではない。彼は他の教師等のなすが如くに、父母としての道、子としての道、夫婦としての道、兄弟としての道を、一々細目を擧げて教へなかつたのは、それが彼の目的ではなかつたからである。彼の教へた倫理の大本は、敬神愛人の外はない。この二大原則の明かな上は、之を人間同志の諸關係に如何に適用すべき乎は、各自の智慧に由て決定するの外はない。是等は國に依り、時代に依り、一定せざるものであるから、一々適用までも教ふるとせば、其教は一時的のものとなり、又地方的のものとならねばならぬ。是れ多くの宗教の現代に無用視さるゝ所以である。然るに耶蘇は適用を人の自由にまかせて、唯其原理のみを教へたのは、是れ其教の萬古不變なる所以である。彼が神の國をば神の家庭と視做した一事に依つても、其肉身上の家庭を如何程重要視したかは知れるであらう。

福音書には勿論家庭訓として見るべきものはあるが、それすらも耶蘇は家庭訓を興ふる目的を以て教へたものではなく、偶然或る事情に迫られて、その意見を發表したまでの事である。我等は家庭の基礎となるべき夫婦の道について、彼の教を知り得た

のは、甚だ幸の事ではあるが、是れすらも尙ほ或る事情の爲めに、語つた事に過ぎなかつた。彼が一夫一婦の道について語つたのは、「パリサイ」人の彼を試んとて發した。質問に答へたのである。當時結婚問題については、學者間に諸説紛々として一定せず、それが爲めに思想に混亂を生じ、其結果行爲も亦放縱に流れ、離婚容易に行はれて、貞操の美德地を掃ふに至つた。此際學者等がこの問題に關して耶蘇の意見を聞くのは、興ある事と思ひ、もし彼が新説を主張するが如き事あらば、律法の上より痛く之を攻撃せんと動機よりして、左の質問を發した。曰「人何の故にか、はらす其妻を出すはよきか」と。是れ當時如何なる些少の理由にても尙ほ妻を離縁するを得べしとの極めて自由なる説の行はれた爲めに、耶蘇も亦之に賛成するや否やを知らんと欲したのであらう。けれども彼には彼れ自身の意見といふものがない、何となれば彼は神の教を傳へんとするのが、其目的であつたからである。彼の意見は神の律法の示せる所に外ならぬ。そして神の律法はユダヤ人の能く知る所で、たとへ之を實行せざるにせよ、尙ほ之を知つて居た。然るにその知り切つて居ることをわざ／＼耶蘇に質問

したのは、多分何か彼の獨得の意見を發表するならんと預想したからである。彼はその質問に對して『元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり是故に人父母を離れて其妻にあひ二人のもの一體となるなりと云へるを未だ讀ざる乎さればはや二にはあらず一體なり神の合せ給へる者は人これを離すべからず』(太一九〇四—六)と答へた。「パリサイ」人等がこの律法を知らざる筈もなかつたが、之を實行せざるより、離婚を勝手になし、多妻主義までも實行して、男女間の道德を腐敗せしめた。上に立つもの、行爲斯の如くなる以上は、其下にあるもの、行爲も亦推して知るべきである。實に當時は男女の貞操の蹂躪された時代であつたが、耶蘇は世の風潮に動かされず、神の意志を絶對の律法として遵奉し、強硬の態度を取つて、夫婦道を宣言した。

學者等の質問を發したのは、學ばんが爲めではなくして、攻撃せんが爲めであつたから、彼等はこの答辯に接するや、その道理には服したが、當世そんな窮屈な事の実行されぬのみならず、それに代はるべき便法が、モーセに由て與へられたとて、耶蘇の思想の餘りに舊式なるを指摘せんため、『されば離縁狀を出せとモーセが命せしは

何ぞや』と反問した。彼等に取りてはモーセは無上の權威であるから、之に由て耶蘇の意見を壓せんとしたが、彼はモーセの便法の止むを得ざる事情の爲めに設けられた一時的のもので、決して律法本來の精神にあらざるを示さんとて、『モーセは爾曹の心の不情つれなきによりて妻を出すことを容ゆるしたるなりされど元始は斯くあらざりき』といふて、どこまでも律法の權威を主張した。

更に結婚の神聖にして、亂りに離婚すべからざるを教へんとて、『われなんぢらに告んもし姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶るものは姦淫を行ふなり又いたされたる婦を娶るものも姦淫を行ふなり』といふた。此言はユダヤ人に取りては、窮屈過ぎるの感を與へたと見えて、その弟子すらも之を聞いて『もし人妻に於て此の如くば娶ざるに若しかず』といふた。是れ唯一つの條件の外に、離婚の許されぬものとせば、あまりに窮屈なれば、寧ろ始より結婚生活に入らぬ方却つて幸ならんとの意である。弟子等も輕しく離婚の實行さるゝを少しも怪まざるのみならず、寧ろそれを當然のことにやうに思ふたのは、當時行はれた一般の放縱な風習に感染したからであらう。然るに



耶蘇は弟子等と同様に、其風習を毎日目撃しながらも、毫も之が爲めに其道德的感覚を鈍らせざるのみならず、却つて其風俗の壞亂を歎き、律法本來の趣意に立ち還つて、一夫一婦の道を主張し、更に離婚を禁じた。此に離婚を許す一つの條件を許したやうに見ゆるが、トルストイの説に依れば、耶蘇は絶対に離婚を禁じたとの事である。この事については聖書學者中にも、色々の異見があるが、此に一々それを述ぶるの必要もなければ、その論議は省略する事とするが、耶蘇は離婚の條件を設けたとしても、尙ほ是れユダヤ人を驚かした程の嚴格過ぎる意見と思はれたからには、夫婦道の如何程亂れたかは、之に由つても察せらるゝであらう。

耶蘇自身の結婚生活に入らぬのを見て、結婚の神聖を疑ひ、聖者の生活を送らんが爲めには、結婚生活を故意に避けねばならぬと思ふ人も少なからずあつたが、彼は必ずしも獨身生活を賛成もせざれば、また反對もせず、『もし人妻に於て此の如くは娶ざるに若かず』と弟子の云へるに對して『此言は人みな受納ること能はず唯賦こぼられたる者のみ之を爲し得べしそれ母の腹より生來たる寺人あり又人にせられたる寺人あり

又天國の爲に自らなれる寺人あり之を受納ることを得るものは受納べし』(太一九〇一一、一二)といふた。是れ獨身生活を送り得るものゝみ、之を實行すべく、然らざるものは強いて實行すべきものにあらざるを教へたので、決して結婚生活を輕視したのではない。彼は傳道開始の劈頭に、ガリラヤのカナに於ける婚筵に臨み、最初の奇跡を行ふた事が約翰傳に記されて居る(二〇一以下)。是れ結婚の神聖を認めて、祝福した實例と見るべきものであらう。其他天國の教を説かんとて、王子の婚筵の比喻を用ゐた事もある(太二二〇一以下)。

結婚の神聖を認めた以上は、之を基礎として造られた家庭の神聖も亦認めた事は、之に由て推知するに足る。耶蘇は神を父と云ひ、人間を神の子と呼び、人間同志を兄弟と呼んだのは、人間社會を家庭化した爲めである。家庭的關係は彼の深く重んじたものでその語る所の愛も亦家庭的愛に外ならぬ。放蕩子の比喻に現はれた父の愛は、神の愛を表はし、子の前非を寛恕した愛、其歸宅を歓迎した喜び、善き物を彼に與へて惜まざる心は、親心の真相を表はすと共に、天父の無量の愛を表はしたものである。

耶蘇は人の親心を察し、之に同情して其子を救ふた實例も多くあつた（路九〇四二、約四〇四六以下、太九〇一八以下、路七〇一一以下）。

耶蘇は公務の爲めに、其家庭生活を離れねばならぬ必要に迫つたが、尙ほ其家庭を重ずる心に至つては、少しも變つたことがない。彼の心には常に家庭の生活が描かれ、其休息を欲する時には、他人の家庭に入つて、自ら慰むるの習慣があつた（路十〇三八以下）。その目には家庭は安全平和の空氣の充ちたる處として映じた。迷へる羊の物語をなした時には『尋得ば喜びて之を己の肩にかけ家に歸て其友と其隣の人を召集ていはん我と共に喜び我うしなへる羊を獲たればなり』（路一五〇五六）と云ひ、放蕩子の歸つた時にも、其父之を其家に歡迎して、盛んな宴會を催うした事を語つた（路一五〇二五）。

家庭に於ては夫婦の關係の大切な如くに、親子の關係も亦大切である。耶蘇はユダヤ人の家庭に親不幸の行爲の行はるゝを嘆じて、痛く之を譴責した事は我等の注意すべき點である。聖書には孝經にあるが如き、孝道の細目が教へられて居らぬ爲め、人

々誤つて耶蘇は孝道を無視したものだと思ふ實例もあるが、それは文字を見て、精神を見落したのである。何人も福音書を繙くものゝ、左の言を知らぬ人があるまい。『モーセイひけるは爾の父母を敬へ又父あるひは母をのしるものは殺さるべしと然ど爾曹はいふもし人父あるひは母にむかひて爾を養ふべき物はコルバン即ち禮物なりといはゞ事へずともよしと而して人の其父或は母の爲に何をもちすることを爾曹許さず』（可七〇十―一二）と。是れユダヤ人の父母に對する孝養の義務を避けんとした邪心を譴責したのである。父母を敬へとのモーセの誠をば、耶蘇は神の律法として尊重し、自らも亦子たる位地にあつたが爲めに、其最善を盡して、孝道を實行した。我等は家庭に於ける耶蘇の行狀については、その知る所甚だ貧弱だが、路加が『イエスこれと共に下りナザレに歸り彼等に順ひ居れり』（二〇五一）と記したのを見ても、彼の孝子であつた事が容易に察せらるゝ。就中十字架上に惱める際にも拘はらず、其下に來つた母を見て、其老後の事を案じ、靜かに彼に聲をかけ、『婦よこれなんちの子なり』（約一九〇二六）と云ひて、今より後我が代りに、ヨハネを己が子として、彼に一身を託せよ

との意を傳へ、更にヨハネに向つて、『これなんぢの母なり』(同一九〇二七)と云ひて、今より後我に代つて、我が母を己が母として、之を愛護せよと依頼したのを見れば、其臨終の際までも、母を忘れざるの心を示して居る。聖書に『是時その弟子かれを己の家の携往り』(約一九〇二七)とあるからには、ヨハネは主の依頼に應じ、マリヤを己が母として、之を愛護した事が明かである。母マリヤの行末を案じて、己が死後の事までも用意した彼の子心に、其家庭觀が映じて居る。

バプテスマのヨハネは長く家庭を離れて、野に居つたからには、彼は家庭の人と云ふよりも、寧ろ野の人といふのは適當だが、之に反して耶蘇はその世に出づるまでの三十年の久しきが間、其家庭にあつて、家業に従事した。耶蘇は野の人でもなければ、山の人でもなくして、愛に充された楽しい家庭の人であつた。彼が十八歳までは、ヨセフも存命したから、母の愛は勿論のこと、父の愛をも十分に味ふ事が出来た。終日父と労働を共にし、互に苦樂を分つた關係上、特別に彼に親みを覺えたであらう。貧困の生活は、彼に取つては不便を來たしたであらうが、親子の間を一層親密ならしめ

た上より云へば、裕福な生活よりも、却つて一層有利であつたであらう。母マリヤは耶蘇の死後までも生存したから、耶蘇は其一生涯母と共に居つたと云ひ得るのである。殊に良人に別れて養婦となつたマリヤと共に居つたが爲めに、深く母の心中を察し、それが本となつて、いづれの家の養婦にも深き同情を有する事となつた。彼は父を知り、母を知り、兄弟姉妹をも知つたが爲めに、家庭上の諸關係を體驗的に知る事が出来た。彼に取つては家庭は歡樂平和の充つる處、即ち天國の縮圖であつた。彼が弘く人間を愛したのも、家庭的愛を家庭外に延長せしめたものに外なさぬ。家庭は愛の泉であつた。

## 第二十二章 祈禱の人

福音書に記された耶蘇は、祈ることを人に教ゆると共に、自らよく祈つた人である。彼の祈禱の生活其物は即ち祈禱についての大きな教訓であつた。彼に取りては、祈禱は受身の態度ではなくして、純潔熱誠なる意志の最高の努力である。沈思默想の結果といふよりも、熱烈な活動の結果である。一切の正しき活動は人の意志と神の意志との協同だと彼が信じたから、彼は斷へず働いて、斷へず祈つた。彼の活動の源泉は無限の権能と無量の慈愛とを有する天の父である。この動力の本源なる神をば、己が慈父即ち子の祈禱に應答する用意ある慈父と信じたから、其祈る毎に必らず聽かるゝとの確信を以て祈つた。彼は己れを以て天父に愛せらるゝ獨子と確信したから、遠慮なく祈つた。其祈る毎に聽かれたといふ動かし難き經驗のあつたが爲めに、『天にいます爾曹の父は求めるものに善物を予へざらんや』(太七〇一一)と云うた。希伯來書記者は『かれ肉體にありし時哀哭び涙を流して死より己を救得るものに祈りまた懇求をなし

其敬畏によりて聽る、ことを得たり』(五〇七)と云ふて、彼が祈禱の人であつた事を示した。或人は彼は神の子なるが爲め、また無罪の人なるが爲めに、祈るの必要なしとの説を唱へたが、我等は議論に依らず、唯彼の實際生活によつて、之に答ふるの外はない。彼の生活は祈禱の生活であつた事の実である以上は、彼に祈るべき必要があつたであらう。我等はその祈つた事の何故であつた乎といふよりも、其祈つた事實を調べて見たい。

福音書記者が彼の祈つた事實を幾回となく記載したが、それが記者の間接又は直接に知つた場合のみを記載したので、彼らの知らざる場合が其外にどんなに多くあつたであらう。彼は屢其弟子すらも避けて、全く獨りで祈らんことを欲した。そして故意に弟子を退けて、單獨で祈つたのは、其祈禱の目的が自分一身に關したからであらう。また時としては、其祈る時に人を避くるのみならず、自然をも避け、其耳目に觸る、一切のものを避けんとした事もある。且又其祈禱の場所として、可成閑靜な處を撰んだ。馬可傳に『味爽にイエス早く起き人なき所にゆき其處に祈禱せり』(一〇三)

五』とあるが、此記事に依れば、彼は祈る爲に寂しき處を求めたのみならず、寂しき時をも求めた事か知れる。こゝに『人なき處』とあるのは、人の居らぬ野か、又は山であつたらうが、その求めた處は、野や山に限つたのではなく、唯人なき寂しき處であつた。是れ何物にも妨られずに、單獨で祈らんが爲めであつた。そして其撰んだ時刻も『味爽』とあるからには、未だ人の起床せざる時刻である。彼は人と偕に祈り、日中に祈ることをもなしたが、最も其意に適したのは、人の未だ起床せざる時刻に、唯單獨で祈る事であつた、換言せば寂しい處で、寂しい時に祈ることであつた。

耶蘇の多く祈つた處が山であつたのは、山が野よりも適したからではなく、パレスチナには到處、祈るに適する山のあつたからである。山と云ふても、必ずしも高き山ではない。時としては高山に登つて祈つた事もあつたが、多くは人家に接近した丘陵に登つて祈つた。彼が山又は野の如き寂しき處で祈る習慣のあつたのは、その貧民であつたが爲めに、家屋内に適當なる祈禱の密室のなかつたからだとの説をなす人もある。『なんぢら祈る時は嚴密なる室に入りて戸を閉て穩微たるに在す爾の父に祈れ』

(太六〇六)と人々に教へたが、彼れ自身には『嚴密なる室』のなかつた爲めに、野又は山に往つたのは、密室に入り戸を閉ぢたと同様の事であつたかも知れぬ。此點に於ては當時の宗教家とは霄壤の差があつた。彼等も祈禱に熱心であつたが、其動機は甚だ不正であつた。彼等の會堂や、街衢の隅に立つて、衆人環視の中で祈つたのは、何故であつたらう。是れ人より敬神家たる名譽を得んが爲めであつた。彼等は神に祈るの體裁を装ふたが、其實人に向つて名譽を祈つたのである。故に耶蘇より見れば、彼等は皆偽善者であつた。

耶蘇の弟子と偕に祈つた事の實例も亦少からずある。路加傳に『イエス衆の在ざりし時祈禱したりしが弟子も偕に居れり』(九〇一八)とある。是れ彼が群衆を避け、唯其弟子と偕に祈つた事をいふたのである。また同書に『イエス某所にて祈禱しけるに畢し時一人の弟子いひけるは主よヨハネ其弟子に教へし如く我等にも祈ることを教へ給へ』(一一〇一)とあるのは、其弟子の居つた處で、祈つた事を示して居る。また同書に『イエスペテロヨハネヤコブを携ひ祈禱せんとて山に登れり』(九〇二八)とあ

るからには、彼が三人の弟子の居る處で祈つた事が明かである、馬太傳に『我また爾曹に告んもし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても求ば天に在す我父は彼等の爲に之を成したまふべしそはわが名の爲めに二三人の集れる處には我も其中にあればなり』(八〇一九、廿)とあつて、一致合同の祈禱の必要をも教へ給ふた。一致合同は力を生むの方法なれば、合同の祈禱は力ある祈禱となる。

耶蘇はどんな場合に祈り、またどんな理由で、どんな祈禱をなした乎を一々知るのには素より不可能の事ではあるが、特別な重大事件のある毎に、祈つた事は聖書の示す所である。彼は十二使徒を撰抜した時、先づ祈つた。路加傳に『當時イエス祈禱の爲めに山に往て終夜神に祈れり夜明てイエス弟子を呼びその中より十二人を選て之を使徒と稱く』(六〇一二一二三)とある。十二使徒の選抜は彼に取りては重大事件であつた。基督教將來の運命の如何は、この使徒の可否如何に係はるものとせば、之が選抜をなすに先ちて、終夜祈つたのも亦當然と云はねばならぬ。

耶蘇は其弟子等を携へ、カイザリヤピリピの地方に往き、彼等にメシヤについての

知識と確信とを有たしめんとした事があつた。ペテロが己が信仰告白をなして、『爾はキリスト活神の子なり』(太一六〇一六)といふたのは即ち其時であつた。將來の傳道に取つて、最も必要なのは、其宣傳の中心たるメシヤについての理解と確信である。もし此點に於て不理解と疑惑があつたとすれば、傳道の不可能なるは極めて明かな事である。されば耶蘇に取りては、此點について十分弟子等を教育するのは、頗る重大事件なれば、特に之が爲めで祈つた(路九〇一八)、しかも此時には弟子と偕に祈つたのである。

耶蘇は多忙な時に、特に祈るの習慣があつた。その多忙とは或は道を傳へ、或は病人を癒して、衆人の要求に應じ兼ねる程の場合をいふのである。彼は時としては餘りに多忙であつたが爲めに、食する時すらもなき程であつたが、其多忙なるに準じて、常よりも一層多く祈つたのは、事業をなすの力の祈禱にあるを知つたからである。一般の人々の祈禱を怠るは、其多忙な時であるが、彼は多忙な時程多く祈つた。ルーテルも亦斯る習慣を有つた人で、多忙の時程、彼の祈禱の長かつたのは、多忙な程祈禱

の必要を感じたからである。多忙の時には、人の心が錯亂され易く、随つて精確に仕事をなし兼ねるの虞がある。斯る場合に精神を統一し、思を平かにして、秩序整然と事に當らしむるものは祈禱である。『忙しい程急ぐな』との賢者の格言は、正にこの理を示したものである。路加傳に『イエスの名聲ます／＼揚りて許多の人々或は教をきかとし或は病をいやされんとて集り來れりイエス常に人なき處に退て祈り給ひき』(一五〇一六)とあるのは、是れ其多忙を極めた時に、祈り給ふた實例である。

バプテスマのヨハネのヨルダン河畔で、精神運動開始するに及んで、耶蘇も亦メシヤ的自覺を有つて、其故郷ナザレを去り、ヨルダンにヨハネを訪ひ、その手よりバプテスマを受けたが、更にメシヤ的確定の與へられん事を求めて、神に祈つたと路加が記して居る。『イエスも亦バプテスマを受て祈る時天開け聖靈の如き狀にて其上に降ぬ又天より聲ありいはくなんちは我愛子わが喜ぶ所のものなり』(三〇二一、二二)とあるを見れば、聖靈の賜物も天よりの聲も共に、其祈禱の應答であつた。最早や彼は一點の疑ひもなく、メシヤたるを自覺し、しかも自覺の高潮に達したのは、祈禱の應答

であつた。

山上に於ける彼の變貌も亦其一生に於ける重大事件であつたが、それも亦彼の祈禱の結果と見るべきものである。路加傳に『此事をいひける後八日ばかり過ぎてイエスペテロヨハネヤコブを携ひ祈禱せんとて山に登れり祈れる時其顔の貌つねと異なり其衣服白く輝きぬ』(九〇二八以下)とあるが、此時の彼の祈禱の言は、記載されて居らぬ。けれども彼の變貌が弟子等の心に、彼のメシヤたるを確信せしむる基となつたのを見れば、是れは其祈禱の應答に外ならぬ。變貌は其外面に表はれた榮光であつたが、其内面の榮光も亦常に神との交通より生ずる神の榮光の反射である。彼の祈禱は神との交通なれば、彼の人格も亦祈禱に由て作られたものである。

彼の一生は試みの繼續ともいふべきものであつたが、殊に其最も激しき試は、ゲツセマネに於けるそれであらう。其場合は彼れ自身に取つての誘惑であつたのみならず、其弟子に取つても亦誘惑であつたが爲めに、『惑に入ぬやう目を醒しかつ祈れ』(太二六〇四一)と戒め給ふた。そして彼は『我心いたく憂て死しほるばかりなり』と云ひつ

ゝ、血の汗を流して祈つたが、祈り終つた後には、泰然自若として其運命を迎へたのは、其祈禱に由て力を得たからである。然るに惑に入らぬやう祈るべしと戒められたが、其肉体の弱きが爲めか戒められた通りに、祈らなかつた弟子等は、果して惑に入り、主の捕はるゝを見るや、いづれにか其姿を匿くし、決死の覺悟を有つたペテロでさへも、三度までも主を知らずといふた。祈る人と祈らぬ人との相異は、此に現はれ出たのである。

祈禱を以て其一生を一貫した耶蘇の祈禱の極めて簡短な事も、我等の注意すべき點である。聖書に彼の祈禱として記された言が多くあるが、唯一の外はいづれも簡短である。約翰傳にのみ記された一つの長い祈禱は(十七章)、晚餐制定の後に祈られたるもので、他の場合の祈禱に比すれば、長いとはいふものは是れすらも今日の教師等の祈禱に比すれば、決して長いとは云へない。祈禱の模範として示された所謂『主の祈禱』といはるゝものは、其意味極めて深長なるにも拘はらず、言は甚だ簡短である。他の場合に捧げられた祈禱はいづれも更に簡短である。情の熱した時は言も短くなるの



は常である。耶蘇の賞賛した税吏の祈禱は、『神よ罪人なる我を憐み給へ』との數言に過ぎぬ。至誠神明に通ずとある如く、祈禱に必要なのは至誠である。耶蘇の祈禱は其至誠に發すると共に、人にも亦至誠を以て祈るべきを教へて、『爾曹祈る時は異邦人の如く重複語をいふ勿れかれらは言多きをもて聽かれんとおもへり』(太六〇七)といふた。此に異邦人の祈禱について云はれたのは、ガリラヤ地方に行はれた偶像教の祈禱を指したるものであらうが、偶像教の祈禱の中には、心の至誠よりも、祈禱の言の長さをも以て、神を動かさんとするものもあつた。偽善者の祈禱も亦一般に長かゝつたから、耶蘇は「パリサイ」人を譴責した言の中に『なんぢら娼婦の家をのみいつはりて長き祈をなす』(太二三〇一四)とある。耶蘇の祈禱の簡短であつたのは、其至誠より出た爲めでもあつたが、更に必らず聽かるゝとの確信のあつたが爲めである。ラザロの墓前で祈つた時には『父よすでに我にきけり我これをなんぢに謝すわれなんぢが恒に我にきくことを知る』(約一一〇四一、四二)といふた。未だ祈らぬ前に聽かれた確信を有つたから、長き祈禱をなすの必要がなかつた。『なんぢらの父は求ざる先きに

その必需物なくてはならぬものを知たまへり』(太六〇八)と教へたのは、彼の確信を示したのである。

更に十字架上の耶蘇を見よ。彼は最後まで祈禱の人であつた。彼は祈りつゝ生き、祈りつゝ死んだ。彼は己れを十字架につけた敵の爲めには『父よ彼等を赦し給へ其爲すところを知ざるが故なり』(路二三〇三四)と祈り、そして彼の最終の言は『父よ我靈を爾の手にあづく』(路二三〇四六)といふ祈禱であつた。彼は己れの爲めに祈り、其弟子の爲めに祈り、更に其敵の爲めに祈つた。彼が其弟子に教へた祈禱の文句は、必ずしも彼の特獨のものではなかつたにせよ、之を以て彼に従ふものゝ祈禱の標準としたのを見れば、基督教的生活は祈禱の生活であるのみならず、地上に天國の來たるを祈る生活である事が知れる。耶蘇の己れを信するものに祈禱の生活を送るべきを教へたのは、彼れ自身の祈禱の人であつたからである。

## 第二十三章 内面生活の情調

生活には必ずその外面と内面との二方面がある。外面は境遇として現はれ、内面は情調として現はる。境遇は他人に直接に現はるゝが、情調は唯本人にのみ直接に現はるゝのである。情調を他の語で云はば、快不快即ち苦樂に外ならぬ。内面生活の苦樂は外面生活の境遇の順逆に準ずる場合もあれば、然らざる場合もあるから、一概に其境遇によりて察する事の不可能な場合がある。使徒パウロが自分の實驗を語つて、『憂ふに似たれども常に喜び云々』(哥後六〇十)と云ふたのは、是れ其外的境遇と内的情調との一致せざる實例である。憂ふるに似たれどもといふのは、他人から見た彼の境遇を指したのだが、自分の實驗は他人の見るところと反對で、憂ひぬのみならず、斷へざるの喜びである。他人の見るところ、本人の實驗とは斯くまで相違するからには、我等は耶蘇の境遇のみならず、其内面生活の情調をも知りたいのである。

耶蘇の生活の外的境遇について知るのは割合に易いが、果して其内的情調も亦境遇

に準じた乎といふに、使徒パウロの實例に於けるが如くに、其内外に多大の相違あるやうに思はるゝ、然らば其外的境遇の逆なるに反して、内的情調の常に順なるかといふに、必ずしもそうとのみ速断の出来ぬ點もある。彼は苦んだ人か、將た樂んだ人かと云へば、斷へず樂んだ人とも云へない。其情調は單純に快又は不快とは云ひ難い點がある。其内面生活の一面は苦であるが、他の一面は樂であるから、唯苦のみの人でもなければ、樂のみの人でもない。一點の曇もない快晴の天氣でもなければ、黒雲天を蔽ふが如き物凄き天氣でもなく、一方に黒雲棚引き、他方に日光の赫々として輝き出てゝ、七色の虹を描くやうな天氣にも比すべきものであらう。イザヤ書にメシヤが『悲哀の人』(五三〇三)と云はれて居る通り、耶蘇は悲哀の人であつたが、是れは唯其内面生活の一方面に過ぎぬ。

彼が何の爲めに悲哀の人であつた乎といふに、その外的境遇の爲めではない。彼が貧困の家庭に生れて、貧困の生活を送り、其公生涯に入りて以來、一日も寧日なき程の逆境に立つたからには、悲哀の人と云ふのは、極めて適當のやうにも思はるゝが、是ら

の逆境は聊かも彼の精神を苦めたやうには見へない。『狐は穴あり空の鳥は巢ありされど人の子枕する所なし』と云はれたのは、決して自分の貧困を歎いた言ではなくして、一種の野心を以て彼の弟子とならんとする人に断念させる爲めの言に外ならぬ。福音書には彼の涙を流した事が二回ほど記され、即ち一回はラザロの墓前で(約一一〇三五)、一回は橄欖山よりエルサレムを眺めた時であつた(路一九〇四一)。双方共に己れの爲めではなくして、人の爲めであつた。恐らくは彼が病人を見て之を憐んだ毎に、涙を流し給ふたであらう。彼が悲哀の人であつたのは、彼れ自身の不幸であつたが爲めではなくして、彼に接した人々の不幸であつたが爲めである。ユダヤ民族は元來一般には陰氣な氣質を有するからとて、耶蘇をも悲哀の人と見るのが適當だといふ人もあるが、もし彼が單にユダヤ人の一人であつたが爲めに、悲哀の人であつたとすれば、彼のみならず、凡てのユダヤ人は悲哀の人であるべき筈だが彼には悲哀の人と云はるゝ特別の理由があつた。そして其悲哀の人たるは彼のメシヤたる所以であつた。要するにその悲哀の人であつたのは、愛の人であつたが爲めである。世には古今東西

の別なく、人間の存する處には、必ず同情すべき不幸な人の居らぬはないが、之に同情する程の愛がなければ、悲哀を感じる事もない。哀むのは愛するのである。悲哀は不快でもあり、苦痛でもあるが、愛するものには免れ難い事である。耶蘇は愛の人であつたが爲めに、悲哀の人であつた。その點に於て彼は常に惱める人であつた。彼の人類愛の深刻でなかつたならば、悲哀の人と云はるゝ程に惱まなかつたであらうが、彼が人類の不幸に對して哀まずに居れぬ程に、その胸中に愛の火が燃えた。彼の目にはすべての人々が悲哀の對象であつた。『牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離ちうりになりし故に之を見て憫み給ふ』(太九〇三六)とあるが如く、當時の民衆の精神状態は同情せざるを得ざる程に悲惨であつた。斯る状態を日々目撃しつゝありながら多くの學者等の平氣であつたのは、民衆を愛する心のなかつたが爲めである。罪惡の充滿せる世をば、之を哀むる心なくして、どうして救濟する事が出来るであらう。救世主の悲哀の人でなければならぬ事は甚だ明かな眞理ではあるまいか。『凡て勞つかたるものまた重おもを負るものは我に來れ我なんぢらを息やすせん』(太一一〇二八)と云ひて、不幸な人々を己れに招

いたのも、重荷に壓せられた人々を見て憫み給ふたからである。エルサレムよりエリコに下る途中で、盜難に遇ひ、負傷して倒れたものを目前に見ながら、祭司もレビの人も之を見過して去つたのも、之を憫む心のなかつた爲めである。然るに或るサマリア人の旅して、此處に來り、之を見て憫み、近寄りて油と酒を其傷にさし、これをつゝみて、己が驢馬に乗せ、旅邸に携往つて介抱したのは全く彼の同情より出てた行爲である。

耶蘇の悲哀の人であつたのは、其心の清きが爲めであつた。其心の清きが爲めに、彼は罪惡を憎まずには居れなかつた。音樂者の憎むものは音聲の不調和であらう。調和を愛する人には、不調和程堪へ難い苦痛があるまい、精神上の調和を愛する耶蘇に取りても亦、調和を破壊する罪惡程忍び難き苦痛がない。是れ彼が世界の罪惡を一掃せんとして、一身を救世事業に捧げた所以である。彼は涙の人であつた。ゲッセマネの園では『憂ひ哀を催し』と云ひ、また『我心いたく憂て死しなるばかりなり』と云ひ、また希伯來書記者は『彼肉體にありし時かなしみさけ哀あはれ流して死より己を救得るものに祈

り』云々（四〇七）と云へる通り、彼は言語に絶する程の心痛を感じた。是れその苦痛の最高潮に達した時であらうが、彼の其一生を通じて苦痛を感じて居たのは、其心の極めて潔くして、其世の人心の極めて汚れた爲めに外ならぬ。

悲哀の人は救世主としては最も適當な人である。人の不幸を慰むるの力を有する人は、悲哀の人である。悲哀は一方ならぬ苦痛であるが、實に寶玉にも優る貴重な徳である。耶蘇の悲哀はその深大な苦痛であつたが、それがまた彼の無類の光榮である。マコーレーがギリシヤ史の中に左の如くに云ふた。曰『ギリシヤの力は議會の中にも、戰場にも、哲學の學校にも現はれたが、是等は其國の名譽ではない。文學は悲哀を慰め、苦痛を緩めた處に、またそれが不眠と涙にて衰へた目、暗黒な家屋と永い睡眠の爲めに痛んだ目に歡喜を興へた處に、アテンスの不朽の感化は最も貴き形で現はれて居る』と。耶蘇の不幸な人の涙を拭ひ給ふた事は、彼の不朽の榮譽である。

耶蘇は人に棄てられた人である。彼は何人をも棄てなかつたが、凡ての人々に棄てられた、彼は其同國民に棄てられた『かれ己の國に來りしに其民これを接ざりき』（約

一〇一一）とある通り、彼はユダヤ人に棄てられた。民衆が其心を耶蘇に寄せて、王冠を捧げんとした時であつたが、此時ですらも彼は民衆に歡迎されたとは思はずに、棄てられたと感じて山に避け給ふた。誤れる考を以て歡迎されたのは、彼は取つては棄てられた悲哀であつた。彼は精神界の王なるに民衆は彼を以て俗界の王となさんとしたのは、彼に取つての深い悲哀であつた。彼はまた其親しき弟子にまでも棄てられた。『我は生命のパンなり』との説教につまついて、多くの弟子等は彼を去つた。更に十二弟子の一人なるペテロさへも、三度までも繰返して、我は耶蘇を知らずと云ひて、其弟子たるを否定した。彼は主と偕に死せんとの覺悟を極めたものであつたが、虎の鼠と化した如くに、危険を懼れて耶蘇を知らずと公言した。其時『主身を回してペテロを見たまへり』（路廿二〇六一）とあるが、其瞬間の主の御顔は、悲哀に曇つたであらう。ペテロと同じく死を決した他の弟子等も皆其身の危きを恐れて主を棄てた。其上始終主と寢食を共にしたユダも亦敵に内通して、主を賣つたからには耶蘇の悲哀の人であつたのも亦當然である。

耶蘇は悲哀の人だが、同時にまた歡喜の人である。一見兩立し難き悲哀と歡喜が、尙ほ調和して彼の内面生活を成したのは、恰も黒雲と日光とが調和して、美麗な虹を描くに異ならぬ。我らは彼の心底まで進入して、之を觀察するの力がないにもせよ、泉より湧出づる水を見て、泉の底までも察し得るが如くに、彼の言語や、舉動に現はれ出でたる歡喜を見て、其心中を察するのは必ずしも不可能ではない。パウロは『神の國は飲食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり』(羅一四〇一七)といふたが、其神の國の建設者たる彼の心中には既に神の國が成立して居た筈なれば歡喜の人であつた事も亦明かである。彼の其逆境と戦つて屈せなかつた力の一つは其歡喜である。其内的經驗の重なる要素は歡喜である。時としてヘブル民族中に發見するやうな愛すべき耶蘇の容貌は、彼の周圍に集つた人々を魅するの力があつたと云ふ人もあるが、我等は彼の容貌の果して斯の如きであつたかを知らざれども、もし其容貌が人を惹寄せる力があつたとすれば、其容貌の光は心の歡喜の反映であつたとせねばならぬ。其言や舉動の優しさは、其心泉より湧出づる歡喜の表現に外ならぬ。其歡喜に充された

のは、小兒の如くに無邪な爲めだといふ人もある。勿論耶蘇は小兒の如く無邪氣な人でもあり、其心の疚しき所のなきが爲めに、俯仰天地に愧ちざる人でもあつた。心の純潔は其歡喜の本源であつたが、その歡喜の源泉は更に深き處にある。或は健康體の人なるが爲めに、歡喜に充滿したといふ人あらうし、山に登り、野に遊び、常に新鮮の空氣を呼吸し、花の香氣を吸ひながら、勞働したから、歡喜に充ちたといふ人もあらうが、其歡喜の源泉はもつと深い處にある。彼の歡喜の秘訣は神との交通にある。即ち神意に對する絶對の服従にある。一切を神に獻げて、其大使命を果さんとする誠意と忠順にある。たとへ世界を擧げて我に敵するとも、神我と偕にいまし給ふとの確信にある。神は我が父で、我はその愛子なりとの自覺にある。彼の外的境遇の波瀾を極めたるには拘はらず、其心海風靜かにして、漣すらも立たなかつた。けれども彼の精神が唯靜穩であつたといふ丈けでは、未だ云ひ盡くされては居ない。彼が逆境に居りながらも、歡喜に充滿した。山上の説教中に『人の子の爲に人なんぢらを惜みまた絶<sup>ごはざ</sup>け<sup>の</sup>言<sup>い</sup>りなんぢらの名を惡<sup>あし</sup>しとして棄てなば福なり其日には欣び踊れ云々』(路六〇二

二)といふたからには、斷へず迫害されつゝあつた時にも、尙ほ踊る程の歡喜があつたと見ねばならぬ。もし眞の歡喜は心の清淨にあるとすれば、彼れ程に歡喜に充された人は他になかつたであらう。彼は其死ぬる前夜に左の言を以て、己が胸中の歡喜を洩らした。曰『我この事を語るは我が喜なんぢらに在て爾曹の喜を益しめんが爲めなり』(約一五〇一一)と、又曰『われ平和をなすぢらに遺す我平安をなんぢらに予ふ我與ふる所は世の予ふる處の如きにあらず爾曹心に憂ふる勿れ又懼るゝ勿れ』(約一四〇二七)と。此言を發するには其死の間際に至るまでも、歡喜に充された人でなければ出來ぬ。耶蘇の宗教は歡喜の宗教で、信者の歡喜は彼の賜物の一つである。彼の祈禱の中にも『我いままんぢにいたる我世にありて此事を語れるは我喜樂を彼等に充しめんが爲めなり』(約一七〇一三)とある。彼が歡喜を他人に與ふる程に、其胸中の歡喜は豊富であつた。彼は此故に歡喜の人である。

耶蘇は人類を愛する深さが爲めに、悲哀の一人とならざるを得なかつたやうに、其同じ愛の爲めに、彼はまた歡喜の人とならざるを得なかつた。彼は罪に亡びゆく人の

爲めに、其心を深く痛めたが、その罪より救はれたのを見ては、歡喜禁すること能はなかつた。『人もし百匹の羊あらんに其一匹まよはば九十九を山におき往て迷し一を尋ざるかもし尋ねて之に遇はば我まことに爾曹に告ん迷はざる九十九の者よりも尙その一を喜ばん』(太一八〇一二、一三)とあるは、彼自身を牧者に喩へたので、その迷へる一つを尋ね得た喜も亦彼自身の喜を指したものに外ならぬ。此比喻の中に彼が悲哀の人でもあれば、また歡喜の人でもある事を暗示して居る。また傳道に派遣され七十人の弟子等の、其吉報を持ち來つた時に、彼の非常に喜ばれた事があつた。路加傳に『此時イエス心に喜びていひけるは天地の主なる父よ此事を智者と達者<sup>かしこもの</sup>とに陰<sup>かく</sup>して赤子に顯し給ふを謝す』(十〇二二)と記されて居る。放蕩子の歸宅せるを見て、其父喜禁じ難く、之が頸をいだきて接吻し、美服をきせ、美しき指環をはめ、善き履をはかせ、犢を屠りて宴會をひらき、音樂と舞蹈を催うして歡迎したのは、是れ耶蘇が天父の喜を語つたのではあるが、もし彼自身の胸中に罪人の悔改を喜ぶの情なくば、どうして天父の喜をば察し得るであらう。此喜に於て彼は常に天父と共鳴したのである。

耶蘇には更に我等の知り得ざる大なる喜びがあつて、彼に其十字架を忍ばしめた。希伯來書記者がいふた。『彼はその前におくところの喜樂よろこびによりてその耻はにかをも厭いとはず十字架を忍びて神の寶座の右に坐しぬ』(一二〇二)と。『その前におく所の喜樂』とあるのは何を指すのであらう。『その前におく』とある以上は、尙ほ未來に屬するもので、その受けんとする天上の榮光を指したものであらう。或はメシヤとしての勝利を指したもので、かも知れないが、その如何なる喜樂にせよ、彼が希望の喜樂を以て、其逆境と戦つた事丈けは疑ひのなき事である。然らば彼も亦『憂ふるに似たれども常に喜んだ』人であつた。

耶蘇は弟子の高慢心を戒めた後に、自分の使命について左の如くに語られた。『人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役れ又多くの人に代つて生命をあたへその贖とならん爲めなり』(太廿〇二八)と。是れ彼が犠牲の精神を以て、其使命に當るの覺悟を示されたのである。犠牲は一般に苦痛と解さるべきものではあるが、其苦痛であるか否とは、其實犠牲となる人の心一つに依つて定まるのである。自己の意志に反し、

自由を奪はれて、犠牲を強ひらるゝ時は、犠牲は最大の苦痛である。また自己の意志に出づるとはいへ、義務の爲めに止むを得ずして、犠牲となる場合も、多少の苦痛たるを免れぬ。たとへ犠牲の中には道德的意義が含まれたとしても、又はそれが自分の名譽となるとも、尙ほ幾分の苦痛が加味さるゝが、己が愛するものゝ爲めに、自ら甘んじて犠牲となる場合は、其名は犠牲であつても、尙ほ其中に苦痛のないのみならず、寧ろ大満足がある。犠牲も愛より流れ出づる時には、一種の崇高の喜びとなる。愛の最高の發現はいつでも犠牲であり、そして犠牲は愛の活動の最高の形である。犠牲は愛の生命であり、随つて犠牲は生命の悅樂である。『人その友の爲に己の命いのちを損うるは此より大なる愛はなし』(約一五〇一三)と耶蘇も云はれたが、犠牲は最大の愛で、また最大の喜びである。人は自分を棄つることによりて、一層高くなる。生命を棄つることによりて、一層高尚な生命に入る。高尚な生命には高尚な喜がある。最高の生命を有する耶蘇に、最高最深の歡喜のあるのは當然である。彼が尙ほ其奮闘の最中にあるも、『我既に世に勝かり』と云ひて喜び、十字架上に苦みながらも、『事を竟はりぬ』と云ひて、そ



の大満足を洩された。是れ將軍の凱歌を歌ふた歡喜にも優つた深甚の歡喜であつた。以上述べ來つたやうに、耶蘇は其一面に於ては悲哀の人、他の一面に於ては歡喜の人であつたが、悲哀と歡喜とは損失と利益との如くに、相差引するものではなくして、双方共に積極的の意識として、彼の胸中に存在した。そして管に互に妨害し、又は矛盾せざるのみならず、相調和して彼の經驗の美しき色彩を造つた。彼の胸中にはこれらの二者は相合して、美妙的な音樂となつた。この反對の西極端が彼の内面生活の情調を造つた爲めに、彼は喜ぶものと共に喜び、哀むものと共に哀む人となつた。

## 第二十四章 十字架への道

神の救の經綸より云へば、メシヤは必ず死なねばならぬもの、またメシヤを以て自ら任じた耶蘇自身も、兼てより決死の覺悟を以て、其救世の事業を開始した。然らば其最後の運命の死であることが、當然の事だが、その死は頓死でもなければ、變死でもなく、その踐んだ徑路の自然の歸着點であつた。たとへ人間の歴史は神意の支配の下にあるとしても、尙ほ人間の歴史である以上は、其處に自由の意志の發動がなければならぬ。耶蘇の死はその一生の最後に起るべき必然の事件と定つたとしても、何人も理由なしに人を殺すものもなければ、また死ぬるものもない。たとへ其理由は正當ならずとするも、尙ほ必ず一定の動機がなくてはならぬ筈である。よし彼が自ら其生命を捨つるの權威あつたにせよ。自殺ならぬ以上は、殺人の行爲に出づる動機が何人にかあつた筈である。また彼を殺すが如きは、天地の容れざる大罪なるにもせよ、尙ほ彼が其身を死地に陥入れた理由もなくしてはならぬ。十字架への道とは即ち其死に至

る徑路をいふのである。

ユダヤ人が耶蘇を如何に待選した乎といふに、聖書は簡短に之を左の如くに記した。曰『かれ己の國に來しに其民これをうけざりき』(約一〇一一)と。然らば彼の世に來つたのは、其時機に適せざりし乎といふに、『期す<sup>とき</sup>でに至るに及びて神その子を遣はし給へり』(加四〇四)とあるからには、おそくもなく、また早くもなかつたが、それにも拘はらず當時の人々の彼を歓迎しなかつたのは、何故であつたらう。肉體的にも精神的にも、彼が當時の人々の間に枕する處のなかつたのは、何故であつたらう。勿論當時メシヤの出現を熱望した敬神家も少なからずあつたが、一般の人々に歓迎されなかつたの、何故であつたらう。我等は其理由を諸方面より研究するの必要がある。『馬を相するに之を瘦に失し、士を相するに之を貧に失す』とあるが如くに駿馬でもその瘦せた爲めに、駑馬と見られ、俊傑でも貧しい爲めに、愚者と誤らるゝのは、古今有り勝ちな事である。ユダヤ人の耶蘇をメシヤとして歓迎し難き原因も多くあつたが、彼の出所が其原因の一であつた。前にも述べた通り、彼はナザレ人であつたが

爲めに、ピリポが其友人ナタナエルに遇ふて『我ら律法の中にモーセが載<sup>の</sup>たる所預言者らの記し、所のものに遇へり即ちヨセフの子ナザレのイエスなり』と云へるに對し、敬虔の念に富んだナタナエルさへも、『ナザレより何の善者<sup>よきもの</sup>出んや』と云ふて一笑に附せんとした。彼は未だ耶蘇の人物の如何を知らざれども、其出所がナザレの寒村と聞いたばかりで、之を輕蔑したのであつた。此村の斯くも輕蔑さるゝには、何かの原因もあつたであらうが、其地より決して人物が出ないと極めたのは、随分甚しい偏見と云はねばならぬが、實際其出所の爲めに、耶蘇が輕蔑された。然らばナザレ人が彼を何と見たであらう。彼が如き大人物を己が村より出したからには、それを以て誇りとすべき筈ではあるが、却つて其反對に出てたのは、大工ヨセフの子であつたからである。もし祭司の家にて生れたならば、彼を尊敬したであらうが、ヨセフの子であつたが爲めに、本人の力量の如何を見ず、唯其ヨセフの子なるの故を以て、尊敬するを好まなかつた。是れ耶蘇が『預言者故郷にては尊ばるゝことなし』といふた所以である。彼はヨセフの子なるが爲めに、ナザレ人には尊ばれず、またナザレなるが爲

めに、ガリラヤ人には尊ばれず、ガリラヤ人なるが爲めに、ユダヤ人には尊れなかつた。『尋ね見よガリラヤより預言者出づることなし』とはユダヤ人の言である。彼れもし首府エルサレムで、王家または祭司長の子として生れたならば、國民は容易に彼に靡いたであらうが、それは神の經緯ではなかつた。彼は其出所の爲めに冷遇され、彼をメシヤと信するものまでも、之れが爲めに迫害された。『そはイエスをキリストと言明すものあらば會堂より出すべしとユダヤ人互に議定たればなり』(約九〇二二)。

古今東西の別なく、其時代を超越した人は、何人といへども同時代の人々に歓迎されぬのは常である。是れ凡人の非凡の人を理解し得ざるの結果と見るべきであらうが、此意味から云へば、非凡の人は常に寂寞の感を免れ難い。更に其上冷遇嫉妬怨恨を以て迎へらるゝから、天才も亦不運といはざるを得ぬ。けれども救世の使命を以て世に立つ以上は、世と妥協するを得ざるのみならず、専ら其使命に向つて猛進するの一途あるのみである。舊約時代の預言者はいづれも同時代の人々に虐待されぬはなく、遂には其使命の爲めに一命を犠牲としたのは、預言者としての普通の運命であつた。耶蘇嘗てエルサ

レムの人々を指して、『預言者を殺し爾に遣はさるゝ者を石にて撃つものよ』(太二三〇三七)と云たふのは、彼等の祖先が預言者を殺し、彼等も亦同じ精神を以て己れに對したからであつた。預言者中の最大なるバプテスマのヨハネを見よ。彼が悔改を叫んだ義人であつたが、其義なるの故により、ヘロデ王に殺された。耶蘇も己が先驅として活動したヨハネの死をば、悲むべき事件と見たのみならず、やがては己が運命も亦その如くなるべきをも知つた。彼はヨハネの殺された理由を知らぬ筈もなければ、自分も亦同じ精神を以て世に立つたからには、其運命の同じきを覺悟した。其使命は神意に従つて、一直線に猛進するにあれば、何物にが衝突せざる筈なく、たとへ最後の勝利を期したとはいへ、幾度か苦戰奮闘せねばならぬ事は、預め其覺悟した所であつた。

當時ユダヤ教の諸派の宗派心は甚だ熾んで、「パリサイ」派は「サドカイ」派と争ひ、同じ「パリサイ」派の中でも、ヒレル派とシャマイ派と争ひ、其他ヘロデ黨あり、エセネ派あり、いづれも互に排斥して居つたからには、斯る時代に新教派の如何に遇せらるべき乎は、何人も容易に察し得るであらう。然るに突然ユダヤの野にバプテスマのヨ

ハネが其聲を揚げた。「パリサイ」や「サドカイ」の人々の來たるを見るや、彼は「虻の裔よ」と云ふて之を譴責した。ヨハネは精神界の改革者を以て自ら任じた以上は、人心を覺醒するのは、其使命であつた。そして其使命の爲めに、彼は其身命を犠牲にした。耶蘇も亦精神界の改革者で、しかもヨハネよりも更に大なるものであつたからには、偽善者を叱咤したのも亦更に猛烈であつた。彼が「パリサイ」人を譴責した言を見よ。彼等は云ふのみで行はざるもの、彼等は重くかつ負がたき荷を括て人の肩に負せ己れは一の指をもて之を動かすことを好まざるもの、人に見られんが爲に行をなすもの、その佩經の幅を濶し、其衣の裾を大にし、また蒔席の上席、會堂の高座、市上の問安、人々より「ラビ」「ラビ」と稱られんことを好むもの、天國を人の前に閉ぢて自づら入らず、入らんとするものをも入れざるもの、嫠婦の家を呑み、いはりて長き祈をなすもの、徧く水陸をめぐり、一人をも己が宗旨れ引入れて、之を地獄の子となすもの、替者の相、蠅を灑して駱駝を呑むもの、白く塗りたる墓、預言者を殺したものの、子孫、蛇虺の類などである。當時の宗教家は耶蘇の目には斯る醜惡な

ものであつたが爲めに、之を猛烈に譴責した。宗教界の指導者たる彼等を斯くも思ひ切つて譴責するには、預め決死の覺悟を要した事が明かである。斯くして彼は其進むべき道を進まざるを得なかつたが、その進んだ道は十字架への道であつた。「パリサイ」人に加へたこの猛烈な譴責は、耶蘇の一生の後期にあつた事だが、その以前にも幾回となく衝突を繰返した。「パリサイ」人が彼の民間に人望あるを嫉み、如何にしてかその人望を傷けんとて、色々の工夫を凝らした。其工夫の一つは其失言を捕へて攻撃する事であつた。然るに彼等より見れば、非難すべき事情が續々發見されたから、其機會を捕へた毎に之を非難した。衝突の最初は多分カペナウムで癡癡の人を癒やした場合であらう。其時耶蘇病人に向つて『子よ爾の罪赦されたり』といふたのは、非難を受くる原因となつた。彼等此言を聞くや、『斯人は何故にかく惡口をいふや神にあらずして誰か罪を赦すことを得ん』と心の中に思ふたが、未だ口には發しなかつた。耶蘇疾くも其心を看破し、『それ人の子地にて罪を赦すの權威あることを爾曹に知せんとて遂に癡癡の人に我なんちに告ぐ起て床をとりなんちの家に歸れといひければその人

直ちに起て床をとり衆人の前にいづ。彼等の眼前で病人を癒したからには、彼等は沈黙せざるを得なかつたが、民衆其事を見て『我らいまだ斯の如きことを見しことなし』とて、神を崇めたから、益「パリサイ」人が彼の名聲の盛なるを不快に感じた。其後耶蘇がマタイの宴會に招かれて、税吏と食を共にしたのは、多分非難を受けた第二回目であらう。此時までは單に非難したばかりで、未だ殺意を起さなかつたが、或安息日にペテスダの池畔で、三十八年病みたる人をいやした事が、安息日を犯したとの理由で、彼を殺さんとした(約五〇一六)。また構廬節の末日耶蘇殿にて『人もし渴かば我に來りて飲め』と叫んだが、或人彼をキリストなりと云ひしに、「パリサイ」人や有司等が、窃かに下吏に命じて、彼を捕縛せんとしたが。下吏も彼の教に感じ、手を下すの勇氣なく、空しく有司等の許に歸り來つた。

約翰傳八章には、ユダヤ人と耶蘇との大激論が記されて居るが、其場合に於ける彼の言も實に猛烈であつた。彼はユダヤ人を指して『惡の奴隸』、『惡魔の子』、『眞理に居らざるもの』と云ひ、ユダヤ人も亦彼を指して『サマリヤ人にして鬼に憑<sup>つか</sup>たるもの』

と云ふた。此時も亦ユダヤ人は殺意を示したと見へて、彼は『我なんぢらがアブラハムの裔なるを知るされど我を殺さんと謀るそはわが道なんぢらのうちにあらざればなり』と云ひ、また『今なんぢらは神に聞<sup>き</sup>し眞理を告<sup>つ</sup>る我を殺さんと謀るこれアブラハムの行にあらず』と云ふた。そして激論の結果については、左の如くに記されて居る。『是に於て衆人かれをうたんとて石を取れり』と。衝突毎にユダヤ人の殺意が深くなつたが、時未だ至らざれば、彼は敵の手を逃れて居たが尙ほ十字架への道を進んで居た事は明かである。彼と「パリサイ」人との衝突の場合は枚擧に暇なき程多くあるが、離婚問題の如き(太一九〇三以下)、納税問題の如き(同二二〇一五以下)はその中の重なるものである。

「サドカイ」人は「パリサイ」人程に、耶蘇に反抗しなかつたが、其學說より云へば、「パリサイ」人よりも多く耶蘇の教に反する所があつた。此派は唯物派とも云ふべきものなれば、靈魂不死や、復活を絶對に否定した。使徒行傳に『そはサドカイ人は復活また天使および靈をなしといひパリサイ人は之を皆ありといへばなり』(二三〇八)

とあるのを見れば、耶蘇の教は「サドカイ」人の教よりも、「パリサイ」人の教に近い。されば「パリサイ」人の彼に反抗したのは、教義上からではなく、嫉妬怨恨の情からであつた。「サドカイ」人の反抗したのも亦同様の理由であつたらうが、更に其教義上の相違も理由の中に加つて居た。復活を信せざる彼等は、耶蘇の復活についての教を不合理となし、之を辯駁せんとして、自ら難問題と思ふたものを提出した。たとへ耶蘇といへども、此問題には必らず窮するならんと預想して、未だ其答を聞かぬ前から、既に勝利を得たやうな勢を以て、左の如くに質問した。『師よモーセの云へるに人もし子なくして死ば兄弟其妻を娶りて子をうみ兄弟の後を嗣すべしと茲に我等の中に兄弟七人ありしが兄娶りて死子なきが故に其妻を次子に遺れり其二其三其七まで皆然す後終に婦もまた死たり甦るときは此婦七人のうち誰の妻となるべき乎是皆彼を娶し者なればなり』と。如何にも一見巧妙を極めたやうな質問だが、彼は容易に之を解決して、彼等の知識の淺薄なるを示した、曰『爾曹聖書をも神の能力をも知ざるに由て謬れりそれ甦るときは娶らず嫁かず天にある神の使等の如し』(太二二〇二三以下)

と。彼等此答の意外なるに驚き、其まゝ口を緘したのである。

當時の宗教家に對する耶蘇の態度は甚だ冷酷で、あまりに挑戰的だと評する人もあるが、是れ彼の冷酷なるが爲めではなくして、其メシヤとしての使命より、斯る態度を取らねばならなかつた。唯人民に覺醒を與ふる丈けの任務を負ふた預言者の中にも、尙ほ挑戰的態度を取りて、其身命を犠牲にしたものもあつたからには、單に覺醒を與ふるに止らず、精神界の改革者、新天地の創造者を以て自ら任じた耶蘇に取つては、斯る態度を取らざるを得なかつた。『われ火を地に投入れん爲に來れり我何をか欲むすでに此火の燃たらん事なりわれ受べきのバプテスマあり其成遂らるゝまでは我痛いかばかりぞや我は安全を地に施んとて來るとおもふや我なんぢらに告ん然す反て分争しむ』(路一二〇四九以下)とは、是れ彼のこの罪惡の世に對する精神的態度であつた。彼が其使命を果すの道は戰であると思ふたから、『われ受べきのバプテスマあり』として、其死の覺悟を示したのである。

また殿潔の行爲は彼が精神界の改革者を以て自ら任じた事を明かに示した。約翰傳

に依れば、其宣教の初期に之を實行したとあるが、共観福音書に依れば、其宣教の後期に實行したとある。然らば前後二回實行したのかも知れぬ。一回にせよ、二回にせよ、其目的は同一にして、しかも明かに示されて居る。神殿はユダヤ教の中心で、神聖を極めた處なるに、祭司長が姦商と結托し、其懷を肥さんとして、之を俗惡極まつた市場と化し、其處に牛羊を賣るものあり、鴿を賣るものあり、兩替するものありて、神聖の氣分を持つ事の出來ざる處となつた。耶蘇其光景に接するや、憤慨に堪へず、他の心あるものも有司等の權威を畏れて、手を出すに由なく、唯心竊かに憤つたばかりであつたが、耶蘇は忽ち繩を鞭として商人を逐出し、兌銀者の案、鴿を賣る者の椅子を倒し、『我室は萬國の人の祈禱の室と稱なほらるべしと録されたるにあらずや然るに爾曹は之を盜賊の巢となせり』(可一一〇一七)と云ふて譴責した。姦商等は彼の勢に畏れて遁げ去つたが、彼等と結托した有司等が、公然彼の行爲に反對し兼ねて、見て見ぬふりをしたが、己等に不利を來したこの行動を憤り、心竊かに之が復讐を企てた。この事件の結果について聖書の記せる處に依れば、『學者と祭司の長これを聞て如何し

てかイエスを喪ほろさんと謀り云々』(可一一〇一八)とある。殿を潔めたのは精神を潔むる表象的行爲なれば、メシヤ的行爲中の重なるものである。この行爲によりて、有司等の殺意を燃やしたが、是れ改革者としての避け難き道を取つたので、其死の運命は兼てよりの覺悟であつた。もしこの行爲は共観福音書の記せる如くに、彼の宣教の後期にあつたとすれば、之れが其死を早めた動機となつたであらう。されば是れも亦十字架への道であつた。

有司等の耶蘇を殺さんとした理由は、前に述べた通りであるが、彼は自分の守る所をどこまでも堅く守り、其運命を天意にまかせて往くべき道を進んだ。斯くして其達した處は十字架であつたが、彼が一般の民衆に對して、どんな態度を取つた乎といふに、それも亦同じく十字架への道であつた。ユダヤ人は上下の別なく、一般にメシヤ的希望を懷かぬものなく、随つてバブテスマのヨハネの世に現はるゝや、彼を以てメシヤと思ふたものもあつた。其後耶蘇の現はるゝに及んで、更に彼を以てメシヤと思つたものも多かつたが、彼は民衆の期待に應せぬのみならず、却つて彼等に失望を與

へたのは、その理想が人民の輿論と一致せざるが爲めである。彼は人民の期待に添はんとせず、飽までも其理想の上に立つたから、彼等を失望せしめたのである。

彼等とても勝手にメシヤを想像したのではなく、預言に基いて之を期待した。耶蘇も亦勝手に其理想を描いたのではなく、同じく預言に據つたが、人民は預言を文字通りに解し、彼は之を精神的に解した爲めに、二者の間に矛盾が生じたのである、メシヤはダビデの裔として生まるゝとは、預言の示せる處であるが、ユダヤ人は之を文字通りに解して、メシヤを以てダビデの如き政事上の王となし、敵國を征服してユダヤ人の自由を恢復し、其時には萬民皆エホバを神となし、國富み民安く、宛ながら樂園の觀を呈するならんと想像した。然るに耶蘇は精神的に預言を解したから、政事上の王となつて物質的繁榮を來たすを欲せず、飽までも自分の理想を實現せんとして、ダビデの裔と呼ばはるゝをさへ厭ふた。人民の解するが如き意義で、彼は決してダビデの裔にあらざるを自覺したから、或る盲人の彼に助を乞ふに當り、ダビデの裔といふ名稱を以て彼を呼んだか、之を聞くことを好まなかつた(太九〇二七)。サイロビニケ

の婦人も亦この名稱を以て彼を呼んだが、其時にも彼は沈黙した(太一五〇二二、二三)。彼れ嘗て「パリサイ」人に向つて、『爾曹キリストについて如何におもふや誰の子なるか』と問へるに、彼等は『ダビデの裔なり』と答へたれば、彼は之を否定した。

(太二二〇四一以下)。彼は必ずしもダビデの裔といふ名稱其物を厭ふたのではないが、此名稱に關する人民の誤解を厭ふたのである。斯の如くメシヤについての双方の意見に一致を缺きたる以上は、人民の耶蘇について礙いたのも亦當然である。

メシヤを政事的に解したのは人民だが、之を道徳的に解したのはパブテスマのヨハネであつた。此ヨハネですらも尙ほ耶蘇について礙いたのは、彼の質問に依て知れる。曰『來べきものは爾なるか又われら他に待べき乎』と。耶蘇の之に答へた最後の言に、『凡そ我ために躓かざるものは福なり』(太一一〇六)とあるを見れば、ヨハネも亦多少礙いたやうに見ゆる。先驅者たるものまでも礙いたとすれば、人民の彼について礙いたのも亦止むを得ざる次第であつた。

斯く人民がメシヤについて誤解した爲め、耶蘇は己れのメシヤたるを可成知さぬや



うにと注意した。是れ人民にも益する所なく、また己れにも事業の妨害となるからである。己れに病を癒された人に向つて、彼は『我を揚すこと勿れ』(可三〇一二)と戒め、また彼のメシヤなる乎を知らんとて、休徴を求めたものには『好悪なる世は休徴を求むされど預言者ヨナの休徴の外は之に休徴を與られじ』(太一二〇三九)といふた。また或る人々の彼がなし、奇跡を見て、いよく世に来るべきメシヤなりと思ひ、強ひて彼を王となさんとしたが、彼は其人々を避けて山に入り給ふた(約六〇一四、一五)斯く民衆の期待に添はざるより、其反動の起り來たるも當然の事である。彼は民衆の好奇心や愛國心に満足を與へざるより、人心は自然に彼を離れ去り、その人望も亦次第に落ちかけたが、是れ素より彼に取りては、齒牙にも掛くるに足らぬ事であつた。けれどもそれは彼の爲めには十字架への道を開くの助けとなつた。有司等が是れまで耶蘇を幾度か捕へんと欲して、尙ほ躊躇したのは、民衆が心を彼に寄せたからであつたが、今や民心の彼を離れたのは、彼を捕ふるの機會を有司等に與へた。是らの結果については、耶蘇も預め先見して居つたが、それがメシヤとしての自分の進

路であつたが爲めに、毫も外界の事情や、民心の如何に關せず、一直線に其使命に向つて猛進した。彼の最後に十字架を負ふたのは、最初より十字架への道を歩んだからである。されば十字架の死は彼の失敗ではなくして、其計畫の完成であつた。『事畢りぬ』と云ひて、世を去つたのも亦當然である。

## 第二十五章 イスカリオテのユダ

十二弟子の中で、耶蘇と師弟の關係を結んだ由來の知れて居るものは數人あるが、其他の弟子に至つては、全く不明である、就中イスカリオテのユダに至つては、どんな緣故があつて 耶蘇の弟子に加つた乎は、我等全く知る事が出来ぬ。他の十一人はいづれもガリラヤの人であつたからには、ガリラヤから起つた耶蘇とは地理的關係のあつた人々とも思はるゝが、イスカリオテといふ語は、もし地名であつたとすれば、ユダヤであるから、どんな緣故があつて、ユダヤ人なる彼の弟子となつたかは不明である。もしこの語は地名ではなくして、或説の如くに謀反人といふ意であつたとすれば、後から彼に附したのであらう。もし地名であつたとすれば、地理的に耶蘇と離れた處に居つた彼が、どうしてガリラヤ人の仲間に加つて、彼の弟子となつたのであらう。また何人が彼を紹介したのであらう。是等の點については我等に何等の知識もないが、幾分か推察し得る點も全然ないとは云へない。たとへ彼はユダヤの地に生れた

としても、ガリラヤの或る地方に其住所を定めた人であらう。他の弟子等は多く漁者であつたが、彼のみが其仲間ではなかつたやうに思はるゝ。漁者は勞働に適すれども、經濟的頭腦を要する會計には適しない。然るにユダの會計に擧げられたのは、其經濟的頭腦のあつたが爲めであらうし、また金錢上の取扱ひに慣れて居るのを見れば、商人であつたかも知れない。香膏の價銀三百だと云ふたのを見れば、商人と見るのが適當である。當時のガリラヤの地は、商業の盛んな處で、ユダヤの地の到底匹敵の出來ざる程であつたが爲めに、彼がユダヤ人ではあつたが、ガリラヤで商業に従事し、それがガリラヤ人の仲間入をする緣故となつたものと察せらるゝのである。

ユダの如き惡漢が何の爲めに耶蘇の弟子に加つたであらう。よしユダには何等かの動機があつたにせよ、耶蘇が何故に彼が如きものを其弟子として選んだのであらう。是等は古來の難問題となつて居る。ユダが主に召ばれて弟子となつたのか、若くは自ら進んで彼の弟子たるを願ふたのか、いづれにしても彼が數多の弟子の中より特に選ばれた十二人の一人となつた以上は、主が彼を適當なものとして弟子に加へたと見ねば

ならぬ。此に於て更に別の問題が起つて來る。それは主がユダなる人物を知りつゝ、弟子に加へたのか、若くは全く知らずに加へたのかと云ふ事である。約翰傳に依れば、『それイエスの如此いへるは信せざるものは誰おのれを賣すものは誰といふ事を元始より知ばなり』(六〇六四)とあるが、是れは耶蘇自身の言ではなくして、記者の言であるから、之を以て必ずしも耶蘇がユダの惡人なるを最初より知つた證據にする事が出來ぬ。けれども彼がカペナウムの會堂で説教した後、『我なんぢら十二人を簡しにあらすやされどその中の一人は惡魔なり』(約六〇七十)といふたのを見れば、彼はユダの人物を預め知つたやうにも見ゆる。然らば彼は惡魔を其弟子として簡んだであらうか。決してそんな事のあるべき筈がない。ユダが將來惡魔のやうな人間になるとの事は、彼の先見した所であつたとしても、惡魔になるまでは、決して惡魔ではない、また惡魔にならぬ前に、將來惡魔になるからとて、之を惡魔として取扱ふべき理由もない。ユダには其性格上大なる缺陷があつたにせよ、誠意誠心から主の事業に参加せんと欲して、彼に従ふたのを、彼は其將來の失敗の爲めに拒絶すべき譯もない。もしユ

ダが悪人でありながら、善人を装ひ、其野心を充さんとて、弟子の仲間に加はらんとしたならば、必ず拒絶されたであらう。悪人ならざるも、其動機の不正であつたが爲めに、弟子たらんとする願意の入れられなかつたものもあつた。然るにユダは真心から主に従はんことを願ふのみならず、他の弟子に比して優るとも、劣らざる才能の人であつたが爲めに、大に用ふるに足るべき人物であつた。ユダ自身ですらも決して最後にあれ程の大罪を犯すとは夢にも思はなんだであらうし、また彼が弟子の一團の計に擧げられたのを見ても、主にも仲間のものにも正直の人として、十分信用されたいに相違がない。約翰傳に『彼がかくいへるは貧者を願ふにあらず竊者にて且つ金囊をもちその中に入たるものを奪ふものなればなり』(一二〇六)とあるが、これは彼の最後の大失敗を見てからの批評で、それまでは何人もユダの金を盗んだ事を發見したこともなければ、疑つたものすらもなかつた。何となれば最後までも會計をまかせられて居つたからである。然らば彼が金を奪ふものだといふたのは、奪ふ事を見て云ふたのではなく、その大罪を犯した事から、推量したまでの事であらう。恐らくは是れ

丈けはユダの冤罪であつたかも知れぬ。彼があのような大罪を犯した以上は、斯る冤罪を蒙つたからとて、辯解するの道もあるまいが、是れは同情すべき點である。彼は最初よりの悪人ではなかつたから、悪事を企つる計畫を以て、弟子の仲間に加つたものではない。後に至つて悪人となつたが、聖書に依れば、彼に斯る變化の發生した一定の時期があつたやうである。『惡魔はかねてイエスを賣んとする事をシモンの子イスカリオテのユダといふものゝ心に發さしめたり』(約一三〇二)とあるを見れば、實際其惡事を實行した時よりも、餘程以前から其計畫があつたやうだが、それでも尙ほ最初からではなかつたやうに見ゆる。彼か惡魔に惑はされた一定の時期があつたがそれは弟子の仲間に加つてからの事であつた。されば彼は他の弟子のやうに正直なものとして、また其才能に於ては一層卓れたものとして、耶蘇に選拔されたものであつた。そこで新に此に起り來たる問題は、彼が主を敵に賣るやうになつた動機が何んであつたかといふ事である。聖書の記事に依れば、彼は金錢の慾の深い人のやうに見ゆる。前にも記したやうに、彼が金を奪ふものだと云はれたのは、たとへ冤罪であつたとし

ても、斯る冤罪を蒙むるやうになつたのも、多少理由のあつた事であらう。彼が會計を務めて居つた間に、金錢を愛する慾を増長せしめたかも知れぬ。金錢を取扱はぬ人には、餘り起らぬ誘惑も、彼が毎日それを取扱つた爲めに、折々起つたかも知れぬ。聖書に『その時十二の弟子の一人なるイスカリオテのユダといへるもの祭司の長等の所に往て曰けるは我なんぢらに彼を賣さば幾何を予るか途に銀三十にて約したり此時よりイエスを賣さんと機を窺ひぬ』(太二六〇一四—一六)と記されあるを見れば、彼は金錢の奴隸であつたやうに見ゆるが、金錢を愛する心から、主を敵に賣つたといふ事には、多少理解の出来難い點もある。ユダが眞に金錢の爲めにのみ主を賣つたとすれば、銀三十といふ額で満足したのは、了解され難い點である。彼がもし銀三十ばかりで満足する程の人であつたとすれば、わざ／＼恩義ある主を賣らずとも、他にいくらか方法があつたであらう。敵はどんな高價を拂ふとも、耶蘇を殺さんとする宿望のある人々なれば、ユダがどんなに多額の金を要求しても、必ず應せねばならぬものであつた。然るに銀三十で彼が満足したとせば、あまりに慾が少な過ぎるのではあるま

いか。銀三十といふ額は彼の申込んだ額か、或は先方にねぎられた額かは判然しないが、兎に角最後に其少額で満足したのは、金が其目的ではなかつた爲めであらう。勿論金錢上の慾も多少彼を誘惑したのであらうが、それが重なる動機であつたとは云ひ難い。彼が主のいよ／＼死罪に定められたるを見るや、大に悔ひて祭司長の處に往き、その金を返さんとしたが、拒ばまれたから、その金を殿に投棄して自殺した。これを見て見ても、彼が銀三十を欲して、主を賣つたとは思へない。彼は金錢の奴隸であつたかも知れないが、銀三十ほしいばかりに、主を賣つた程の愚物ではなかつたであらう。

ユダが金の爲めに、主を賣つたのではなかつたとすれば、其他に目的がなければならぬ。それは彼の嫉妬心と不平であつた。嫉妬心は草叢に潜伏する蛇同様に、折り／＼其姿を現はすが、其恐るべき毒を有する程に、外部に露はれて來ない、随つて人にも知れず、自分ですらもそんなに氣が付かず居る。恰も地下を流るゝ水のやうに、心の底を流るゝ熱情だが、時には火のやうに猛烈に燃えても、煙の立ぬため、人には

匿く居る。ユダには金銭の慾があつたとしても、嫉妬心程には強くはなかつた。もし彼に金銭の慾があつたとすれば、それが嫉妬心から起つたものであらう。耶蘇の弟子はいづれも自ら將來の大臣を期待したからには、高慢ならぬものがない。ユダに斯る心があつたからとて、獨り彼のみを野心家として非難すべき譯もなからう。十二弟子はいづれも其野心に於ては優劣なかつたが、もし才能の上から云へば、ユダの如きは一二を争ふの地位にあつたであらう。彼が自信力の強かつた人であつたから、斯く其心の中で思ふたであらう。我は繁雜な會計の任に當つて、耶蘇及び弟子の一團の出納を司どり、何等不都合のなかつたのも、我が最善を盡くした爲めである。けれども何人も我が功勞を認むるものがない。ペテロの如きは副團長を氣取つて、何事にも先きに口を出し、ヤコブ、ヨハネの如きは、別段何等な事なきに拘はらず、主の親戚といふ關係から、左右の大臣たらんとする運動をなした。實にけしからぬものどもではあるが、主は彼らの野心あるにも拘はらず、何か大事件の起つた場合には、必ず彼等三人のみを相手として、我を無視する傾向がある。ギリシヤ人が主に面會せ

んとすれば、ピリポやアンデレに紹介を求めて、我を全く度外視するのは、弟子の間も、この會計の大任を負へる我が苦心を知らずに、我を無視するからである。金銭上の事について無智なる彼らの、今日まで何等不便を感せずに来つたのは、何人の御蔭と思ふか、斯くまで我に負ふ所の多大なるにも拘はらず、我を無視して、己れらのみ主の寵愛を私せんとつとめて居る。主も亦我よりも彼等を重んずるのは、甚だ其意を得ざる次第である。以上はユダの腹ではあつたが、彼は口には出さずに心の中で憤つて居た。

ユダが弟子等に對して、嫉妬心を燃やしたとすれば、彼等に對して其不快を洩さすの手段に出づべき筈ではあるが、別に何等の手段をも講せず、主を敵に賣らんとしたのは何故であらう。その主を賣つたのは金の爲めでもなければ、殺意があつた爲めでもなかつたのは、主の運命の定つたのを見て、驚いた事でも知れる。然らば何の爲めであつたらう。是れ弟子の團體より、一時主を離さんが爲めであつた。ユダが斯く考へた、彼らの我が功勞と技量とを認めざるは、主と偕に居るからである。もし一時

なりとも主を離れたならば、水を離れた魚同様、何事もなし得ざる無力のものである。その時始めて我が力を認めて、我を尊敬する心を起すであらう。そして主が再び敵の手を逃れて歸り來らば、必ず重く我を採用するであらうと。斯る考よりして彼は日頃耶蘇を憎む祭司長を利用せんとて、陰かに或日之を訪問し、如何にも自らが耶蘇に大不平あるかのやうに見せ掛けて、彼を賣る交渉を始めた。然るに此計畫は自分の目には功妙を極めたものと見へたであらうが、案外にも是れは主を殺し、また自分までも殺す恐るべきの禍を招く事となつた。是れは耶蘇に取りては、神の經綸を完成する方法とはなつたが、ユダ自身に取りては沈淪の道となつた。

## 第二十六章 ゲツセマネ

エルサレムの或る高樓で開かれた筵會の終つたのは、夜半過ぎてあつたらうが、耶蘇は其處から十一人の弟子を伴ひ、市の東門を出て、ケドロンの川を渡つて、ゲツセマネの園に入つた。此園は或る富める信者の所有で、主及び其弟子等の屢來つて休息した處であつた。主は途すから其身に迫り來つた運命や、更に其弟子等の身上に起らんとする悲むべき事情を思ひ浮べ、『われ牧者をうたば群の綿羊ちらん』(亞一三〇七)との預言を思ひ起し、弟子に向ひ、『今夜なんぢらわれについて礙かん』と(太二六〇三一)と云ひて彼等を驚かした。主の一大事の場合に臨んで、其弟子たるものゝ遁げ匿るゝが如きは、不忠の至りなれば、彼等は各自大なる覺悟を以て、其場合に處せんと思ふたのに、突然主に憶病者また不忠者のゝ如くに見られたのを、甚だ口惜しく感じた。彼等自身よりも主は能く彼等の心中を洞察したから、斯く云ふたのである。彼等は主には憶病者と思はれても、いざとならば、勇氣を振ふて忠義を盡くして見せんと覺悟

を極めて、沈黙したが、主に誤解されたのを最も残念に感じたのはペテロであつた。彼は弟子中の勇者を以て自ら任じたものと見え、どうしても黙し兼ねたれば、『みななんぢについて礙つてくとも我は終に礙かじ』と云ふて非常に堅き決心を表はしたが、折角の大決心も自分から見ての決心で、主より見れば、毫も依頼するに足らぬ程の脆きものであつた。多分ペテロは拔群の勇氣を示して、主に安心させんとしたのであらうが、主は却つて其言のみ壯にして、信仰の脆きを哀み、『今夜鳴鶏かざる前に爾二次われを知らずといはん』と云ふた。先きには主は弟子全體を指して云ふたが、今ペテロ一人を指して云ふたので、彼は益々其憶病者と誤解されたのを無念に感じ、更に勇氣を振ふて『我は主と偕ともに死しるとも爾を知らずといはじ』と斷言した(太二六〇三一以下)。ペテロは益出でて益壯なるが如くに見へたが、是れ唯血氣の勇の然らしめた所で、己れを知らざるもの、言に外ならぬ。

斯く語りつゝ、往く間に、彼等ゲツセマネの園に達したから、八人の弟子を其入口に留め、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を伴ひ、主の園内深く入り給ふたのは、天父に

祈らんが爲めであつた。此時不思議にも主は其弱き弟子等の同情を求めた程に、其心に激しき苦痛を覺え、『我心うれいたく憂うれて死しるばかりなり』(太二六〇三八)と云ふた。彼は最初より苦んだ人ではあつたが、未だ此時程に激く苦んだ事がなかつた。彼は心に苦んでも、容易に口には云はなかつたが、今は云はずに居れぬ程に、其苦みが激しくなつた。その天父に祈つた時には『其汗あせは血の滴したりの如く地に下おちたり』(路二二〇四四)とあれば、到底他人の想像の及ばぬ程の苦痛であらう。主は三人の弟子に『爾曹みこゝに待て目を醒しをれ』と戒めて、更に少しく彼らより離れ、地に跪ひざまき、『我父ちちよもしなかはい此杯さかづきを我よりはなち給へされど我心こころのまゝを成なんとするに非なず聖みこと旨めがねにまかせ給へ』と祈つた。斯く祈つたが尙ほ其苦痛に堪へかねて、弟子等の居る處に歸り來り、彼等の同情を求めんとしたが、それも無効であつた、何となれば彼等はいづれも疲れ切つて熟睡して居たからである。彼等の主に對する同情は、其睡眠に打ち勝つ程の力ちからのなかつた爲めに、『目を醒しをれ』と云はれたにも拘はらず、眠つたのである。主が彼等の眠れる状を見て、少なからず失望したが、『如此一時も我と偕ともに目を醒居ること能は



ざる乎惑に入らぬやう目を醒しかつ祈れその靈には願ふなれども肉體よわきなり」(太二六〇四十、四一)と云ふて、却つて彼等を責めず其肉體の弱きに同情した。彼は三度同じ祈禱を繰返し、三度弟子の處に歸り來つたが、三度とも彼等の眠れるを見た。主と偕に死せんと云ふたペテロも、また主の受くるバプテスマを受け、主の飲む杯を飲まんと決心したヤコブとヨハネも、揃ひも揃つて主の苦みをも察せず、熟睡したのは、よし其肉體の如何に疲れたとは云へ、實に冷淡極つたものと云はざるを得ぬ。彼等は其口で主を愛する程には、未だ其心で彼を愛する事の出来なかつたのは是彼等が未だ主の苦痛の何の爲めかを知らぬからである。後愛の人と云れたヨハネですらも、此の通り主を愛する心の冷淡なるは、未だ主の愛を知らぬからである。後に及んで彼は『主は我等の爲に生を捐たまへり』(約一書三〇一六)と語つたが、此時は未だ主の愛を悟り得なかつたが爲めに斯くも冷淡であつた。

ゲツセムネに於ける耶蘇には、一見矛盾のやうに思はるゝ點のあるには、何人も氣のつかぬ人があるまい。彼は弱者の友となつて、助けを與へたが、ゲツセマネに於ける

彼自身は、弱者中の弱者の如く見えた。彼は心の惱める者を慰め、失望せる弟子には『なんぢら憂ふる勿れ』と云ひて激勵したが、彼は今其弟子の同情を求めずには居れぬ程に、其心が惱んで居る。嘗弟子たらんとする人に向つては『我に従はんとおもふものは其十字架を負ふて我に従へ』と云ふたが、今や彼自身が涙を流して、其苦き杯の己より取り去られんことを天父に祈つて居る。セルサスおよびジュリアンの徒は、彼の死を恐るゝ念の深きを嘲笑したが、如何にも猛虎の鼠と變じた觀がある。斯る矛盾を如何に解決すべき乎は、是れ一大難問題である。

耶蘇は單に其死を恐れたとすれば、矛盾の甚しきもので、婦女子といへども、一旦死を決すれば、笑を含んで死に就くのは、決して珍らしからぬ事である。然るに彼は兼てより其死を覺悟したのみならず、救世の事業に己が死の欠くべからざるを知りながら、今更其死に臨んで、之を恐れたとすれば、前後矛盾したと云はねばならぬ。其死は人類に取つての贖となり、己れに取つての榮光に入るの途なるを知らば、寧ろ其死を歓迎すべきは當然なるに、之を恐れて避けんとするは何故であらう。その恐れた

のは單なる死ではなくして、メシヤとしての特別の死であつた。生あるもの、死あるは普通の事だが、メシヤとしての死を遂ぐるものは、世界中彼一人の外はない。是れ普通の人々の、其死の苦みを察し得ざる所以である。彼の死は我等には一種の秘義である。其死の苦みの深さを測量し得ざるは、其人類に對する愛の深さを測量し得ざるが爲めに外らぬ。けれども我等は彼の愛の如何なる性質なる乎を凡そ察する事が出来る。彼は己れと人類を同一視したのは、恰も親の己が身を其子と同一視するに異ならぬ。此同化作用により、親は其子の功過共に、己れ自身の功過の如くに感じて、或は喜び、或は悲むのである。他人と苦樂を共にし得ざるは、この同化作用を欠くからである。子を愛する親の、其子の犯せる罪を以て、自ら犯せる罪の如くに感じて苦しむのは、人間の經驗中に見る所である。耶蘇も亦この同化作用の爲め、換言せば其最深の愛の作用により、人類と己れとを同一視したから、人類の犯せる罪をば、己れが犯せる罪の如くに感じた。罪の責任は犯罪人其者の負ふべきもので、他人の負ふべきものではないと論ずる人もあるが、それは法律上の議論で、愛の上の議論ではない。罪ある子の爲

めに罪なき親の苦むのは、法律で解釋の出來ぬものである。何となればそれは愛の問題だからである。人類を子として愛する耶蘇は、人類の罪をば、己が罪の如くに感じ、十字架の死をば、罪の刑罰同様に感じたのは、聊かも不合理な事ではない。

今我等は耶蘇の苦みを知らんと欲せば、我等は彼の意識の中に入らねばならぬ。彼の自ら任じたメシヤは、イザヤの預言に示されたそれである。彼は其預言を熟讀したのみならず、その預言を以て己れを指したものと確信した。そして今や彼が其預言通りのメシヤの意識と實驗とを有つた。そして其苦痛を實驗すると共に、其苦痛の意義も十分に認識した。其預言に曰『まことに彼はわれらの病患を負ひわれらのかなしみを擔へり然るに我等思へらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるゝなりと彼はわれの愆のために傷けられわれの不義のために懲罰をうけてわれらに平安を與ふそのうたれし疾によりてわれらは癒されたりわれら皆羊の如く迷ておのゝ己が道にむかひゆけり然るにエホバわれら凡てのものゝ不義を彼の上におきたまへり』(五三〇四、五、六)と。この預言の如くに、われらすべてのものゝ重荷を己が身に負へりとするれば、彼の

心の痛みのいばかり深きかは、凡そ察せらるゝであらう。彼の苦みは天父に棄てられたと同様の苦みで、十字架上より『吾神わが神なんぞ我をすてたまふや』(太二七〇四六)と叫んだのも此苦みを表はしたのであらう。けれども其苦みの深さに至つては何人も測量する事が出来ない。

耶蘇はこの特殊の死を恐れたが、上よりの力の加へられた爲めに、泰然として其死を迎へた。ユダに案内された捕吏の一團が、ゲツセマネの園外に來つた。この一團はユダヤ人とローマ人より成つて居る。即ちユダヤの殿守りとローマの兵卒とより成り、或るものは捧を携へ、或るものは劔を帯びて、戦闘準備をしたのは、耶蘇および弟子の團體が、斃るゝまで抵抗するならんと預想したからである。氣の早いペテロが劔を抜いて、祭司長の僕の耳を切り落したが、主は始めより無抵抗を主義としたから、ペテロの舉動を戒め、『爾の劔を故處に収よ凡て劔を取るものは劔にて亡ぶべし』(太二六〇五二)といひて、己が身を敵の手に委ねたれば弟子等は其大言壯語したにも似合はず、『群の綿羊散るべし』との預言通りに、其身に危險の及ばんことを恐れて、何人も追は

ざるにも、疾く其姿を匿くした爲めに、耶蘇のみ獨り法庭へと曳れて往つた。

## 第二十七章 審判

耶蘇のゲッセマネの園外で捕はれたのは、夜半過であつたが、其處からそのまゝ曳れて、祭司長アンナスの邸に至つた。この人は祭司長と云はれて居るが、既に其職を去り、其女婿カヤバが代つて其職を執つて居た。けれども今も尙ほ其實權を握つて居たから。耶蘇を己が邸内に呼び、更に公式の審判に附するに先ちて、豫審をなしたのである。ユダヤの法律に依れば、重大事件を審判するのは、「サンヘドリム」といふ高等法院の役目だが、其審判を仰ぐには、相當の理由を添へて訴へ出ねばならぬ。然るに祭司長に取つて此事の頗る難事であつたのは、其嫉妬心から耶蘇を罪せんとしたからである。嫉妬は訴訟の理由とならぬから、正式に訴へんとするには、有罪の證據を擧げねばならぬ。無罪の耶蘇に有罪の證據なければ、僞證を作らんとしたが、是れも亦思ふやうに往かぬから、苦心慘愴の結果、本人の口より證據となるべき言を云はせんとて、祭司長が彼に『爾キリスト神の子なるか』と問ふた。是れ耶蘇の自ら神の子

キリストを以て任じた事を、耳にしたからである。此問に對して彼が『爾がいへる如し』と斷乎として答へた爲めに、之を以て神を冒瀆する大罪となし、斯る大罪を犯した以上は、他の證據を求むる必要なしとして、未だ正式に訟へざるに、彼の面に唾し、拳にてうち、其面を掩ひながら、『キリストよ爾をうつものは誰か我等に預言せよ』(太二六〇六八)と云ひて侮辱した。

主の侮辱され居る間に、ペテロが其同じ邸内で、大失敗をなした。彼は他の弟子等の如くに、其姿を匿さなかつたが、去りとして直ちに主の後を追ふて法庭に往く程の勇氣もなかつた爲めに主の姿を見失はぬ程の距離を隔て、其後を追ひ、遂に祭司長の邸にまで來つたのは、其成行きを見届けんが爲めであつた。彼が公然耶蘇の弟子を名乗つて従ふの勇氣なく、人目を忍んで陰かに従つたのは、其失敗の本であつた。祭司等の耶蘇を惡んで、其弟子の團體をば眼中におかなかつたのは、首領を失ふた彼等には何等の勢力もなきものと思ふたからである。けれどもペテロは己れの身の上にも、危険の及ばん事を恐れて、その弟子たるを匿さんとした。捕吏等が夜間の寒氣

に堪へかね、焚火して暖を取つたが、ペテロも亦もし陰かに彼等の群に加はらば、人に知らるゝの虞なしと思ひ、其群の一人の如くに装ふて、暖を取つて居たが、焚火に其面を照されたので、忽ち婢に見出され、『爾もナザレのイエスと偕にありとし』云はれて、さすがのペテロも前後の考もなく、狼狽のあまり、『我これを知らずまたなんぢがいふところの事を識得ざるなり』と答へた。彼は斯く答へて見たが、何となく其處に留りかねたと見へて、庭門を出でんとせしに、また同じ婢がペテロを指して、傍にありし人に『此人もかの黨ごもからの一人なり』とさゝやいたのが、その耳に聞へたから、再び耶蘇の弟子たるを拒んだ。其後間もなくペテロに耳を削れた人の親戚、彼の面を知りたれば、之を見て『我なんぢが彼と偕に園にありしを見しにあらずや』(約一八〇二六)といふた。馬可に依れば、『爾誠ごもからに彼の黨の一人なりそは爾はガリラヤ人なり其方言これに合かなり』(一四〇六九)といふた。此言を聞いたペテロが餘程狼狽したと見え、之に對する彼の答も亦彼に不似合なものであつた。曰『我神の崇たかりを受るとも爾曹がいふその人を我は識ざるなり』(可一四〇七一)と。恐怖の念に襲はるゝ時は、人の心の

錯亂するのは常なるが、此場合に於けるペテロは前後の考もなく全く夢中であつた。彼は三度までも主を知らずと云ふたが、是も暫時の間に起つた事であらう。彼は一時全く夢中であつたが、やがて夢より醒めねばならぬ時刻となつた。様々の悲劇の演ぜられて居る間に、時も次第に進んで鶏鳴晨を告ぐる時刻となつた。五里霧中に彷徨せるペテロも何處よりか響き來れる鶏聲に驚かされて俄然我に歸つたが、時既におそく、臍を噬むとも及ばなかつた。馬可が此時のペテロを左の如くに記した、『此時鶏二次鳴ければペテロイエスの鶏二次鳴く前に三次我を識すといはんといひたまひし事を憶おもひおこし且これを思おもひかへ反して哭なき悲かなめり』(一四〇七二)と。路加はこの時の耶蘇については『主身を回かへしてペテロを見たまへり』(寸二〇六一)と記した。主の一瞥には云ひ知れぬ深い哀の籠つたものと思はるゝ。此場合に於ける主とペテロとの對照も亦甚だ興味深く感ぜらるゝ。主は己がメシヤたるを告白するの結果、死を來たすとは知りながらも、大胆に之を告白して、毫も恐るゝ所のなかつたに反して、ペテロは主と偕に死ぬる決心を公言しながらも、全く別の人の如くに三度までも主を知らずと云ふた。羊の如く

柔和なる耶蘇は、却つて英雄の如く、之に反して其勇氣を誇つた丈夫の如きペテロは却つて匹夫の如くなつた。ペテロは己が一身の安全を圖ることに熱中のあまり、己れの誓約と主の警告とを全く失念したが、主は其嘲弄さゝる際にも、尙ほペテロの一身を案じ、其失敗を悲み、遠くより其慈眼を彼に注ぎ給ふた。

アンナスは己が私邸で、耶蘇の罪狀を調査したが、最後の判決を下すの權は「サンヘドリム」にあるが爲めに、公式の審判をなさんとて、夜明頃に俄かに議員を召集した。議員は祭司长、長老及び學者等を加へて、七十一人あつたが、果して是等の議員全體が召集に應じて出席せしや否やは甚だ疑はしい。特に夜間に議員を召集するのは違法すれば、出席したのは少數の議員であつたらう。また集會の場處も神殿の一室と極まつて居たが、此臨時會はカヤバの邸で開かれた、そしてその目的は耶蘇の罪の有無を審議するのではなく、唯死罪の宣告を下すにあつた。審判をなさず罪を定めたのは甚しき違法であるが、彼を憎むのあまり、一刻も早く死に處せんとて、斯くも違法の行爲を敢へてしたのであらう。重罪の場合には、特に慎重に審議するのは、彼等

の慣例なるに、夜間の臨時會に於て、しかも少數の議員で、耶蘇を死罪に定めたのは、重ね／＼の違法であつた。斯くまでその審判を急いだのは、夜明けなば民衆に妨げられんことを恐れたからである。たとひ議員等が彼を死罪に定めたからとて、直ちに之を死刑に處するの権力なれば、更に之をロマ政府の法庭に訴へて死刑の宣告を仰かねばならぬ。そこで甚だ不本意ながらも止むを得ず、之を方伯ポンテオピラトに訴へ出たのである。

耶蘇のピラトに訴へらるゝ前に、「サンヘドリム」でどんな審問があつた乎といふに、審判官は彼に向つて、『爾もしキリストならば我等に告よ』と命じた。此問に對しては前にアンナスの邸で、既に答へたるに、今また同じ問を再び繰返したのは、正式に議員の面前で答へしめんとしたのであるが、彼はこの問を發した動機を察し、之に答ふるの必要を見ざれば、『たとへわれ爾曹にいふとも信せざるべし又たとひ我なんぢらに問ふとも答ざるべし今より後人の子は大權ある神の右に坐せん』と答へた『さらば爾は神の子なるか』と問ひ返へしたるに、『爾曹がいへる如く我は是なり』(路二二〇六七以

下)と確答した。この答で彼の運命が定まつたが、既に覺悟の上の事なれば、泰然自若として其運命を迎へた。有司等も亦この答に接して満足したであらう、何となれば彼を死罪に定むるには、是れ以上適當な理由がなかつたからである。それ故に彼等この答を聞くや、『猶ほ證據を須んや我らみづから其口より聞り』と云ひて、其有罪の證據の手に入つたのを喜んだ。彼等はこの答を以て、死罪に當るべき冒瀆の大罪として、ロマの法庭に訴へ出たのである。

然るに斯る理由で彼をロマの法庭に訴ふるのは、少しく當を失して居る。ロマ政府の方針に依れば、政事上の訴訟は之を受理すれども、宗教上の訴訟はユダヤの有司等の審判に委託するを便利とした。然るに今耶蘇が自ら神の子なりと云ふたからとて、ユダヤの律法に依ればこそ、有罪なるが、ロマ政府より見れば、毫も罪すべき事ではない、何となれば是れ全然宗教上の事で、政事上の事ではないからである。ロマ政府の宗教上の紛争に手を觸れぬやうにしたのは、政策としては甚だ利口な事であつた。ロマ人は法律上の知識に於ては、他のいづれの國民にも優つて居たが、宗教上の知識

に至つては、皆無といふても過言ではない。特にユダヤ教については、全くの門外漢なれば、之に手を觸れて失敗を招かんよりは、寧ろ之をユダヤ人に一任するのは、自づからの爲めにも安全であり、同時にユダヤ人の権利を尊重する事になるから、一舉兩得の政策であつた。ユダヤ人も亦宗教上の紛争を其まゝ、ロマの法庭に持ち出したとて、受理されぬを承知なれば、宗教上の訴訟を政事上の訴訟の形式に変更する必要を感じた。路加に依れば、其訴訟は左の如くに變更された。『之を訟へいひけるは我等此人が民を惑し税をカイザルに納ることを禁み自ら王なるキリストと稱るを見たり』(二三〇二)と。此言の中にはピラトの神経を刺戟する色々の要素が含つて居る。第一は民を惑はしたと云ふ事である。苟も社會の安寧を維持する責任を以て、ロマ政府より派遣されは官吏なれば、己が管轄内に民を惑はすもの即ち社會の安寧を攪亂するものあるを聞かば、自ら責任上放任し置く譯には往かぬ。ユダヤ人はピラトの心理状態を十分吞込んで居たから、彼を動かす術をも知つて居た。ロマ人に宗教上の事を語るとも、馬耳東風なれば、今回の訴訟を悉く政事上の意義に変更した。第二はカイ

ザルに納税を拒んだといふことである。ユダヤ人は何人に拘はらず、ロマ政府に税を納むるを好まなかつたが、ロマ政府では權力を以て嚴重に之を取り立てるから、止むを得ず納めて居つた。もし耶蘇が民を教唆して、納税を拒んだとせば、謀反人の巨魁と視做され、随つてピラトも彼を寛大に處すべき筈もないが此訴訟は全然冤罪であつた。彼は未だ嘗て納税を拒んだことのないのみならず、却つて納税すべき義務あることを云ふた。『カイザルのものはカイザルに歸せ』といふたのは、ユダヤ人の能く知る所で納税に不服を唱へたものは、彼れではなくして、ユダヤ人であつた。耶蘇も亦ユダヤ人なる以上は、素よりロマ政府に好感を懷いた筈なく、特にロマ政府が權力を以て厭制を加へたからには、之を謳歌すべき筈もなかつたが、去りとして公然反感を懷いた事もなかつた。主の精神を最も能く理解した使徒パウロが『上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべしそは神より出ざる權なく凡そ有<sup>ある</sup>ところの權は神の立たまふ所なればなり……是故に爾曹貢を納よ……なんぢら受べき所の人には之に予よ貢を受べきものには之に貢し税を受べき者には之に税し云々』(羅一三〇一、六、七)といふた。されば



この訴訟の理由も亦僞證であつた、第三は王なりと自稱したとの事である。ユダヤ國が  
ロマ帝國の領土となつた後までも、尙ほ王が置かれてあつたが、それはロマ皇帝の許  
可を受けたものである。然るにもし皇帝の許可もなく、自ら進んで王なりと稱するも  
のあらば、ユダヤ國の王に叛するのみならず、ロマ皇帝に叛するものなれば、死を以  
て罰せらるべきは當然だが耶蘇は政事上の意味で、王と自稱した事のないのみならず、  
人民の彼を王となさんとした時ですらも、之を厭ふて避けたのである。彼もし政事上  
の王を以て自ら任じたならば、ユダヤ人は決して彼をロマの法庭に訟へぬのみなら  
ず、之を歓迎して王冠を捧げたであらう。彼のユダヤ人に棄てられたのも、政事上の  
王たるを欲せざる結果である。然らば是れも亦僞證であつた。以上三つの要點はいづ  
れもピラトの不問に附し難き重大事件ではあつたが、調査の結果いづれも其無根なる  
事が知れた。けれども第三の點については、ピラトも餘程慎重の態度を以て調査した  
やうに見ゆる。

ピラトは耶蘇を其公廳に入れたが、彼を訴へたユダヤ人は異邦人の公聽に入り

て、その身を汚がすを恐れて、戶外で其判決を待つた。ピラト耶蘇に向ひ、『爾はユダ  
ヤ人の王なるや』と問ふた。彼之に答ふるに先ちて、其問の意義を確めんとて、其王と  
は政事上の意義か、將た宗教上の意義かと問ふた。もし政事上の意義ならば、否と答  
へ、宗教上の意義ならば、然りと答へねばならぬ。そこで其意義を確めた後、『我國は  
この世の國にあらず、もし我國は此世の國ならば我僕われをユダヤ人に付さる爲に  
戦ふべしされど我國は此世の國ならざるなり』(約一八〇三六)と答へた。此世の國な  
らぬ國の王ならば、ロマ皇帝とは没交渉なれば、之を法律に問ふの必要がない。此世  
の國ならぬ國とは、如何なる國を指すかは、ピラトも理解し兼ねたが、兎に角不思議  
な事を云ふ人だと怪んだであらう。ピラトは多分好奇心に驅られた爲か、再び彼に向  
つて、『さらば爾は王なるか』と問ひしに、『爾のいふところの如く我は王なりわれこれ  
が爲に世にきたれりそは眞理について證をなさんためなりすべて眞理につくものは我  
聲をきく』と答へた。ピラトその答を聞けば聞く程、益理解が出来なくなつた。殊に眞  
理といふ語の、何の意なるかを解するに苦んだ。ロマ人は權力を解すれども、眞理を

解せぬ。もし彼はローマ人ではなく。ギリシヤ人であつたならば、容易に眞理といふ語を解したであらう。譯のわからぬ眞理といふ語を口にするやうな耶蘇ならば、國事犯として罰する程の野心家ではあるまいと考へた。最早や彼については何等の心配もなければ、其緊張した心の緩んだ爲めか、嘲弄の意を含めて、『眞理とは如何なるものぞ』と用もなき質問を發した。もしピラトが眞理の何たるを知らんと欲して、眞劔に此質問を發したならば、耶蘇も亦喜んで之に答へたであらうが、彼はピラトの心中を察し、之は答ふるの必要なしと見たから、唯沈黙を守つたのであつた。此場合に於ける彼の沈黙には眞に黄金の價値があつた。語るべき機會を求めて語つた耶蘇は、人に問はれてさへも尙語らなかつたのは實に深い理由のあつたが爲めであらう。ピラトも亦強ひて其答を求めんとせず、唯此事件は受理すべきものにあらずとして、『我はこの人に罪あるを見ず』と原告に答へた。ユダヤ人はいたく此答に驚いたであらうが、このまゝピラトの無罪の判決に服することも出来ねば、何とかして其判決を無理にも翻へさんとして、『彼はガリラヤより始て遍くユダヤを教へ此處まで來て民を亂せり』(路二三〇

五)と訴へた。ピラトはユダヤ人同志の宗教上の紛議に干渉するを好まず、殊に宗教上の理由で、死刑の宣告を下すが如きは、たとへ如何にユダヤ人に迫まらるゝとも、己が責任上到底承諾し得ざれば、何とか工夫して此事件に關する、責任を免れんと思ひを凝らしたのである。彼は神殿の財を盗んだとて憎まれ、ユダヤ教を輕蔑したとて嫌はれ、彼れ自身も亦ユダヤ人の間にその不人望なるに氣がついて居たから、其人望を恢復せんと欲した場合なれば、民の歡心を買はんが爲めに、其求めに應じて死刑の宣告を下したいが、無罪のものに有罪の宣告を下すに由なく、實に進退谷つたのである。然るにユダヤ人の口より『ガリラヤより始て』との言を聞くや、恰も活路の開かれたやうな思ひがした。耶蘇がガリラヤの人ならば、其地の領主ヘロデアンチバスの判決を仰ぐのは、彼に敬意を表するゝこともなれば、また自分の責任を免るゝこともなる。幸に今エルサレムに滞在在中なれば彼の許に送るに若かずとて、禮を厚うして耶蘇を彼に送つた。

此ヘロデアンチバスはガリラヤ及びベレアの分封の君で、其殘忍なるは父ヘロデ大

王に似て居るが、人物は遙かに劣つて居た。彼は其兄弟ピリゴの妻を奪ひ、それについて諫言を呈したパプテスマのヨハネの首を斬つた。彼は耶蘇の名聲の高きを聞くや、己が首斬きつたヨハネの再生ではあるまいかと恐れた。また彼の奇跡を行ふ能あるを聞き、是非一度之に面會せんと願ふて居た折とて、ピラトより送られた耶蘇を見て非常に喜んだ。ヘロデは其好奇心より、彼に奇跡を行はせんとしたが、素より應ずべき筈もなければ、様々の質問を發して其知慧を試みんとした。彼はそれにも答ふるの必要なしと見たから、何を問はれても一言も答へなかつた。祭司長および學者が頻りにヘロデに彼を訴へたが、一言の答もなき彼には、何等の判決も下すに由なく、また彼も判決を下すの意なく、唯奇跡を見んことを願ふたのみであつた。然るに何等の奇跡も彼より期待されず、何等の答も聞く事を得ざれば、最早や用なしとて、侮辱を加へたのみで、再びピラトに送り歸へした。路加傳に『（ヨハネ）華服を衣せ復ピラトに遣り』(二三〇一一)とあるが、この華服とは王衣ならんとの事である。嘲弄の意を示さんとして、之に衣せたのではあらうが、自ら王なりと云へる人に、王衣を衣せたのも、

遇然とは云へない。ピラトの安心も束の間で、再び難局に立たねばならぬ身となつたから更に其責任を免れんとて、工夫を凝らしたのである。

ピラトは更に一つの考を其心に浮べた。それは踰越節に當り、ユダヤ人の求めに従ひ、一人の重罪人を赦免する慣例のある事である。是れユダヤ人の歡心を買はんが爲めに、ロマ政府の定めた慣例なれば、彼はこの慣例に従つて、耶蘇を赦さんとした。ピラトに取つては、是れ實に其難局を切抜ける最善の方法であつたらうが、法律思想の發達したロマ人の所爲としては決して合法的とは云へない。大赦の慣例は罪人を放免するの目的で、決して無罪の人を放免するの目的ではない。耶蘇の無罪はピラト自身の主張した所なれば、大赦の慣例に依らず、當然放免すべき筈のものではあるが、之を大赦の慣例に従つて放免せんとしたのは、罪なきものを罪あるものと視做した不法の所爲であつた。彼が其確信通り、斷行するの勇なきが爲めに、斯る不法の所爲を敢へてしたのである。彼がロマ人たる特徴を傷けたのは、法律よりも自己の利益を重んじたからである。彼は耶蘇と對照させんとて、一人の恐るべき惡漢を撰んだ。聖書に

『時にバラバといふ者あり己と共に謀叛せし輩と同じく繋れ居たりしが彼等はその謀叛の時人を殺し、ものどもなり』(可一五〇七)と記されて居る。ピラト思へらく、もしバラバか又は耶蘇の中、孰れを赦すべき乎とユダヤ人に問は、十人は十人、百人は百人必らず耶蘇を赦せといふならん。彼等はバラバといふ名を耳にするさへ、恐れて居るからには、何人も彼を赦せといふ人あるまじと、果して人民はバラバの名を聞くや、誰も彼を赦せとは云ふものがなかつたが、耶蘇の肉を食はんばかりに、彼を憎んだ有司等が民等の答を躊躇するさまあるを見て、是れ一大事と思ひ、盛んに運動してバラバを赦せと云はしめた。是れもし耶蘇を赦せと云は、己れらの宿望の水泡に歸するを恐れたからである。有司等に壓せられた民衆は、心ならずも其恐るゝ惡漢バラバを赦せとピラトに乞ふたから、萬全の策と思ふたものも見事に破壊されて、また行詰つたのである。正義を取るの勇なき人の所爲は、重ね／＼の失敗となり、遂にピラトも其審判官たる資格を失ふに至つた。

ピラトの面前に立つた耶蘇は、如何なる判決を受くるも、毫も恐るゝ所なく、唯天

意に一身をまかせて、泰然自若として居たが、審判官はローマ人にも似合はず、其意の如く斷行するの勇氣なくして、惑ふて居るのは、面白しき對照である。審判官と被告とは恰も其位地を顛倒したかの觀がある。何故にピラトは斯くまで臆病であつたらう。今や彼は恐怖に襲はれ、如何にこの場合に處せんかに惑ふて居る。無罪の人に無罪の宣告を下すに何等惑ふ理由もなき筈だが、その惑はざるを得ざる理由があつた。法律上一點の疑をも容るゝ餘地なき事件なれば、惑ふには及ばぬ筈だが、尙その惑ふたのは、法律上疑點のあつたが爲ではなくして、全然利害の問題に、その心の捉はれたからである。ユダヤ人は無罪の耶蘇に死刑の宣告を下せと彼に迫つたが、彼はこの不法の要求を拒み兼ねたのは、人望を失はんことを恐れたからである。彼は是れまでの不人望に、更に人民の反感を買はば、その位地を危くするの虞がある。彼は正義よりも利益を重んじたから、その位地を堅うせんとして、無罪の耶蘇に死刑の宣告を下して、人民の歡心を買はんとしたが、己が妻に諫言されて、またも其心を悩ました。馬太傳に左の如くに記されて居る。『方伯審判の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるは此義人